科学の都市の大天使

きるぐまー1号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
科学の都市の大天使

【Ｎコード】
Ｎ２４１２Ｒ

【作者名】
きるぐまー１号

【あらすじ】
学園都市の学生で、上条当麻と同じ高校に通うレベル４の少年千乃　勇斗。彼は周囲で起こる、科学サイドの、そして魔術サイドの事件に、どんどんと巻きこまれ、そして自ら関わってゆく……
その過程で明らかになる様々な事実。　様々な事件を通して成長してゆく、少年達の物語。　文章作成初心者で見苦しい点も多いかと思いますが、あたたかく見守って頂ければ幸いです。

プロローグ（前書き）

初心者かつ初投稿です　よろしくお願いします。

プロローグ

学園都市――――第7学区、窓の無いビル。

一切の照明はなく、それでいて、大量の計器類からまたたく光が広大な空間を満たしている。

その空間の中央に存在する生命維持装置（ビーカー）の中に、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える男が逆様に浮かんでいる。

学園都市統括理事長
アレイスター＝クロウリー

その男は、ビーカーの中の赤い培養液に浮かんだまま、モニター越しに映像を見ながらつぶやく

「虚数学区・五行機関の制御可能化までの時間短縮のためには、”ハイブリッド”の覚醒が必要か…

さあ…、　　君は…、　　いったいいつ目覚める？」

言葉とは裏腹に、彼は唇を釣り上げ、楽しげに笑っていた。

プロローグ（後書き）

誤字脱字のご指摘やアドバイスなどございましたらよろしくお願いします。

ep. 1　9月1日ー1

「あー、やっぱり日が出てくると暑いなー」

まだまだ残暑が厳しく残る新学期1日目、彼――――千乃勇斗（せのゆうと）は、ぼやきながら学校への道を歩いていた。

（あーもー汗ばんできたぁ…）

勇斗が心の中で1人毒づいていると、後ろから走る足音が近づいて来る。

「おっす勇斗。おはよう」
「ういっす。おはよう」

勇斗は後ろを向き走ってきた少年ーー上条当麻に声をかける。

上条当麻――――幻想殺し（イマジンブレイカー）という謎の能力を持ち、もはやギャグとしか思えないほどの不幸体質を持つ少年であり、勇斗の親友である。

夏休みの初め頃に記憶を失い（上条とともにカエル顔の医者の常連だった勇斗だからこそ知り得た）、8月21日には学園都市最強の

レベル5、一方通行(アクセラレータ)を破って1万人近いシスターズを救い出したりと、このところハンパ無い事件に巻き込まれ続けている。

ちなみに余談であるが、勇斗は以前、「コーヒー事件」以来一方通行とも知り合いである。
（8月21日の事件の当事者両方と知り合いって…、よく考えればすげーなおい）

そんな事を思いながら勇斗は上条に話しかける。

「…で、その疲労具合を見るに…、またなんか事件に首突っ込んだだろ？」
「…くっ、何か俺が自分から進んでやったように聞こえるのは気になるが否定しきれない何かがある…！！　そーですよ！カミジョーさんはまた事件に巻き込まれましたよ！」

そう言って、夏休み中の武勇伝を語り出す上条の話を聞きながら、2人は学校へと向かった。

職員駐車場まで来ると、一人乗り用の車が停まろうとしており、2人が運転席を覗きこむと、頭脳は大人、見た目は幼女な2人の担任、月詠小萌(つくよみこもえ)がハンドルを握っていた。

「「ってオイ！ブレーキに足届くんかい！？」」

「とっ、届かなくったって運転できるんですー！」

ややあって、３人のやりとりが落ち付いた後、勇斗は小萌先生がもつクリアファイルについて尋ねた。

「あの…、先生、そのクリアファイルの中の紙束ってなんですか？…まさかいきなり抜き打ちテストですか？」

勇斗のそんな言葉を聞いて、上条の顔がサッと青くなる。

が、

「千乃ちゃん、上条ちゃん、先生は学生時代やられて嫌だったことはやりません。これは学校のお仕事とは違って、大学時代の友人から論文の資料集めをお願いされて、その手伝いなのですよ。」

「ふーん…　ちなみにどんなもんなんですか？　論文て」

「ＡＩＭ拡散力場についてなのですよー。」

その言葉を聞いて、上条はポカンとした顔をしている。

「えーあいえむ？」

「上条ちゃんがもう少し大人になったら勉強するんですけどねー。AIMは　An Involuntary Movement『無自覚』　ということです。まあ噛み砕いて言えば、能力者が無意識のうちに発してしまう力のフィールドのことですよ。」

「ふうん。例えば御坂（みさか）の体から微弱な磁場が漏れてるとかって感じか……」

「うん、まーそんな感じかな。」

上条の言葉に小萌先生に代わって勇斗が答える。

「AIM拡散力場は、能力者の能力の種類によって異なります。発火能力（イロキネシス）なら熱量、念動力（テレキネシス）なら圧力を周囲に展開してしまうといった具合ですねー。もっとも、どれも微弱なので精密機器を使わなければ計測できないレベルのものなんですけど。」

「へー。じゃ、もしもそのAIMナンタラを読み取る能力者がいれば、『ムッ、近くに能力者の気配がする』とかっつーマンガみたい

な真似(まね)ができるって訳ですか。」

「そうだな。もっと進歩すれば、ＡＩＭ拡散力場から能力の種類や強さを測る事もできるかもしんねーよ。『ムムッ、ヤツの戦闘力(せんとうりょく)は５３万だ』みたいな感じで。」

「まぁ、世の中にはそんな事に情熱を注いでる物好きさん達(たち)もいるのです。」

そんな話をしながら、勇斗と上条、小萌先生は校舎に向かって少し歩いたが、すぐに別れた。

「さーてそれじゃ行くか当麻。」

「ああ、だな。」

その後クラスでは色々とあったが…、割愛する。

特筆すべきことは、ＨＲ(ホームルーム)のときに上条家の居候(インデックス)シスターが乱入したこと。姫神秋沙(ひめがみあいさ)という上条の知り合いが転校してきた事だろう。

始業式が終わり下校前のＨＲが終わると、勇斗はジャッジメント１

77支部へとむかった。

「うっす初春。」

「あ、勇斗先輩。こんにちは。」

イスに座ってモニターの監視をしている花飾りを頭に載せた少女――――初春飾利に声をかけ、勇斗は自分の席につく。

「先輩…、早速ですけど報告です。今朝、学園都市外部から侵入者が1人、ゲートに攻撃を加えて無理矢理都市内に侵入しました。現在、『特別警戒宣言(コードレッド)』が発令されています。そして先程、白井さんが侵入者と思しき女性と交戦、一時は交戦したんですけど能力…のようなものを使われ、現在逃走しています。」

「…新学期早々そんな事になってんのかよこの街は」

勇斗は呆れながらつっこむ

「あはは…、で、現在、その侵入者は地下街にいるようで、現在固法先輩達が避難誘導に向かっています。先輩も合流をお願いします。」

「…了解、新学期早々だるいなおい」

そういいながらもテキパキと準備をすませ、勇斗は現場へ向かった。

設定資料１（前書き）

主人公の設定です

設定資料１

人物設定

Ｎａｍｅ：　千乃勇斗（せのゆうと）

学園都市で、上条たちと同じ高校に通う少年。
身長１７１ｃｍ　体重５８ｋｇ
性格は基本的には、お人好しと言ってもいいくらい優しい（甘い）
だが、好戦的な一面も持ち、怒ったときや本気になってしまったときは、容赦がなくなることが多い

黒い髪に茶色の目、ルックスは良く、人当たりのいい性格の良さから男女を問わず人気がある。

大能力者（レベル４）であり、有する能力は　御使顕現（エンゼルライズ）と呼ばれる。
能力使用時には背中に２枚の白い翼が出現し、身体能力が向上するという恩恵がある。
その翼は　飛行、攻撃、防御　ｅｔｃ．　に使用可能。
この能力には秘密があるようで、アレイスターからは『ハイブリッド』とも呼ばれる。

風紀委員（ジャッジメント）に所属し、初春や黒子、固法とは同僚である。
その能力と性格ゆえ、自ら前に出て戦闘を行うことが多い。

魔術に関して、当麻やインデックス、土御門からある程度の説明を受けており、本人も以前、第１２学区の神学系の学校で、科学的にアプローチした宗教などを学んでいるため、ある程度の魔術の知識を持っている。

以前、上条とともにカエル医者の常連だったため、上条の記憶喪失について知っている。

ep. 2　9月1日－2（前書き）

技術がほしいです。　まだまだ精進です。

ep. 2　9月1日―2

勇斗が地下街へと向かうと、ゲームセンターから上条、インデックス、そして見知らぬ少女の3人が出て来た。

（また新しいフラグでも建てたのか？）

心の中で少し呆れながらも、勇斗は上条に声をかけた。

「オイ当麻。」

「おーっす勇斗。なんだあ？」

あーっ、ゆーとだゆーとだ、と言って手を振ってくるインデックスに手を振り返しながら、勇斗は当麻の質問に答える。

「またフラグかコノヤロウそしてなんか今この地下街にテロリストが紛れ込んでるらしくて特別警戒宣言（コードレッド）も発令されてんだ。今から約９００秒後…、１５分後に捕獲作戦始めっから隔壁を降ろして地下街を封鎖する。銃撃戦になるかもだから、早めに逃げてくれ。」

「ちげー！！　つーかマジかよ！？」

と、当麻が驚愕するが、

「ま、お前の夏休みの凄まじさに比べりゃマシじゃねーの？」

と、勇斗が言うと、当麻は

「くっ…、やっぱ否定しきれねえ…」

そう言ってへこみ始める。

「…まあ当麻だけならともかく一般人（…？）もいんだから早めに逃げろよ。」

勇斗は自分が言った「一般人」という言葉に違和感を覚えながらさらっと毒を吐き、その場を去った。

そしてその後、合流した固法と共に避難の誘導をを行っていると、突然　ガゴン！！　と地下街全体が大きく揺れた。

「なんだこれっ…！？」

不意の振動に勇斗は思わずよろめき、そして更にもう一度巨大な衝撃が地下街を襲う。

全ての照明が消え、非常灯が作動する。　低く重い音と共に、隔壁が降り始める。

のんびりと出口に向かっていた人々が、一気にパニックに陥った。

そして出口付近にたくさんの人間が殺到する中、再び一際大きい振動が地下街を揺らす。

「くそっ…、固法先輩は何とかこの状況の収拾をお願いします！！俺はこの状況の大元を叩きます！！」

「…わかったわ、無茶しちゃだめよ！！」

その言葉に頷いて、勇斗は地下街奥へと走り出した。

戦場だ――――

勇斗はそう思った。

目の前の尋常でない傷を負った警備員（アンチスキル）、ぼろぼろの柱や壁がそんな印象を抱かせる。

（くそっ！！）

歯噛みしながら勇斗はそこを走り抜けた。

――――上条当麻はイギリス清教、シェリー＝クロムウェルと対峙していた。

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒（てごま）だって事を知ってもらわないと、ね？――――エリス」

シェリーがオイルパステルを回す。彼女の動きに引かれるようにエリスと呼ばれる巨大な石像が地を踏みしめて、拳を振り上げる。

バリケードを一撃で粉砕した拳。上条は避けようとしたが、地面の震動で移動できない。

（やべえ…、やられる！！）

バジン！！！

と大きな音がした。

「…ったく、無茶しすぎだって、お前は。」

「…サンキュー勇斗。」

勇斗は間一髪、拳と上条の間に割って入り、巨大すぎる拳の一撃を、背中から生える2つの白い翼で弾き飛ばす。

「…なんなんだ？てめぇのそれ。…天使？　いや、んなわけないか。　邪魔するってんならテメェも一緒に殺してあげるよ。」

そう言ってシェリーがオイルパステルを振るうと巨大な石像が再び腕をを振り上げる。

「…何なんだよコイツ。当麻、こいつもお前の知り合いか？」

「んな訳ねーだろ！」

「ま、だろうな」

そう言いながら勇斗は翼を振るい拳を受け止める。

何度も何度も繰り返される拳と翼の激突で辺りにたくさんの破片が飛び散ってゆく。

「エリスと打ち合うとかテメエほんとなんなんだよ！！」

「すげーだろっ！！」

そんなとき、闇の中、赤い非常灯の下、

さっき上条と共に居た少女が姿を見せる。

「…ッ、バカ野郎！！　なんで白井を待ってなかった！？」

周囲を飛び交う破片、それに対して全く無防備な彼女を、上条は助けようとするが、しかし、上条自身、破片にぶつかる恐れがあり、駆け寄る事が出来ない。

「風斬！！　早く伏せろ！！」

突然の叫び声にその風斬と呼ばれた少女がキョトンとした顔をした直後、弾かれた石の破片が風斬の頭を直撃した。

「くっ…」

勇斗は翼で拳をねじ伏せると、当麻と共に風斬の元へ向かう。

――――と、彼らの顔が驚愕に染まる。

彼女は頭に傷を負っていた、だが、その中身はただの空洞だった。

どうしていいか全く分からず硬直している2人の前で彼女は起き上るが、彼女の目がふと、すぐそばの喫茶店のウインドウをとらえる。

「いや……ァ、…な、に……これ!?　いやあ!!」

壊れかけたその身体からほとばしる絶叫に流石のシェリーも驚き、そのすきに風斬は闇の中へと走って行ってしまう。

「エリス」

シェリーが呟き、オイルパステルをふるうと、エリスと呼ばれた石像が近くの支柱を殴り付ける。

よって、勇斗や上条の周辺、そして通路に瓦礫や破片が降り注ごうとする。

「くっ…、おらあ！！」

勇斗は翼を振るい、人に当たりそうなそれらを次々に吹き飛ばしていく。

だがシェリーはそれに目を向けることなく、風斬を狙って闇の中へ消えて行った。

２人は驚愕状態から若干回復したのち、通路を塞ぐように崩れた天井を見ながら、情報集めの為に小萌先生に電話をかけた。

そしてそこでもたらされたのは風斬の正体――――彼女は学園都市に満ちるＡＩＭ拡散力場の集合体であるという事

それでいて、風斬は人間となんら変わらない、大切な存在であると言う事

2人は決心する。

「大事な友達を守る」という上条の決意

「親友のしりぬぐいはしてやるよ」という勇斗の覚悟

2人はそれらを心に持って、再び前に走り出した。

ep. 2　9月1日－2（後書き）

投稿後ではありますが、ちょいちょい修正が入っております。

どうかご了承ください。

ep. 3　9月1日ー3

2人は走り続ける。

爆撃でも受けたかのような破壊され具合の通路を飛び越え、先へと進む。

しばらく走り続け、2人はようやく風斬の姿を見つける。

石像の腕は大きく振り上げられ、今にも振り下ろされようとしている。

「…っ、やばい！！」

「当麻…、風になれ」

勇斗は背に翼を出現させながら言う。

「……えーとそれは、……！！　おっけー！」

「よし…、わかったなら、行けっ！！」

上条が地を蹴ると同時に勇斗は翼で風を巻き起こす。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

その風に乗って上条は、一気に風斬と石像に接近する。

その右手が今にも腕を振り下ろさんとする石像の腕を掴んだ。

石像の動きが、止まる。

そして、ビシリ、と音を立てて亀裂が走る。

「エリス？」

どこか遠くで、女の声が聞こえる。

「エリス。反応なさい、エリス！　くそ、あのガキどもか！？」

焦りが見え隠れする女の声を聞きながら、勇斗も上条達の元へ飛んでいった。

「エリス……。呆けるな、エリスッ！！」

怒りに震えた絶叫が聞こえる。

金髪の女は白いオイルパステルを掴み、すごい速さで壁に何かを書き殴った。

同時、彼女は何事かを早口言葉のようにまくし立てるとコンクリートの壁が崩れ落ち、数瞬で天井にまで達する石像が完成する。

それを見た上条は少女を守るように石像に立ち向かい、勇斗も上条の横に並ぶ。

その光景に風斬は驚き、金髪の女は笑みを引き裂く。

「くっ、あはは！何だあこの笑い話は。喜べ化け物。この世界も捨てたものじゃないわね、こういう馬鹿が二人もいるんだから！」

「ふん…2人もいれば」

「十分だけどな。」

勇斗と当麻は言う。

「……どう、して……？」

風斬は不思議そうに問う。

対して、上条は一瞬で答えた。

「理由なんていらねえだろ？　特別な事なんかじゃない。俺は思ったんだ、俺の友達を、助けたいって」

勇斗も続ける

「それに、警備員（アンチスキル）の人たちだって、君を助けたがってたよ。『まだ奥に、あの女の子が居る、こんなところで、休んでる訳にはいかない』って。」

風斬は、顔を上げる。

「まあ、みんな治療に行かせたからここに来れたのは…、1人だけどね。」

「…まったくお前らは。せんせーたちに命令するなんてとんでもないやつらじゃん！　おお、さっきの女の子！　大丈夫じゃん？」

ほらな、　と上条は言う

「……みんなお前が心配なんだよ。だからおまえは胸張って堂々と『助けて』、って言えばいいんだ。」

「「今からお前（君）に見せてやる。お前（君）の住んでるこの世界には、まだまだ救いがあるって事を！　そして教えてやる！！お前（君）の居場所（げんそう）は、これぐらいじゃ簡単に壊（こわ）れはしないって事を！！」

「…クソ、エリス―――　ぶち殺せ、一人残らず！　こいつらの肉

片を集めてお前の体を作ってやる！！」

シェリーは叫ぶと同時に、オイルパステルを振り、ゴーレムを動かす。

勇斗はそれを見て言う。

「させるかよ、　…黄泉川先生は風斬の保護を。」

「わかってるじゃん。…無茶すんなよ少年ら。月詠センセが泣くぞ。」

透明な盾を構えて、黄泉川は風斬の前に立つ。

勇斗と上条は頷いて身構える。

そして、

「いっっけぇぇぇぇぇぇ！！」

勇斗は翼に力を込め、石像（エリス）に向けて放つ。

放たれた白い翼は途中で幾筋もの光に分かれ、石像の身体を貫き、動きを封じる。

「今だ当麻！！」

「おう！！」

これを機と見て上条が石像（エリス）に突っ込む。

「チィッ！！」

石像の向こうから、シェリーの怒号が聞こえる。

「『神の如き者（ミカエル）』『神の薬（ラファエル）』『神の力（ガブリエル）』『神の火（ウリエル）』！　四界を示す四天の象徴、正しき力を正しき方向へ正しく配置し正しく導け！！」

オイルパステルによって歪（ゆが）んだ十字架が空気中に走り書きされていく。エリスの体が不気味な音を立てながら、一歩、前へと出る。

「なっ！？」

それを見た上条は動きを止めかける。　だが、

「なめんなよっ！！」

勇斗は背中の翼に更に力を込める。

「チィッ！！　エリス！！」

シェリーは狂ったようにオイルパステルを振り回す。翼に押されて

いるエリスの足が、より力強く前へ踏(ふ)み出される。

「ハッ！！　舐めてんじゃねーよクソガキがぁ！！　この程度のチカラでエリスを止められるものか！！」

「…ふーん、そう」

しかし、勇斗はゆっくりと告げる。

「ま、でも、なんにでも言えるけどさ、……少しは落ち着くことを覚えような。」

そして勇斗は演算をストップさせ、翼を消した。

シェリーにとって、それは予想外の展開だった。

そしてエリスの鈍重な体が、前につんのめった。

上条はそれを見て再び走りだす。

「くそ。やりなさい、エリス！！」

矢のように走る上条に対し、シェリーは慌てたようにオイルパステルを振るい、その命令に忠実に従い、エリスは拳を握る。

しかし案の定、失いかけていた体のバランスは完全に崩れ、エリスは前のめりに、ゆっくりと地面へ倒れていく。

上条は足のバネに全神経を集中させ、身を屈めるようにして、ほとんど地面を舐(な)めるような姿勢で、一気に前へと跳び、そのままエリスの足の間を突き抜ける。

直後、勇斗が再び翼を出現させ、エリスへの攻撃を再開する。

翼によってエリスの動きが再び拘束される。

上条はゆっくりと立ち上がって、前を見据える。

そこに、シェリー＝クロムウェルがいた。

「は、はは。何だ、そりゃ。これじゃ、どこにも逃げられないじゃない」

「逃げる必要なんかねえよ。テメェは黙って眠ってろ」

上条は、一切の手加減なしにシェリー＝クロムウェルを殴(なぐ)り飛ばす。

勇斗はエリスに突き刺した翼を一気に炸裂させる。

シェリーの細い体は、風に流される紙クズのように地面を転がり、エリスは粉々に砕け散った。

「ふう…　お疲れ、当麻。」

「うぃー、お疲れ勇斗。」

2人はそこで互いの仕事をねぎらい合う。

が、

「ふ。うふふ」

そこで、女の笑い声を聞いて、2人は勢い良くシェリーの方へ振り

返る。

彼女は倒れたまま笑っている。　ただし、その手に白いオイルパステルを握り締めて。

オイルパステルが地面に走り、模様のような記号のような、判読不能の何かが勢い良く床へと書き殴(なぐ)られる。

シェリーは檸猛(どうもう)に、それでいて可笑しそうに笑って、

「石像作りを上手く活用すりゃあ、こういう事もできんのさ！！油断してんなよ、ガキども！！」

瞬間、シェリーが描いた文字を中心点にして、半径ニメートルほど、彼女が倒れている地面が丸ごと崩れ落ち、地面に呑(の)み込まれるように姿が消える。

「くそっ！！」

勇斗と上条が慌てて駆け寄ったが、そこには空洞しかなかった。穴は深く、何メートルあるかも分からない。ただし、底の方から空気の流れのようなものを感じる。

「くそ…、地下鉄の線路だな。」

「ああ、逃げられちまった。」

勇斗と上条が悔しがっていると、動きの止まっていたエリスが、バラバラと音を立てて崩れていった。

「…何か、引っかかるんだよな。」

と、上条は言う。

「何か？」

「ああ。なにか…、あいつの行動に何か違和感があるんだ。」

しばらく、上条はは難しい顔をしてうつむいていたが、不意に彼は顔を上げた。

「…そうだ。あいつは言ってた。『戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒（てごま）だって事を知ってもらわないと、ね？　――――エリス』って。」

上条は続ける。

「あいつは最初から風斬だけを狙ってたんじゃない。戦争の火種が欲しいから、って、俺か、インデックスか、風斬の誰かを殺せさえすればいいんだ。」

そこで勇斗は気付く。

「じゃああいつは逃げたんじゃなく、新しい標的を狙いに行っただけか！？」

勇斗は彼女の標的の三人を考える。

その内、上条と風斬はここで自分と共に居る。

そして唯一、今ここにはおらず、警備員（アンチスキル）にも守られていないのは――――。

「まさか……。インデックスか！？」

上条は頷いた。

ep. 4　9月1日－4（前書き）

分量の都合でｅｐ4とｅｐ5に分けました。ご了承ください。

そして「設定資料1」に書き忘れていたのですが、勇斗は魔術について当麻やインデックス、土御門から説明を受けています。

その前提でご覧下さい。

ep. 4　9月1日―4

上条が警備員（アンチスキル）の女性にほとんど掴（つか）みかかりそうな勢いで話しかける。

「もうさっきのヤツは地下街にいないんだろ！　だったら何で地下街の封鎖（ふうさ）が解かれないんだよ！？」

「何度も言うように、地下街の管理とウチらとは管轄（かんかつ）が異なるじゃん。こちらも連絡をつけているけど、命令系統というものもあるし。封鎖を解くにはもう少し時間がかかるじゃんよ」

「くそ！」

そう毒づいて上条は壁を蹴る。

風斬はそんな上条を見て、様子が少しおかしい事に気づき、声をかける。

「何が、あったん……ですか？」

その声に、上条は少し黙(だま)った。言うべきか否(いな)か、迷っているようにも見えた。

そんな上条に代わって、勇斗が答える。

「あのゴスロリ女は逃げたんじゃなくて、次のターゲットとして、インデックスを狙い始めたんだ。」

「え……？」

「あいつは上条や風斬だけを殺すためにここに来たんじゃなく、特定の条件が合えば誰でも良かったっぽいんだ。で、その一人がインデックスだ。」

「そんな……」

上条は唇をかむ。

「警備員(アンチスキル)には掛け合ってみた。けど、地下街の封鎖はまだ解かれないって。あの分厚いシャッターが上がらないと外へ出られないのに！」

「……で、でも……それなら、あの人達に言えば。地上にも、警備員（キル）の人達はいっぱいいるんだから……保護してもらえば良いんじゃ……」

「無理なんだ。」

上条は即答する。

「どうしてですか？」

「インデックスは、この街の住人じゃない。警備員（アンチスキル）に見つかれば保護どころか逮捕されるかもしれない。……あくまで、かもしれないだけどな。可能性の話。一応、アイツにも臨時（ゲスト）発行扱いのＩＤはあるんだけど、特別警戒宣言（コードレッド）下なんて非常時じゃ役に立つかどうか分からない。免許証なりクレジットカードなり、他の身分証を見せろって言われても不思議じゃねえんだ。…まずいんだよ、それだと。アイツには『書類上の身分（パーソナルデータ）』がないんだ。カード、保険証、住民票、果ては自分の年齢、血液型、誕生日から何まで全部だぞ。インデックスなんて名前も明らかに偽名だしな。『外からやってきた怪しい人物』を捜している連中が、こんな空白だらけの人間を放っておくと思うか？」

そこまで言うと、上条は一人で歩き出した。風斬は慌ててその後を追う。

上条が向かったのは、床に空いた大穴の縁だった。

「やっぱ、行くならここから飛ぶしかねえか。くそ、すぐそこの隔壁を開けてくれりゃ簡単に先回りできるってのに！」

「……大丈夫、です。あなたが、行かなくても……助ける方法は、あります」

風斬は言う。

「化け物の、相手は……同じ、化け物がすれば良いんです」

勇斗と上条に、風斬はそっと笑いかける。

「私は……あの化け物に、勝てるかどうかは分からないけど、少なくとも、囮ぐらいはできます……、私が殴られている間に、あの子を逃がす事が……できます。私は、化け物だから。それぐらいしか、

できないけど……」

上条の表情が怒りに変わる。

「お前、まだそんな事言ってんのか！　良いか、お前がはっきり口にしねえと分かんねえなら、一から一〇まで全部教えてやる。お前は化け物なんかじゃねえんだよ！　俺達が何のために、誰のためにここまで駆けつけたと思ってんだ！　それぐらい分かれよ、何で分かろうとしねえんだよ！！　そんな風にされて嬉しいとでも言うような人間に見えんのか、俺達が！　インデックスがあんな化け物にお前が殴られているのを背に逃げるような人間だと思ってたのか！　ふざけんな！　たとえお前が俺達を見捨てたって、俺達はお前を見殺しにしたりはしねえんだよ！　できるはずがねえだろ！！」

「……だけど、それで良いんです。私は、化け物で良い……」

風斬は、目を逸らさずに正面から上条の、そして勇斗の顔を見て告げる。

「だから、私は……私の力で、大切な人を守ります。だから、私は……化け物で、幸せでした」

にっこりと笑って、風斬氷華（かざきりひょうか）はシェリー＝クロムウェルの空けた大穴の縁から、飛んだ。

大穴へと落下していく、その途中で彼女はそっと微笑んでいた。

「くそっ、俺も早く行かねーと！！　やっぱこっから飛ぶか？」

上条は焦って言う。

「落ち着け、当麻」

勇斗が落ち着いた声を出す。

「んなことしたら風斬に追い付くもくそもなく、怪我して終わりだ。そんなことになったら、それこそただの足手まといだぞ。」

「じゃあどうすんだよ！！　あいつをたった一人で行かせんのかよ！！」

「……簡単な話だろ。」

勇斗は言う。

「そこの隔壁（シャッター）をぶっ壊して、俺らも助けに行けばいい。」

勇斗と上条は学園都市の街並を前へ進む。

隔壁（シャッター）を勇斗の翼で破壊して地下街を脱出した2人はインデックスを探してビル街を走っていた。

勇斗は走りながら携帯を取り出して177支部に連絡を入れる。

「…初春か？　すぐに第22学区の監視モニターに変な土の塊が映

ってないかを調べてくれ。」

『了解です。……勇斗先輩の居る場所から西に４００メートルのモニターが不審な土の塊を発見、同時に不審な地面の振動も感知してます！！　位置コード…送信しました！！』

「サンキュー初春！！」

『…先輩、怪我しないように気を付けて下さいね。』

「…ああ、わかってるよ。」

勇斗は電話を切り、上条に情報を伝える。

「ここから西に約４００メートル、エリスはそこだ。」

「サンキュー勇斗！」

そして２人が西に向かって走ろうとしたそのとき、不意に、すぐそばのアスファルトが砕けた。

まるで見えない巨大な手で地面を叩きつけ、地面を割り砕いたように、明らかに不自然な現象だった。

「ちっ……！？」

「くっ……！？」

足を取るように陥没していくアスファルトを、勇斗と上条は慌てて横へと跳んで避ける。

「流石（さすが）に、簡単には呑まれないわね……」

横道から声がかかる。

勇斗と上条が視線を向けると、薄汚れたドレスを引きずるようにして、シェリー＝クロムウェルが立っていた。

やはりエリスの姿がない。

「…ち、やっぱりあの石像は先に行ってるか…　当麻！！　お前は先に行け！！」

「……良いのか？」

「お前の右手はこいつよりあの石像向きだ！！　それに、インデックスが待ってんだろ！！」

「…わかった！！　任せたぞ！！」

そう言って、当麻は再び走り出す。

「素直に行かせると思ってんのか？」

シェリーはオイルパステルを振ろうとする。

が、

「思ってるさ。」

勇斗は出現させた翼を振るい、風を巻き起こし、たくさんの土くれをシェリーに飛ばす。

「くっ…！？」

シェリーが顔を腕で覆い、土くれから身を守ろうとしている間に、当麻はすでに走り去っていた。

「……おい、幻想殺しを逃がしちまったじゃないか。この死亡フラグ野郎。」

「ふん、あんなんでフラグが立つほど俺が弱いとお思いで？」

「……つくづくムカつくクソガキだ。お前こそ、私の力を舐めすぎだよ！！」

そう言ってシェリーがオイルパステルを振るうと、アスファルトがめくれあがり、巨大な石の槍となって勇斗に迫る。

「この程度かよっ！！」

勇斗は再び翼を振るい、槍を叩き飛ばす。

「チッ、まだだよっ！！」

シェリーが再びオイルパステルで空を裂く。　すると砕け散ったアスファルトの破片それぞれが、散弾のように勇斗に向かう。

「くっ！！」

勇斗は翼で空気を叩き、地面を強く蹴って横に大きく飛んでその破片を回避する。

「ッけえ！！」

回避行動に移った勢いそのままに、勇斗は翼をシェリーに向けて放つ。

「チッ…！！」

再びオイルパステルを振るって厚いアスファルトの壁を作り出し、シェリーは勇斗の翼を防ぐ。

「…邪魔なんだよクソガキが！！　わたしは科学と魔術の戦争の火種を作る必要があるんだ！！　邪魔すんじゃねーよ！！」

「……アンタはなんでそんなに戦争にこだわんだよ。　なんか科学に恨みでもあんのか？」

「……お前はなんで能力者が魔術を使えないか分かるか？」

「はあ？」

「試したんだよ、今からざっと２０年ぐらい前に。イギリス清教と学園都市が、魔術と科学が手を繋ごうって動きがウチの一部署で生まれてな。私達はお互いの技術や知識を一つの施設に持ち寄って、能力と魔術を組み合わせた新たな術者を生み出そうとした。その結果が……」

彼女は首を横に振った。

彼女の言葉で、勇斗は上条から聞いた話を思い出す。

能力者が魔術を使えば体が破裂する。

そのせいで、土御門が危ない目に逢ったと言う事を。

「科学側と接触していたその部署は、同じイギリス清教の者によっ

て討たれた。互いの技術・知識の流出はそれだけで攻め込まれる口実にもなりかねねえから。　そしてそのとき連れられてきていた能力者の一人が、エリス。……私の友達だったやつさ。」

シェリーはポツリと言う。

「私が教えた術式のせいで、エリスは血まみれになった。施設を潰そうとやってきた『騎士』達の手から私を逃がしてくれるために、エリスは棍棒（メイス）で打たれて死んだの。」

シェリーはゆっくりとした口調で、

「私達は住み分けするべきなのよ。互いにいがみ合うばかりでなく、時には分かり合おうという想いすら牙を剥く。魔術は魔術の、科学は科学の、それぞれを領分を定めておかなければ何度でも同じ事が繰り返されちまう。」

「…だからってアンタしたことを正当化なんてできない。　あいつらが何をした？　争いたくないなんて大層なご高説説いてる割には、アンタは一体誰を殺そうとしてた？　科学に対して怒るのは良い。　哀しむのだって止めない。　けど、それを向ける矛先が間違ってる。　それを他人にぶつければ、アンタが嫌う争いが起きちまう。」

「……そんなのはわかってんのよ！！　本当に魔術師と超能力者を

争わせたくないとも思ってんのよ！！　笑いたければ笑い飛ばせ。どうせ私の信念なんか星の数ほどあるんだ！　一つ二つ消えた所で胸も痛まないわよ！！」

「……何で気づいてないんだ、アンタ」

「……何ですって？」

「結局、アンタの信念なんて、最初から最後まで一つきりだ。『大切な友達を失いたくなかった』っていうたったひとつなんだ。」

ep. 5　9月1日－5（前書き）

これで9月1日編は終了となります。

ep. 5　9月1日―5

勇斗は続ける。

「そのたったひとつの信念で考えろよ。　あいつらに……当麻とインデックスに、お前が言うような住み分けが必要だと思うか？」

勇斗は告げる。

「そんなもんなんか必要無いんだ。　だから、俺の親友を傷付けんじゃねーよ」

シェリーの肩がビクリと震えた。

シェリーの顔は、葛藤に耐えるように歪んでいた。

「――――我が身の全ては亡き友のために！！」[115]

しかし、彼女は勇斗の言葉を振り払うように絶叫した。

放たれるのは魔法名。

彼女の手の中にあるオイルパステルが閃く。

シェリーの周囲のアスファルトに紋様が走り、巻き上げられ、今までで最も巨大な槍が作られる。

「私は…この信念を選ぶ！！　私を止めたければ……力で止めてみせな！！」

泣きそうな顔になりながらも、強く叫ぶ。

「言葉ではもう止まらない、か……」

勇斗はそれを見て呟く。

「死んでしまえ、能力者！！」

泣き出す寸前の子供のような顔で、鬼のように罵声をあげ、シェリーは槍を勇斗に放つ。

星の数もある信念全てに納得し、それでも彼女はこの信念を選んだ。

なら、

「俺も全力でアンタを止める。」

翼をしならせ、力を込め、そして、放つ。

ガゴン！！　という音を立て、翼と槍が激突する。

そして一瞬の拮抗の後、翼が槍を消し飛ばす。

「は、はは。……マジかよ。」

驚愕で目を見開きながらも、どこか安心したような表情でシェリーは座り込む。

「……おい能力者、私を殺さなくていいのか。」

「……なんでそんなことする必要がある？」

「今は殊勝な事を考えてるけど、わたしの中には無数の信念がある。この先、何をしたくなるか、分かんないよ。」

「……自分の信念の根底をもう一度思い出せよ。それでもまだ戦ってんなら、また俺達が止める。」

「……ははっ、負けたよ。　……お前、名前は？」

「？　…千乃勇斗だよ。」

突然の質問に少し戸惑いながら、勇斗は応える。

「私はシェリー＝クロムウェルだ。」

集まってきた警備員（アンチスキル）に拘束されながら、シェリーは言う。

「お前達が、この世界を変えてくれ。」

「……ああ、わかった。　もちろんさ。」

勇斗がそう言うと、シェリーは微笑んで、車に乗り込み、連行され

ていった。

「……初春か？　向こうの方はどうだ？」

『モニターにはもう石像は映ってません。むこうももう終わったみたいです。』

「そうか、わかった。　サンキュー初春。　あとでなんか食い行こう。」

『はい！！　お待ちしてます。　先輩もお疲れ様でした。』

「おう。」

勇斗は通話を切り、1人呟く。

「まあ…、その前に、後片付けか。」

1人苦笑して、勇斗は警備員(アンチスキル)達と合流した。

「これで満足か？」

窓のないビルの一室で、土御門元春は空中に浮かぶ映像から目を離して吐き捨てるように呟いた。

巨大なガラスの円筒の中で逆さに浮かぶアレイスターは、うっすらと笑っている。

「かくして人間は駒のように操られ、また一つ虚数学区・五行機関を掌握するための鍵の完成に近づいた、という訳だ。」

虚数学区・五行機関。

「まさかその正体がＡＩＭ拡散力場そのものだなんて誰も思わないだろう。学園都市に住む二三〇万人もの学生の周囲に自然に発生する力が虚数学区を作っているなどと。そしてそれを制御するための鍵こそが千乃勇斗、上条当麻、風斬氷華、という訳か。まったく、風斬については、あくまで虚数学区の一部分とはいえ、あんなものに人為的に自我を植えつけて実体化の手助けをするなど、正気の沙汰とは思えない。」

と、それまで黙（だま）っていたアレイスターの口が開いた。

「これも虚数学区を御するための方策だ。『何をするか分からない』無自我状態よりも、敢えて思考能力を与えた方が行動を予測できるし、上手く立ち回れば交渉や脅迫なども行える。それに”ハイブリッド”たる御使顕現（エンゼルライズ）と幻想殺しが覚醒すれば、完全制御可能化までの時間が短縮できる。」

「そこまでして、虚数学区を制御する事に意味があるのか。　確かに虚数学区は学園都市の脅威だ。　だが、脅威とは内側だけにあるものではないぞ。　今回の一件によって、世界は緩やかに狂い始めた。　理由はどうあれ、イギリス清教の正規メンバーを警備員（アンチスキル）と能力者の手を借りて撃退したんだ。　聖（セント）ジョージ大聖堂の面々はこれを黙って見過ごすとは思えない。　まさか、お前はこの街一つで世界中の魔術師達（まじゅつしたち）に勝てるなどとは思っていないだろうな」

土御門の脅迫めいた声に、しかしアレイスターは笑みを崩さない。

「魔術師どもなど、虚数学区さえ掌握できれば取るに足らん相手だよ」

「なんだと？」

ふと土御門は背筋に嫌な感覚が走り抜けた。

もう一度、彼はＡＩＭ拡散力場の集合体、虚数学区・五行機関につ

いて考える。

それは赤外線や高周波のように、そこにいるのに見る事も聞く事もできず、

人間とは別位相に存在し、ある種の力の集合体によって構成される。

土御門元春は知っている。

その存在を、魔術用語で述べるとどんな言葉になるのかを。

（まさか、天使）

そして、虚数学区の住人――――風斬氷華（かざきりひょうか）を『天使』と表現するなら、彼女達が住んでいるとされる『街』とは、つまり……。

「アレイスター……お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつもりか！？」

「さてね」

対して、アレイスターはつまらなそうに一言答えるのみ。

土御門は戦慄しながらも、なかば負け犬が吼えるように吐き捨てる。

「ふん。これがイギリス清教に知れれば即座に開戦だな。今にして少し思う、オレはシェリー＝クロムウェルに同情すると。お前の言動を吟味する限り、ヤツのポジションは単なる悪役ではない。れっきとした、自分の世界を守るために立ち上がったもう一人の主役だろうさ」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作るには、まずオリジナルの天界を知らねばならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。お前以上に詳しい人間がこの星にいるか。そうだろう？」

土御門は、唇の端を歪(ゆが)めて、

「魔術師・アレイスター＝クロウリー」

その場はしばしの沈黙に包まれる。

「……丸っきり負け惜しみになるがな、お前に一つだけ忠告してやる。アレイスター」

「ふむ。聞こうか」

「オレにはお前が考えている事など分からないし、おそらく説明を受けても理解できないだろう。だが、あの御使顕現（エンゼルライズ）と幻想殺しを利用するというなら覚悟しろ。生半可な信念ぐらいで立ち向かえば、あいつらはお前の世界を食い殺すぞ」

彼が告げると、ちょうどタイミングを計ったように空間移動能力者が部屋に入ってきた。

三〇センチ以上も背の低い少女にエスコートされ、土御門はビルから出て行く。

誰もいなくなった部屋の中、逆さに浮かぶ男は一人呟いた。

「ふむ。私の信じる世界など、とうの昔に壊れているさ」

その言葉は、何も感じていないようにも、寂しげであるようにも、憤っているようにも、呆れているようにも、聞こえた。

ep. 5　9月1日ー5（後書き）

ちょっと字数的にアンバランスな分け方になってしまいました。

反省……

ep. 6　9月8日－1（前書き）

先日起きました地震に被災しまして更新が遅れてしまいました。私の住んでいるところはそれほど被害は大きくないのですが、やはりまだ物資の不足が厳しいです……。

あ、それでは久々の更新になります。よろしくお願いします。

ep. 6　9月8日―1

「……ったく、なんで学園都市(このまち)は騒ぎばっか起こんだよこんちくしょう。」

そう独り言をつぶやいて、勇斗は1人、裏路地を駆け抜けていた。

その前方には茶色い髪に白Yシャツの少年と、黒い髪に黒いポロシャツを着た少年が走っている。

「樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者の残骸(レムナント)とか……、怪しさ満点じゃねーか」

前を走る2人が口走っていた不穏な単語(ワード)。

樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者、

自動書記起動時(ヨハネのペン)のインデックスによって破壊された世界最高性能のスーパーコンピュータ。

一か月以上前に失われたはずのコンピュータの話をし、勇斗から逃げようとする少年達。

……事の始まりは約３０分前に遡る。

「……スキルアウトの能力者狩り？」

「はい。なんだか最近増えて来てるらしいんですよ。」

９月８日、シェリー＝クロムウェルによる学園都市への侵入事件から１週間たった日の放課後のこと。

いつものように勇斗と初春が会話していると、そんな話が初春から勇斗に教えられた。

「はぁ……、９月(あんな)１日の事件から１週間しか経ってねーのに早速増えだしたのか。」

９月１日の事件で第７学区、第２２学区などで損傷が与えられため、それ以来ぱったりと止んでいたスキルアウトによる能力者の襲撃。

それが、都市の復興が進むにつれ、再び増えてきたらしい。

「……しょーがない。ちょっと痛い目にあわせてくる。」

「……勇斗先輩、やりすぎはだめですよ?」

「わーってるよ。」

そう言って勇斗は１７７支部を出た。

第7学区の裏路地

そこに着くと、勇斗は1人奥へ歩いていく。

すると案の定、数人のスキルアウトに取り囲まれた。

「おーい。おまえこんなとこでなーにしてんのーwww」

「なんだー？迷子か―？www」

「あ、オイコイツ。風紀委員（ジャッジメント）だぞ。」

「おいおい。たった一人で俺達捕まえに来たのか？www」

「へー、すごいすごいwww」

鉄パイプ、チェーン、スタンガン、折り畳み式ナイフ

各自おもいおもいの武器を持って勇斗の周りに群がる。

言葉の端々に　ｗｗｗ　が付いているような、チンピラ(スキルアウト)どもの言葉を無視し、溜息を吐いて言う。

「全く……、テメーらみたいなのがいるからスキルアウト全体が誤解されるんだろーに。……チンピラどもが」

「ああ？テメェ調子のってんなよ！！？」

そう言って、１人が鉄パイプで勇斗に殴りかかってくる。

しかし、勇斗は流れるような動作でそれをかわし、そのまま体を回して回し蹴りを腹に叩き込む。

「グボォ！！」と声をあげ、そのままノーバウンドで壁まで飛んで

いくスキルアウト。

それを見て呆然とする残りの面々に勇斗は声をかける。

「能力者、っても能力バカばっかりとは限んないんだよね。」

勇斗はニッ、と笑った。

1分後、スキルアウト達は全員意識を刈り取られ、地面に転がっていた。

勇斗は1人1人に手錠をかけると、警備員（アンチスキル）に連絡をいれた。

「すいません。傷害事件の現行犯で４人狩(捕まえた)ったのでよろしくお願いします。」

そう言って電話を切り、１７７支部に戻ろうとすると、表の道を２人の少年が歩いていた。

片方の……、黒髪の少年は、携帯電話を耳に当て、誰かと話をしているようだった。

それは別に、おかしくもなんともない、よくある様子だった。

しかし、もう１人、茶髪の少年が周囲をチラチラと見て、警戒している。

ただ、通話しながら歩いている友人に危険がないように、周囲を見ているだけかもしれない。

だが勇斗は、何処となく怪しさを感じ、こっそりと聞き耳を立てた。

「……！！……！！」

「はあ……、ただの口げんかか」

なんだ勘違いか、と思い、溜息をついて勇斗がその場を立ち去ろうとしたとき、衝撃的な一言が勇斗の耳に飛び込んできた。

「……！！　樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者の残骸（レムナント）の運搬日は今日じゃない！！」

その一言を聞いた勇斗の動きが一瞬止まり、それから言葉を吐き出す。

「……樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者の残骸（レムナント）だって？」

「！」

音の無い一瞬に漏れ出したその声に、茶髪の少年が気付き、黒髪の少年に合図し、２人組の少年達は脱兎のごとくその場から逃げだす。

「チッ……！！」

怪しすぎる、と走り出しながら勇斗は思う。　あの感じ……、絶対裏に何かある。

「……ったく、なんで学園都市（このまち）は騒ぎばっか起こんだよこんちくしょう。」

そして話は冒頭に戻る。

先行する2人組は裏路地に入り、右へ左へと進路を変え、勇斗をまこうとしている。

しかし勇斗はそれを的確に追いかけて行く。

「残骸(レムナント)を手に入れて何しよーってんだあいつら……」

2人組との追いかけっこをしながら、勇斗は考えをめぐらす。

（まず考えられるのは樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者の復活……　だとするとそのメリットは……　研究時間の短縮、効率の上昇、妥当性の判断、天気予報の確実化……くらいか？　……研究の妥当性の判断？）

ちょっと待て、と勇斗は思う。

（まさかあいつら……、絶対能力進化計画(レベル6シフト)の再開が目的なのか？　もしそうなら最悪じゃねーか）

勇斗は眉をひそめる。

（この街のイカれた研究者たちの差し金なら十分あり得る。）

レベル6と言う未知なる領域、その過程でもたらされる超能力に関わるデータ。　それらは研究者にとってはとても魅力的だろう。

富や名声と言った欲に駆られた研究者達が飛び付くだろうことは想像に難くない。

1万人以上の妹達（シスターズ）を犠牲にし、一方通行（アクセラレータ）を絶対能力（レベル6）に進化させるために行われ、勇斗の親友、当麻によって止められた、あの最低最悪な実験。

（そんな実験が再開されるような可能性は全て摘み取らなきゃなんない）

そうでないと

（残った妹達（シスターズ）も殺されて、御坂はまた絶望行きだ。それに……被験者の一方通行（アクセラレータ）だって更に深い闇に叩き落されちまう）

「くそっ……！！ふざけんなよ！！」

勇斗は拳を強く握りしめ、走るスピードを上げた。

ep. 6　9月8日ー1（後書き）

本編にない部分を考えるのが難しい……

ep. 7　9月8日―2

勇斗がそのまま裏路地をしばらく走り続けていると、先行する2人組が突然走るのを止め、立ち止まった。

それを見た勇斗も10メートルほどの間合いを開け、立ち止まる。

「はー……、お前のせいで風紀委員（ジャッジメント）につきまとわれちまったじゃねーかよ！！」

「ご……、ごめん」

「ったく、おめーはいっつm「口ゲンカ中の所悪いんだけどさぁ……、残骸（レムナント）使って何するつもりか教えてくれない？」……まだおれ喋ってる途中なんだが？　……つーかなんだよ、残骸（レムナント）って。」

「とぼけんなよ。そっちの黒い髪のやつがさっき電話に向かって叫んでたじゃねーか」

「……風紀委員（ジャッジメント）のくせして盗み聞きかよ。」

「たまたまだ。……で、どうなんだ？」

「……そんな簡単に教えてもらえると思ってんのか？」

「……そうか。ならとっ捕まえてじっくり聞き出すか。」

そう言って、勇斗は背中から白い翼を展開させる。

「ハッ！　なめんなよ！！」

茶髪の少年が右手を振るうと　ヒュッ　という風切り音と共に、不可視の何かが勇斗の顔の脇を通り過ぎる。

勇斗は頭を振ってそれを避けるが、頬に一筋の裂傷が走る。

（くっ……、風力使い（エアロシューター）か？）

「おれのこいつは　真空刃舞（エアロブラスト）っつーんだよ！！」

ヒュパパパパパッ！！　と不可視の刃……カマイタチが勇斗に迫る。

「ちっ……！！」

ブォッ！！　パパパパパパッ！！

勇斗は翼を振るって目の前の空間を薙ぎ払い、カマイタチを消し飛ばす。

そして足に力を込め、強く地を蹴って一瞬で茶髪の少年に接近する。

が、

「俺のこと忘れてるよ？」

「！」

２人組のもう一方、黒髪の少年が勇斗に声をかける。

と、　ベガン！！　という音と共に宙を滑るように進んでいた勇

斗の身体が突然地面に叩きつけられた。

「ぐぁっ……！！これは……重力操作！？」

「重力統制（グラビドオーダー）、さ。今君には地球重力の３０倍の重力がかかってる。君の能力は……身体強化かな？　それが無かったら、君の内臓はぺっちゃんこだったね。……ああ、もちろん、動くなんて無理さ。」

「ハッ……、わりぃが意識をぶっ飛ばして、病院送りにさせてもらうぜ。しばらく目ぇ覚まさないようになぁ！！　ノコノコとついて来た自分の甘さを恨めよ！！」

茶髪の少年は右手をあげて風を集め、刃を生み出し、勇斗に向かって振り下ろそうとする。

と、そのとき、

バチバチバチッ！！　と電撃が路地裏を走り茶髪の少年に命中する。

「ガッ……！！」

電撃に意識を刈り取られ、茶髪の少年は地に倒れる。

（電撃……？　まさか！？）

「全く……、アンタちょっと油断しすぎなんじゃないの？」

現れたのは、学園都市、７人しかいないレベル５の第３位、常盤台中のエース、

「御坂！！」

彼女の姿を見て、そして名前を聞いた黒髪の少年は驚きに目を見開く。

「常盤台中の…御坂？　まさか……、超電磁砲（レールガン）！？」

「その……、まさかよっ！！」

再びの雷速の閃光。

黒髪の少年もまた、意識を奪われ地に崩れ落ちる。

「サンキュー、助かったよ、御坂。」

服に着いた汚れを払いながら勇斗は立ち上がる。

「いいわよ別に。　それで？　なんでこんな所でボコられてたわけ？」

御坂が地面に横たわる少年2人に目をやりながら勇斗に尋ねる。

「ああ……、何かあいつらが樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者の残骸（レムナント）がどうとかって

話しててな、気になって追いかけてたんだ。」

「で、あっさりやられてたと。」

「……あーそーだよ。油断してたよコンチクショウ。　……で、御坂はここで何してたん？」

「……アンタと同じよ。私も残骸（レムナント）を追ってたの。」

「……やっぱり『実験』か？」

「うん……、そうね。あの子たちの命が脅かされる可能性は、少しでも無くしたいから。あんな実験を、再開させる訳にはいかない。」

「だな。……御坂、おれも残骸（レムナント）の件、協力させてくれ。『実験』の時は何もできなかったけど……、今度こそ妹達（シスターズ）の役に立ちたいからさ。」

「……ありがと。助かるわ。」

「ああ、もし何かあれば当麻にも伝えておくよ。」

「えっ……、アッ、アイツは……、　　……わかった、お願いね。」

「……さっさとお前も素直になっちまえ。　ま、まずはこの転がってる連中から聞き出すか。」

勇斗は2人組を拘束しようと倒れたままの2人に近づく。

と、そのとき、唐突に2人組の姿が消え去る。

「「！！」」

驚く勇斗と御坂、その後ろから女の声が路地に響いた。

「それが、そう簡単にもいかないのよね。」

2人が振り向くと、そこには茶色い髪を後ろで2つに束ね、裸の胸にピンクの布を巻き付け、その上からブレザーを肩に羽織っているのみという、露出多めの服装の少女がいた。

「！！　……何なのアンタ？」

「あらあら、そう身構えなくていいわよ。第3位の超電磁砲（レールガン）とレベル4の御使顕現（エンゼルライズ）相手に、真正面から喧嘩を売るほどバカじゃないし。だから……、今日はもうお帰り頂こうかしら。」

そう言ってその少女はベルトから軍用の懐中電灯を取り、2人に向かって振った。

「「！！」」

気付くと2人は表通りにいた。

「な……、空間移動！？」

「ちっ……！！」

勇斗が再び路地裏に向かって走る。

しかしそこには、倒れていた少年達も、突如現れた少女も、既にいなかった。

ep. 7　9月8日－2（後書き）

話の中で出て来た能力についての簡単な補足

真空刃舞（エアロブラスト）　レベル４

風力操作系統最上位能力　カマイタチを生み出したり、空気の流れを操ったりすることが出来る。

重力統制（グラビドオーダー）レベル３

自分の周囲半径１０メートルの範囲における重力を自在に操ることが出来る。

ep. 8　9月14日ー1（前書き）

ちょっと年度末のバタバタなどで更新が遅れてしまいました

申し訳ありません…

それでは第8話です！！

ep. 8　9月14日―1

路地裏での件から1週間近く経ち、勇斗は風紀委員（ジャッジメント）として社会のオモテから、御坂は学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスター）としての能力を駆使して社会のウラから、件（くだん）の連中の調査を続けていた。

そして前日までの調査で、2人はいくつかの情報を掴んでいた。

「書庫（バンク）に検索（ハッキング）かけてみたんだけど……、学園都市にいる空間移動（テレポー）能力者（ター）は全部で58人。　うち、私とアンタ……、つまり複数の物体を同時に移動できるのは19人。　そしてあの時見た容姿と一致して、かつ、黒子と違って”自分の手を触れずに物体を飛ばせる空間移動（テレポーター）能力者”はただ1人、……霧ヶ岡女学院2年、結標淡希。こいつよ。」

「……やっぱりこいつか。　おれも調べる上でこいつにはつき当たった。　まあ調べた結果、分かったのは2年前に能力の暴走起こして足に大けが負ったってことか。」

「そうね。　それがきっかけで時間割（カリキュラム）りからドロップアウトしちゃったらしいわね。　超能力者（レベル5）を目前にして。」

「ああ。　あ、そしてもう1つ、結標、そしてこの前の黒髪、茶髪の一派は、学園都市の外部組織、科学結社（Ａｓｏｃｉａｃｉ？ｎｄｅ　ｃｉｅｎｉａ）ってのと接触を図ってるらしい。　回収した残骸（レムナント）から、樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者を復活させるために。　各々の目的まではは分からなかった。　ただ、あんなハイスペックな超高度並列演算装置（ミレーター）だ、欲しがる奴はいくらでもいる。」

「……そうなのよね。　まったく、やることだけは無駄に多いんだから。」

「その点なんだが……、俺と御坂で別行動を取ろう。　御坂は学園都市内部における残骸（レムナント）の回収、もしくは破壊に動く。　俺は外部に出て、外部組織の方をブッ潰して来る。　そうして、学園都市の内と外の2方向から同時に叩く。　これが確実で手っ取り早い。」

「うん……、そうね。　そうしましょう。」

「……御坂」

「……何？」

「当麻なら妹達（シスターズ）についての事情を知ってる。どうしてもやばくなっ

たらアイツを頼れよ。　アイツなら必ずお前の力になってくれる。」

「……うん。わかってる。……でも、今度は、今度こそは、私の力でどうにかしてみせる。　絶対に。」

「……ま、無理だけはすんなよ。」

勇斗の調査、そして御坂の連絡回線へのハッキングにより、学園都市による残骸（レムナント）の運搬日が９月１４日であることを掴んでいた２人は、その日に考えられるであろう結標一派の襲撃・強奪に備え、準備を進めていた。

そして、９月１４日、授業を終えた勇斗は職員室へと向かった。

「黄泉川先生、外出申請取ってきました。」

「おー、早かったじゃん？　まーよし、これで私は君を心おきなく『外』に連れて行けるじゃん。」

「はい。　なんかあっさり申請通ったんですよ。　良かったですよホント。」

「だなー。　よし、午後7時20分に職員駐車場に来るじゃん。」

「わかりました。それじゃまた後で。」

勇斗は学園都市外部の組織を叩くため、警備員（アンチスキル）である黄泉川の力を借りる事にしたのだ。

妹達（シスターズ）についての事情は全て伏せた上で、とある能力者の一派が、学園都市に敵対する外部組織と接触し、反逆を企てていると説明したのだ。

すると黄泉川は

「自らの利益のために子供たちを手駒にね……　全く、いいご身分じゃん。　いいじゃん、君に協力するじゃんよ。　私は、子供を守ると言う大事な目的があるからね。」

と言って、協力を約束してくれた。

勇斗は職員室を出ると、１７７支部へと向かった。

「勇斗先輩こんにちはー」

「おーっす初春。」

「お疲れ様です。お茶でも入れますか？」

「うーん……、じゃあ頼むよ。」

「わかりましたっ！！」

勇斗の返事に顔を嬉しそうに綻ばせて、紅茶の準備を始める初春。

（ふう……、やっぱりここにきて初春と話してると心が癒されるなぁ。最近はどうもきな臭い事件が多いからなあ。）

お茶の準備をしている初春の後ろ姿を見ながら、勇斗はぼんやりとそんな事を考えていた。

「はい、先輩。お茶です。」

しばらくして、初春がカップに淹れた紅茶を持ってきた。

「一生懸命紅茶の本読んで勉強したんですよ。　あと、マイカイ油っていう香料も準備してみたんです。　うまく淹れれたと思うので、味わって飲んでみて下さいねー。」

初春はとても嬉しそうに笑っている。

「うん、ありがと初春。」

勇斗は初春に微笑み返し、お茶を受け取って、早速一口飲んでみる。

「おー、スゲー……」

紅茶には、（というかお茶とかコーヒーとか、その辺全般には）全く詳しくない勇斗だったが、それでも、香りや味などがいつも以上であるように感じられた。

「うん、すっごく美味かったよ。」

「ありがとうございますっ！！」

満開の花のような笑みを浮かべて、初春は言った。

そんな、荒んだ心を癒してくれる至福の時間を紅茶を啜ったり、初春と喋って過ごし、　そして現在午後６時４０分。

（さて、……そろそろ仕事の時間か。）

溜息をついて勇斗はイスから立ち上がり、荷物をまとめる。

「じゃあ初春、悪いけど今日も先に帰るよ。」

「あ、はい。お疲れさまでした、先輩。……”頑張って来て下さいね”。」

「！！　　……おうっ！」

おそらくは、初春も何かに気付いたのだろう。

御坂と初春は、白井や佐天と仲が良いようだし、内輪で話にでもなったのかもしれない。

それに、おれが何かこそこそやってるのに気付いたりとか。

なにがあるかはわからない。けどなにかあることはわかってる。

……そんな感じか？

まったく、かなわねーなー

苦笑いを浮かべながら、勇斗は１７７支部を出た。

１人残る支部の中、初春は呟く。

「何も聞きませんよ、先輩。　頑張って来て下さい。」

誰に伝えると言う訳でもなく、独り言のように。

「心が荒んじゃったりしたときは、いつでも助けてあげますから。」

そして、モニターの前に座って街並を見渡す。

「……それじゃあ、わたしはわたしの仕事を続けましょうか。」

少しでも、勇斗の助けになるように。

ep. 8　9月14日ー1（後書き）

なかなか新生活の準備が進みません……

いつ引っ越せるんだろう…？

ep. 9　9月14日―2

勇斗は一度寮に戻って私服に着替えると、再び学校へと向かった。

「お、早いじゃん♪」

「少しでも急いだ方がいいかと思いまして。」

現在午後7時、予定の時間まではまだ少しあるが、2人は集合した。

「どうやら『ヤツラ』が動き出したみたいです。」

「そうなの？　じゃあ急ぐじゃん。」

「はい。」

２人は車に乗り込むと、目的地に向かって出発した。

学園都市を出て、しばらく走り続ける。

「『科学結社』の研究施設までは後３０分くらいかかるじゃんよ。
まだ少し時間あるから今の内に準備とかあればしておくじゃん。」

「おっけーです。」

と、そこに勇斗の携帯に着信が入る。

発信者を見てみると、御坂美琴、と表示されていた。

「どーした御坂？」

『……黒子が結標に襲撃されたわ。』

「何だって！？」

『……どうやら強奪された残骸（レムナント）を黒子が回収しちゃったみたいでね。アイツ直々に回収に来たみたい。』

「チッ……あのバカが。」

『それでね、私、今からアイツをぶっ飛ばして来るから。　アンタのほうもうまくやりなさいよ。』

「は？　ちょっ……」

ガチャッ、プープープープー

言葉に苛立ちの感情が滲み出ているような声を最後に通話は切れた。

「どうしたんじゃん？」

「……おれの後輩風紀委員（ジャッジメント）が結標に襲撃されました。　それで、対能力者について協力者である超能力者（レベル5）の第３位、御坂美琴が応戦するらしいです。」

「チッ、もう向こうも本気ってわけじゃん。　急ぐじゃん！！」

高速道路を走る車が、更にスピードを上げた。

「……ついたじゃん。」

午後9時

2人は目的地に到着した。

「……どうやら電子的な警備態勢（セキュリティ）は大したことないです。これなら、あと3分くらいで無力化出来ます。　それと、なんか内部には物理的なバリケードもあるようなんですが……、これはどうとでもなりますね。」

勇斗は携帯端末を操作しながら黄泉川に言う。

「オッケーじゃん。こっちはもう準備は終わってるから完了次第教えるじゃん。」

「りょーかいです」

勇斗はそう言って指を動かし続け、セキュリティを次々に解除していく。

「……あと３０秒くらいで解除完了します」

「よし。じゃあ６０秒後、突入するじゃん。」

黄泉川はそう言うと、対能力者・暴徒鎮圧用のゴム弾を装填した銃を構え、突入の体制を取る。

勇斗も端末をポケットにしまい、準備をする。

そして、

「……5、4、3、2、1、　突入！！」

その言葉を合図にして2人は建物の中に入っていく。

目の前には長い廊下、その向こうにはメインサーバールームがあるが、現在、その廊下をふさぐように机やイス、その他諸々で分厚く

バリケードが築かれている。

「全く、邪魔じゃんこれ。」

「下がってください。ふっ飛ばします！！」

勇斗は能力を発動、翼を展開し、それを振るい、烈風を生み出す。

その風はバリケードを吹き飛ばし、メインサーバールームの扉をひしゃげさせた。

「……すごいな勇斗、あれ、多分何百キロと重さあったじゃん？」

「気合いですよ、気合い」

バン！！　とひしゃげた扉を蹴り飛ばし、２人は部屋へと入る。

『こちらＡ００１よりＭ０００へ。符号の確認の後、状況の報告に……』

部屋の向こう側、恐らくは通信機器と思しき機械から少女の、結標淡希の声が響く。

「なっ……ななな何だお前ら！？」

モニターの前に座っていた連中と、護衛らしいスーツの男たちが慌てたように２人の方を見る。

「うっさいじゃん！！」

ババババ！！　と黄泉川はゴム弾を室内にばらまく。

弾が命中した人間は昏倒し、モニターや機械は致命的なダメージを受ける。

「くっ……、くそっ！」

そう言って何人かの黒スーツ達が銃を構えるが、

「遅ぇよ！！」

勇斗は翼を振るい、薙ぎ払う。

と、1人の男がすんでの所で翼をかわし、ナイフを抜いて勇斗に切りかかってくる。

「くたばれ！！」

殺った。　　男はそう確信した。

既に自分は翼の懐の中におり、能力は届かない。そして目の前の能力者は細身の体であり、接近戦であればプロの傭兵として鍛えられてきた自分が負けるはずがない。

（まずはこいつを殺す。それで学園都市に一矢報いてやる！！）

口元に笑いを浮かべ、勇斗の胸にナイフを突きたてようとする。

だが……

「だから遅いって」

「！！」

勇斗はスッと半身になると、男のナイフを持った腕……右腕を掴み、ひねり上げる。

と、同時に足を払い、男を地面に転がす。

「くっ……！？」

男はすぐに起き上ろうとするが、勇斗は男の喉元に翼をつき付けていた。

「テメェ……！！」

「何かこの前も同じこと言った気がするけど、……能力者っても能力バカばっかりとは限らないんだよねー」

ドガン！！

そして護衛の男たちは全滅した。

『こちらＡ００１よりＭ０００へ。こちらＡ００１よりＭ０００へ。こちら――って、聞こえているんでしょう！！　何でさっきから応答しないのよ！！』

部屋の中に苛立った結標の声が響く。

しかし、『科学結社』の連中には、そんな声にこたえる余裕はない。

「や、やめろっ。う、うつなッ。殺すなっ。壊すなッ。」

「自分の利益のために子供たぶらかせて安全席からご見物とは良いご身分じゃん？　私は子供に武器を向けない決まりを自分に課してるけど、子供のために武器を向ける事には迷わないじゃんよ」

「ひぃ……！？」

バン！！

銃声が炸裂し、建物内にいる勇斗と黄泉川を除く全員が沈黙する。

「殺すと思うか、アホ。アンタらがどれだけの子供達をどう手なず

けていたか、きちんと吐いてもらわなきゃその子達を助けられないじゃんか。」

『ッ！！　こちらＡ００１よりＭ００１へ。返事してよ！！　ねえ！！　こちらＡ００１よりＭ００２へ。誰でもいいから！！
……ッ！！　あああああああああああ！！』

ガシャン！！　ザ――――

通信機器からは雑音のみが響く。

「……よし、これで終わりじゃん。」

「お疲れ様でした、黄泉川先生。」

「勇斗もじゃん。」

――――――――――――――――報告

９月１４日　ＰＭ９：０４　学園都市外部の敵対組織、『科学結社』の壊滅を確認。

同日　ＰＭ９：０５　学園都市内部において、『残骸（レムナント）』の完全破損を確認。

これによって、樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者の演算機能復活可能性は０％に。

以上より、絶対能力進化（レベル6シフト）実験の再開可能性は消滅。量産型能力者、通称『妹達（シスターズ）』欠員の可能性も消滅した。

ep. 10　9月15日（前書き）

これで8巻まで終了です。

何だかんだで二桁話です。

まだまだ未熟者ですがこれからもがんばります。

よろしくお願いします。

ep. 10　9月15日

『残骸（レムナント）』事件の翌日。

朝、勇斗と上条は学校に連絡を入れて遅れる事を告げ、とある病院にやってきていた。

治療のためではなく、黒子と御坂妹のお見舞いのために。

事件に関わったのにもかかわらず、珍しく上条は怪我を負っていなかった。

彼らふたりと上条家の居候シスター、インデックスは、病室から少し離れた自販機コーナーと喫煙所を合わせたような談話スペースのイスにすわっていた。

「きのうはほんとにおどろいたんだよ。夜遅くにいきなり短髪がうちにきて、すごく焦ってたから、どうしたの？って聞いたら『妹達』をもう一度助けてって言って。それでとうまと一緒に走って出て行って。

……で、『つりーなんとか』とか『れむなんと』とかは知らないけど、とうまは”また”女の子をたすけて、でも『それなら、今から

残りの半分を果たしに行こう』とか格好良さげな台詞を吐いておきながら結局その後何の収穫もなかったんだって。」

「……うわー、マジかよお前……」

「うっ……。いや白井に教えてもらった予測ルートは辿ってみたさ。そしたら何か街の一角の窓ガラスが全部粉々になっててキャリーケースと精密機械っぽい残骸が木っ端微塵になって散らばっててそのビルの屋上にはボッコボコにされた女の子が引っかかってたんだよ！！」

「「……だから？」」

「えっ……？　えっと、誰だか知らないけどありがとうって感じ？」

「「はぁ……」」

「ちょっと待てなんで俺ばっかりこんな扱いなんだよ俺だって今回頑張ったのにー！！」

「「病院ではお静かに」」

「くそー！！」

上条の叫びが午前中の病院に響き渡る。

「なンか表がうるっせェなァ。　一体どこのお祭り野郎が騒いでンだァ？」

壁越しに上条の絶叫を聞いた一方通行（アクセラレータ）が呟く。

「さあ？知らないよ、ってミサカはミサカは知らないふりをしてみる。」

と、打ち止（ラストオーダー）めは一方通行（アクセラレータ）のベッドの上で足をバタバタさせて言う。

「結局ヨミカワが、お姉様（オリジナル）と『あの人』、の知り合いの風紀委員（ジャッジメント）の人と『外』に出て『科学結社』とかいう外部組織をぶっ潰してきたんだって、ってミサカはミサカはミサカ達のネットワークを通じて得た情報を発表してみたり。」

「あァそォ……」

「また『あの人』達にたすけてもらっちゃったな、ってミサカはミサカはしみじみしながらどうやって感謝の気持ちを伝えようか悩んでみる。」

「ふン……」

「あ、もちろん残骸（レムナント）を直接ぶっ壊してくれたあなたにだってとってもとっても感謝してるよ、ってミサカはミサカはやきもち焼いて拗ねちゃったあなたを労ってみる。」

「ば、バカなこと言ッてンじゃねェよッ！！」

「ふふふー？　そんな事を言ってる割に顔が真っ赤だよ？　ってミサカはミサカは驚愕の事実をお伝えしてみる。」

「こッ、このクソガキィィィィィ！！」

今度は、一方通行（アクセラレータ）の絶叫が病院に響き渡った。

その隣の個室では

「ほんとさっきからうるさいですわね。全く……なんなんですの？……まあいいですわ。さーあお姉様♪。この白井黒子にウサギさんカットのリンゴを食べさせる時間がやって参りましたのよ！」

「あーはいはい。　食べさせてあげるからアンタはまず落ち着きなさい！」

「あ、ああ……。お姉様の手で乱暴にベッドに押し倒されるこの感触。や、やはり体を張って肉弾戦で取り組んだのは正解でしたの。世界が、世界が今とても輝いて見えますわ！」

「アンタ絶対安静って言葉の意味知ってんの！？」

まったく、と言ってリンゴをむき始める御坂。

そこで会話が途切れ、静寂が訪れる。

その静寂を破るように、白井は口を開く。

「……いつか私も、お姉さまの隣で、並んで戦えるようになってみせます。」

「黒子……」

「今はまだ、今のわたくしでは、そこに立つ事もできませんの。無理についていこうとすれば、結果はこのザマですわ。」

「……」

「それでもお姉様は笑っていてくださいな。失敗してそれでも無事に帰ってこれた後輩を見て、何やってんだこのヘタクソと指をさして爆笑してれば良いんですの。わたくしはその楽しい思い出を糧として、もう一度立ち上がろうと思えるのですから。」

「……うん、わかったわ。　待ってるからね、黒子。」

2人は互いに微笑みあい、そして白井はこの言葉を糧にさらに上へと手を伸ばすことを決意する。

所変わって、談話スペース。

いまだ勇斗とインデックスの2人は上条をいじっている。

「「まったく、このフラグメーカーが」」

「それに関しては今回かんけーねーだろうが！！　っつーかせっかくお見舞いに来たんだからさっさといこーぜ！」

「ちっ、ごまかしやがったか。あー、あとちょっと待ってくれ。そろそろ来るはずなんだけど……」

「遅れてすみませーん！！」
「はぁ、はぁ……、待って下さい佐天さーん……」

「おー、やっと来たか初春、佐天。おはよう」

「おはようございます！　すいません、ちょっと寝坊してしまって！」
「おはようございます、勇斗先輩。　ほんとですよ、ふぅ、……何回も電話したのに全然起きなくてこまったんですよ―」

「大方明日の朝学校行かないから少しゆっくりできるって思って夜更かしでもしてたんだろ。」

「ぎくっ！！　あ、か、上条さんにインデックスちゃんじゃないですか！　お、おおおはようございますっ！！」

「佐天さん、いまごまかしましたよね……。しかもそれじゃ肯定してるのとほとんど同じですよ？　……おはようございます、上条さんにインデックスちゃん。」

「ああ、おはよう2人とも。」

「おはようなんだよ、かざりにるいこ。」

「勇斗、来るのってこれで全員か？」

「ああ。よし、それじゃ行こうぜ。」

総勢5人、彼らはぞろぞろと白井の病室へと向かう。

「お姉様お姉様お姉様ー！！」

「何で昨日の今日でもうそんなに活力溢れてんのよ黒子！――――、いや溢れてない！？　溢れてないのに気力だけでベッドから這い出ようとすんなアンタ本当に死ぬわよ！！」

白井の病室の戸を開けて5人が見たのは御坂との見つめ合いで興奮した白井を必死で止めようとする御坂の姿。

（（（（（（あ、ちょっとあの状態の白井（あいつ）には絶対関わりたくない……））））））

日本語が崩れながらも5人は意思疎通。

そっと、5人は扉を閉めた。

「ちょ、ちょっと!!　誰か助けなさいよー!!」

「さーあ　お、ね、え、さ、ま♪　もうお邪魔はいませんわよー、
ぐへへへへ」

「もー！！　だれかー！！」

絶対安静であるから電撃を放つ訳にもいかず、力づくで引き剥がす訳にもいかない。

「ぐふふふふ、ふふふ、ふふふふふ」

「ちょっ！？　こわいこわいこわいー！！」

御坂の絶叫も病院に響き渡った。

ep. 11　9月19日―1（前書き）

大覇星祭編、開始です。

……長くなりそう

ep. 11　9月19日―1

「暑ァあああー……」

「まったくだぁぁぁぁぁぁ……。　くそっ……、毎年毎年、いくら大覇星祭が楽しいってもこればっかりは最悪だ……」

「この街は、校長先生が多すぎると思う……」

現在９月１９日、午前１０時３０分。

学園都市内の全学校が合同で体育祭を行う、世界最大規模の体育行事、大覇星祭の開会式が人工芝のサッカースタジアムで行われ、その合成樹脂の人工芝すらも溶かすかのような厳しい残暑の中、１時間以上掛かって、ようやく終了した所である。

そのスタジアムの中、勇斗と上条がうだっていた。

彼らは半袖短パンの体操服を着て、頭には白いハチマキをまいている。

「つーか当麻、お前御坂と賭けしたんだって？　学校順位で負けた方が何でも言う事聞くって」

「ああ……。今更ながら何されるか不安になってきた。ま、……待てよ。まさか日が落ちるまで超電磁砲（レールガン）のキャッチボールとかじゃ……？　……でもまあ、勝てばいいか、勝てば。」

「はぁ……、お前常盤台（あんな学校）中学と勝負するとかさー。もう勝負なんねーって。……ご愁傷さま、当麻。」

「ひどっ！！　でもいくらあいつらが名門っても中学生でしかも女子校だぜー。体育の延長上のこの祭りで、ワタクシ達コーコーセーに勝てるわけないでしょーって上条さんは思う訳ですよ。うん！！」

「……生身でホワイトハウス攻略できるって言われてる奴等によくそんな事言えるなお前。」

「……へ？」

「ま、せーぜーがんばれよ。応援くらいはしてやるから。お前のことだから多分……いや絶対なんかの事件に巻き込まれると思うけどな。」

聞いてねー！！　と後ろの方で叫ぶ上条を連れて、勇斗はスタジアムを出る。

「とうまー。ゆうとー。」

と、不意に横から少女の、インデックスの声がかかる。

「2人とも……、私はお腹がすいたかも」

「「まだ午前中なのにもう腹減ってんのか！？」」

勇斗と上条は心の底からツッこむ。

「うう、でもそこかしこから何とも言えない匂いがただよってきてそれどころじゃないんだよ」

大規模な運動会とはいえ、各生徒の競技時間は意外と少ない。屋台で稼いでおくと打ち上げが豪華に出来ると言う事で、１８０万人を超える学生の父兄や、大勢の観光客をターゲットにした屋台が多く出店している。

「あ、あぅぅ……。日本の料理文化は食という名の誘惑の塊かも」

「大丈夫だインデックス。後で当麻が一緒に回ってくれる」

「そうだな。後で時間作ったら一緒回るか」

「うん……、……ん？　後で？」

「ああ、もう棒倒し始まるからそろそろ行かないといけないんだ。」

「そうそう。ほら、これがさっき家でも見せたパンフレット。ペンで印付いてるトコが、今日ワタクシ達が参加する種目の競技場だから。　お、勇斗、そろそろマジで時間やばいぞ。」

「だな、じゃあ行くか2人とも」

「わああ！　き、今日のふたりは何だかものすごくドライかも！」

そう言って3人は歩き出すが、インデックスは　あううー……、と言いながらふらついている。

勇斗と上条は通りかかった売り子から弁当を1つずつ買い、それをインデックスに押し付けながら競技場へ向かっていく。

そして2人はインデックスと別れ、選手用入口から競技場へ入る。

そして控え所に着く。　……が

「うっだー……。やる気なあーいーぃ……」

と言った青髪ピアス筆頭に、クラス全員熱中症寸前のような顔で沈み気味だった。

「ちょ、ちょっと待ってください皆さん。何故に一番最初の競技が始まる前からすでに最終日に訪れるであろうぐったりテンションに移行してますか？」

「にゃー。テンションダウンは致し方ないことですたい。何せ開会式で待っていたのは１５連続校長先生のお話コンボに怒濤のお喜び電報５０連発。むしろカミやんは良く耐えたと褒めてやるぜーい……」

と、土御門――――科学にも魔術にも通ずる多角スパイ――――は言う。

「ま、確かにしゃ―ねーわなあれじゃ」

勇斗もため息をつく。

と、

「な、何なの。この無気力感は！」

という声と共に、半袖短パンの上に大覇星祭運営委員のパーカーを着た少女、吹寄制理が到着した。

「……まさか上条、貴様がだらけたせいでこうなったんじゃないでしょうね！？」

「え、いや。これ俺のせいじゃないし！　今来たばっかだし俺！！」

「つまり貴様が遅れて来たせいね！」

「なにがあっても俺のせいにしたいのか吹寄は！！」

……そんな訳で、２人のドタバタは続く。

「……ひどい目にあった……」

「ドンマイ当麻」

吹寄による上条への説教タイムが終わると、彼女は他のクラスメイト達にも喝を入れるべく、歩いていった。

だがそれでも、このだらだらムードはおさまらなかった。

「……これ、ダメじゃね？」

「かもな。」

ヤバいヤバい、と上条は呟きながらふらふらと体育館の壁に寄りか

かり、勇斗もそれについていく。

すると、そんな2人の耳に体育館の陰の方から男女の言い争う声が聞こえてきた。

2人が覗き込むと、チアリーダーの衣装の2人の担任の月詠小萌と、この暑い中、スーツをぴっちり着込んだ男の先生が居た。

嘲る男の先生に、小萌先生が食い下がっている。

「だから！　ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです！　でもそれは私達のせいであって、生徒さん達には何の非もない

のですよーっ！」

「はん。設備の不足はお宅の生徒の質が低いせいでしょう？　結果を残せば統括理事会から追加資金が下りるはずなのですから。くっくっ。もっとも、落ちこぼればかりを輩出する学校では申請も通らないでしょうが。

ああ、そういえば、大能力者（レベル4）が１人いたんでしたっけ。まあお宅のような学校で発現するなんてどうせまぐれでしょうが。早く転校させてあげた方がその子の為じゃないですかねぇ？

　それに、聞きましたよ先生。あなたの所は一学期の期末能力測定もひどかったそうじゃないですか。まったく、失敗作を抱え込むと色々苦労しますねぇ」

「せ、生徒さんには成功も失敗もないのですーっ！　あるのはそれぞれの個性だけなのですよ！

大能力者（レベル4）の勇斗ちゃんだってみんなと楽しくやりながら努力してるし、、みんなだって、一生懸命頑張っているっていうのに！　それを……それを、自分達の都合で切り捨てるなんてっ！！」

「それが己の力量不足を隠す言い訳ですか。はっはっはっ。なかなか夢のある意見ですが、私は現実でそれを打ち壊してみせましょうかね？

私が担当、育成したエリートクラスで、お宅のエースと落ちこぼれの仲間達を完膚なきまでに撃破して差し上げますよ。

うん？　ここで行う競技は『棒倒し』でしたか。　いや、くれぐれも怪我人が出ないように、準備運動は入念に行っておく事を、対戦校の代表としてご忠告させていただきますよ？」

「なっ……」

「あなたには、前回の学会で恥をかかされましたからねえ。借りは返させていただきますよ？　全世界に放映される競技場でね。一応手加減はするつもりですが、そちらの愚図な失敗作どもがあまりに弱すぎた場合はどうなってしまうのかは、こちらにも分かりませんねえ」

はっはっはー、と男の先生（スーツ野郎）は笑いながら立ち去っていく。

「……、違いますよね」

ポツリと、小萌先生は言った。

「みんなは、落ちこぼれなんかじゃありませんよね……？」

泣くのを必死にこらえるような声で、
全ての責任を自分が背負い込むように、
拳を握りしめて彼女は立ち尽くす。

2人はそれを黙って見つめ、そして振り向く。

2人と同じように、今のやり取りを聞いていたクラスメイトが立っていた。

「おいお前ら、今の話、聞いたよな。」

静まり返った空気の中、勇斗は言う。

そして上条が締めくくる。

「……テメェら絶対勝つぞ、この勝負。」

同時刻。

「やっぱり暑いわねー……」

「ですねー……。もう9月も後半なんですけどねー……」

御坂と初春は棒倒しが行われる会場の学生用応援席にいた。

2人の目的は上条と勇斗の応援である。

「それにしても……、最近御坂さん素直ですよね。前までなら上条さんの話題振るといっつもツンツンしてたのに。」

「えっ？　なっ、ななな何言ってるの初春さん？　わっ、わたしが何に対して素直になったってっ！？」

「ふふふっ、御坂さん。顔真っ赤ですよ♪」

「！？」

御坂はバタバタバタ、と熱を帯びる顔に下敷きで風を送る。

誰か知り合いに今のやりとりを見られていないかと御坂が周囲を見渡すと、すぐ近くにインデックスがうつぶせに倒れていた。

その近くには、空になった弁当箱が２つ置いてある。

その状況で、インデックスは、

「……お、おなか減った……」

「……今ここで弁当２つ食った直後じゃないのアンタ。」

「うー、……あ、短髪にかざり。　ここでなにしてるのー？」

突然の質問に御坂はどもる。

「え？　な、なにっｔ

「わたしは勇斗先輩の応援です♪　それに、上条さんもいますしね。」

……私もアイツの応援に来たのよ。」

「ふーん、それじゃわたしとおんなじだね。じゃあ一緒に応援しよう？」

「もちろん！　いいですよ。」

「ま、いいわよ」

そう言って、3人はグランドに目を向ける。

ちょうど選手入場の時間だった。

「そういやアイツらの相手校ってどんな学校なの？」

「あ、はい。えっと……スポーツ重視の私立のエリート校ですね」

「そんなところにとうまたち勝てるの？」

「いやー、まともにやったら厳しそうねー」

「ですよねー……」

「むー、そうなんだー」

3人が相手校を見ると、スポーツのエリートらしく、簡単な柔軟体操にも専門的な匂いを感じさせているように感じられた。

適度な緊張を運動力に変換できるような顔つきをしていて、公式試合にも慣れているようだ。

彼らは校庭の自陣側に集まり、各クラス一本ずつの棒を立てていく。

3人は首を振って、対する勇斗や上条達の学校へ目を向ける。

2人の学校は進学校でも何でもなく、本当に個性のない『極めて一般的な学校』だ、と御坂と初春は思っていたが、

そこに、……本物の猛者(もさ)達がいた。

無言のまま、勇斗と上条の2人を中心に肯定に横一列に並んでいる。

数百単位の能力の余波がぶつかりあい、ドゴゴゴゴ、という音を立てる。

「な……、何なのアレ？」

「なんか……、すごく気合い入ってますね……」

「いつものとうまたちとは違うかも……」

状況を呑みこめない少女達を尻目に、競技開始のアナウンスが入り、いよいよ棒倒しが始まった。

ep. 12　9月19日ー2（前書き）

そういえば。

この作品では御坂とインデックスは原作より仲がいいです。

……完全に作者の好みです。

ご了承くださいませ（。ー人ー。）

では、最近の時間の都合で少し短めですが12話目です。

ep. 12　9月19日―2

競技開始の合図と共に勇斗は白い光の翼を展開し、２枚の翼で空気を叩き、烈風を巻き起こす。

その風は、水をまき、湿らせてあるはずのグラウンドから土を引きはがし、強烈な砂嵐となって敵陣に着弾する。

「みんな行きなさい！！」

吹寄のその声に応え、何人もの生徒が、防御によって初動が遅れている敵に向かって走って行く。

「吹寄ぇ！！　俺も出るぞ！！」

「わかったわ！！　行ってきなさい！！」

「こっちがやばくなったらすぐ呼べよ！！」

そう言って勇斗も敵陣へ向けて”飛ぶ”。

飛びながらも敵陣から飛んでくる攻撃を翼で打ち払い、最前線を走る上条に追い付く。

「行くぞ当麻。　小萌先生にあんな顔させた連中、許すわけにはいかねーだろ。」

「もちろんそのつもりだ。絶対勝ってやる」

と、そこへ、

（勇斗くん、上条くん、聞こえる？　敵とぶつかる５メートル手前までいったら、いくよ？）

（（了解！！））

２人は頭に響く念話能力（テレパシー）に返事をし、互いに、そして後続の味方とアイコンタクトを取る。

そして、　両軍衝突の直前、

（行くよ！！）

（（おう！！））

「おらぁっ！！」

と、勇斗は急停止し、背の翼を周囲の地面に叩きつける。

後ろからは念動能力者（テレキネシスト）達が能力で地面を抉り取る。

競技場に土煙が舞い上がり、一瞬にして視界が０になる。

「「「「今だっ！！」」」」

と言って勇斗や上条達は一気に敵陣の棒に襲いかかる。

正面からスポーツとして争えば絶対に負けるに決まってると踏んだ彼らは、両軍が激突する寸前で能力を地面に放って土煙を上げ、敵軍の視界を奪って奇襲を仕掛ける電撃戦に出たのだった。

１本の棒には２０人掛かりで飛びかかり、抵抗させる間も与えず、棒を引きずり倒す。

また、他の１本には遠距離から勇斗達の学校の念動能力者（テレキネシスト）達が棒の上部に念動力を叩き込み、棒を弾き飛ばす。

視界が奪われ、自軍が襲撃されているというプレッシャーの中、相手校のエリート共は言葉を漏らす。

「く、くそっ……。　こんな大能力者（レベル4）1人くらいしかまともな戦力がいないような学校に負けてるなんて……」

「フン……」

返事とばかりに勇斗は翼を振るい、自陣に能力による攻撃を加えている連中を薙ぎ払う。

「確かに俺らの学校はレベルは総じて低いし、大能力者（レベル4）の俺が飛びぬけてるってのもあるけどさ……」

勇斗に向かって薙ぎ払った敵からの反撃……　発火能力（パイロキネシス）による火球が複数飛んでくる。

ただそれでも、勇斗は全く動く素振りを見せない。

そして火球が勇斗に当たる直前、全ての火球が吹き飛ぶ。

勇斗達の学校の風力使いや念動能力者(エアロシューター　テレキネシスト)が能力によって全ての火球を吹き飛ばしたのだ。

「アイツらは背中預けられる大事な仲間だ。それを見下してかかるお前らみたいな連中は足元すくわれて終わりなんだ。……お前らには絶対負けねーよ。　それに……」

そう言って勇斗は付け加える。

「お前らの先生には俺らの先生がお世話になったみたいだからな。……なおさら負ける訳にはいかねー。」

敵陣の棒は残り2本。

片方の棒では上条が幻想殺し(イマジンブレーカー)で、青髪ピアスがバレリーナのようにクルクル回転して、敵の注意を引き付けその隙に別動隊が棒を襲撃している。

「……じゃあこれで終わりだな、エリート集団」

勇斗は再び翼を振るい、もう1本の棒を弾き飛ばす。

それが地に転がるのと、上条達が棒を倒したのは、ほぼ同時だった。

「ど、どうしてみんな、あんな無茶してまで頑張っちゃうのですかーっ！　大覇星祭はみんなが楽しく参加する事に意味があるのであって、勝ち負けなんてどうでも良いのです！　せ、先生はですね、こんなボロボロになったみんなを見ても、ちっとも、ちっとも嬉しくなんか……ッ！！」

小萌はそう言っていたが、生徒たちは微笑むだけで何も言わず、それぞれ競技場を去って行く。

「じゃあ当麻、俺たちもそろそろ出るか。」

「ああ。……時に勇斗サン。このあと何か予定とかありますでしょうか……」

「ん？　……ああ、これから初春と一緒に見回りだな。風紀委員（ジャッジメント）の仕事だ。」

「そうか……。くそっ、インデックスの食費を助けてもらいたかったのに……！！」

「……」

勇斗はポン、と手を上条の肩に置いて言う。

「……がんばれ」

そのころ、女性陣は。

「まさか……、勝っちゃうなんてね……」

「……勇斗先輩達、すごい迫力でしたね……」

「いつもの比じゃなかったかも……」

ついさっき、目の前で繰り広げられていた光景に、３人はまだ驚いていた。

と、そこで　　ピピピっ！！　　と携帯のアラームが鳴る。

「ッと……。誰のケータイ？」

「あっ、私のです。　　……もう見回りの時間なっちゃったみたいです。」

「え？　……あー、私もそろそろ借り物競走の準備しないとなー。」

「むー、もうみんないっちゃうの？　……まあ、がんばるんだよ。」

こっちもこっちで、解散の時間とあいなった。

ep. 12　9月19日―2（後書き）

タイピングのスピードを上げたい……

とてもとても切実に……

ep. 13　9月19日－3（前書き）

時間がある限りがんばって更新します！

それでは第13話です。

よろしくおねがいします。

ep. 13　9月19日―3

「さて……、見回りか。」

勇斗は上条と別れ、スタジアム前の公園に来ていた。

「でー、初春は、と……」

「勇斗せんぱーい！！」

勇斗が声のした方を見ると、初春が噴水の傍のベンチに座って待っていた。

「おー、初春。　わりぃ、待ったか？」

「いえー、だいじょうぶですよ。　あ、先輩、棒倒しすごかったです。おめでとうございます。」

「ん、まーホントよく勝てたよなー。　まあある意味、相手の先生様々だな。……ムカつくけど」

「？　何かあったんですか？」

「んー、実はな……」

と、勇斗は初春に、競技前に聞いた小萌と相手校（いけすかない）の先生（スーツ野郎）のやりとりを説明する。

「そんなことがあったんですかー。　なんかホント嫌な先生ですねー……」

「全くだ……。　まあ鼻っ柱（プライド）は叩き折ってやったから、これで多少は懲りただろ。」

「ですねー。」

「ま、あんなやつの話しててもしょうがないから、見回り行くぞ初春。」

「了解でーす♪」

「……なんかいきなり楽しそうだな、お前」

「えー、まあ♪（先輩と一緒に大覇星祭まわれますからね）」

「ん？　何か言ったか？」

「いえー。なんでもないですよ。」

「そう？　じゃあまあ行きますか。」

「はい♪」

そして2人は見回りに出発した。

「……全く、初春ったら。　デートではありませんのに。」

「もうすっごくうかれてましたねー。」

見回りに出た2人の様子をたまたま公園に来ていた車イスに乗った白井とそれを押す佐天が見ていた。

「……ちゃんと仕事してくれるんでしょうね？」

「まー勇斗先輩が一緒なんだし、大丈夫じゃないですかー？」

「……だからこそ心配と言えば心配ですわね。」

「……ですよねー。」

あははー、と佐天は笑う。

「まったく……。……あら？」

と、白井と佐天の耳に競技場のアナウンスが聞こえて来た。

『四校合同の借り物競走でしたが、やはりというか期待を裏切らないというか、常盤台中学の圧勝でした。中でもトップ選手は他に比べて7分以上も差をつけた状態でのゴールという快挙を成し遂げ――――』

公園近くのビルの壁面に取り付けられた巨大ディスプレイに、何処かの陸上競技場が映る。

『――――1位を獲得した御坂美琴選手はゴール後も体勢を崩す事はなく、まだまだ余力を感じさせる姿を見せてくれました』

「おー！　御坂さんやっぱりさすがですね！！」

と佐天は言うが、白井は俯いたまま何も言わない。

「あれ？　……白井さん？　おーい、白井ｓ　「おっ姉様ー♪！！
　やはり完全なる圧勝という形で、その躍動する肢体を皆へ見せつけていますのね！　生はおろか録画すらできなかったこの不出来なわたくしをお許しくださいですの！！」　……」

映像を見て、満面の笑みを浮かべ、目を輝かせる白井を、佐天は苦笑しながら押さえ付ける。

「はーい白井さん落ち着いてー。　……えーい落ち着けー！！」

佐天の話も聞かず、お姉様お姉様お姉様ぐふふふふ、と怪しげな笑みを浮かべ車イスから立ち上がって喜ぼうとする白井にしびれを切らした佐天が白井の右肩を、――――つい数日前の事件で負傷した場所の１つ――――を軽く叩く。

「ひぎっ……！！」

「はいはーい、落ち着きましたかー？」

「くっ……。　佐天さん、ひどいですわよ……！」

「いやー。なんか今日白井さんを引き受けるとき『黒子が暴れたらとりあえず肩とわき腹たたけばおさまるわよ』って御坂さんが。」

「……さすがですわお姉様。わたくしの弱点も全てお見通しですのね！！　お姉様ー！！！」

「だから落ち着いてくださいって！！　絶対安静って意味わかってるんですか！？」

「……さっき傷を思いっ切り叩いた人の言葉とは思えませんわね！！」

と、２人が騒いでいると、そこへ、

『一緒に走ってもらった協力者さんをいたわる所も好印象でしたね。この辺りが名門、常盤台中学の嗜みと言った所でしょうか』

「あー、御坂さん上条さんと一緒に走ってますねー。　……うわー、あんなに顔真っ赤にしちゃって、御坂さんかわいいー！！」

「……こっ、殺す！！　ウラヤマシイウラヤマシイウラヤマシイ妬ましさでオマエをコロスー！！」

「ちょっ！　待って白井さん！　日本語ももうおかしくなってるしそんな暴れたらホントに傷口開きますよ！？」

「あの若造がー！！」

「だから落ち着いてくださーい！！」

佐天は、今度は右肩に加え、わき腹も同時に叩く。

声にならない断末魔をあげ、白井は沈黙した。

歩いて見回りを続けながら、勇斗は初春に話しかける。

「で、今年の大覇星祭は何か問題起きてる？」

「えーっと、今の所はそんなに。　焼きイカ屋台に化けた産業スパイが生徒の唾液からＤＮＡマップを盗み出そうとしてたぐらいですねー。」

「あー、そんなん易しい易しい。　去年の反学園都市勢力の武装集団突入未遂とかに比べりゃまともなほうだって。　なんか他にもいろいろあったからなー。」

「うぇっ！？　去年は裏でそんな事が起きてたんですか？」

「そうそう。　一般客にばれないように対応するのが大変だったなー。」

「うわー……」

そんな感じで勇斗が去年の大覇星祭の舞台裏を初春に教えていると、３０メートルくらい先の道端で白人系の５歳くらいの外国人の少年が泣いているのに２人は気付いた。

「迷子かな？」

「そうみたいですね。まあ人の数が半端じゃなく多いので、仕方ないと言えば仕方ないんですけど。」

「まーな。」

と、2人はその子に近付いて行く。

「えっ、えくすきゅーずみー？」

と初春が話しかけると少年は、初春と勇斗、そしてその腕の風紀委員（ジャッジメント）の腕章に気付いたようで話しかけてきた。

「○×△□～～～×■▽！！」

もちろん外国語で。

「えっ……？　あのっ……」

「◎▼◇☆～～～～！！」

「……先輩。」

「んー、フランス語か。おっけー、初春、ちょっと替わって。『どーしたのかなー？　迷子かな？』」

「『わっ！！　お兄ちゃん言葉わかるの！？』」

「『うん、わかるよ。　それで、きみはどうしたんだい？』」

「『……パパとはぐれちゃったんだ。』」

「『んーわかった。だいじょうぶだよ、すぐに見つかるからねー。』」

そう言って勇斗はその子の首に掛かった学園都市発行の大覇星祭入場パスを見て、情報をを初春に伝える。

「初春ー。　大覇星祭臨時発行ＩＤ：１４３７７８４の子が迷子だ。アンチスキルに連絡入れて。」

「了解です！　……あ、鉄装先生ですか？　実は迷子が……、はい……、えっと、大覇星祭臨時発行ＩＤ：１４３７７８４です。　あ、はい、わかりました。　ありがとうございます。　……お父さんの名前がわかって、今からアナウンス入れてくれるそうなので、近くのアンチスキル詰所に連れてくるように、だそうです。」

「おっけーわかった。　『アナウンスいれてもらうからもう少しでお父さん見つかるよ。それまでお菓子とかジュースとかある場所で待ってよう。』」

「『うん！　ありがとうお兄ちゃん！！　あ、そっちのお姉ちゃんにも伝えておいてね！』」

「『わかってるよ。』」

そして2人で少年をアンチスキルの詰め所に預け、見回りを再開した。

「……先輩ってフランス語話せるんですね。」

「ん。まーねー。　一応英語とヨーロッパ圏の言葉なら一通りはいけるかな。」

「ホントですか！？　すごいです！　あー……わたしもフランス語とか話せるようになりたいなー……　なんかこう……お嬢様って言うか、すっごく上品な感じがしますよね！」

「……おーい、ういはるー？　帰ってこーい。」

苦笑しながら、勇斗は初春に声をかける。

と、そこで勇斗の携帯がなった。

「お、電話だ。　はーい、もしもーし」

『もしもし千乃？　いまどこにいる？』

「おー吹寄か。　今は……第7学区第3競技場前だな。　どうしたんだ？」

『ならちょうどいいわね。　これから第3競技場で玉転がしがあるんだけど風紀委員（ジャッジメント）の仕事ちょっと抜けられるのなら手伝ってほしいんだけど。』

「ああ、大丈夫だ。　すぐ行く。」

そう言って勇斗は電話を切り、初春に声をかける。

「そこの競技場でこれから俺らの学校の玉転がしあるらしいからちょっと手伝ってくるな。」

「はっ……！　わたしは今何を……　わかりました。応援行きますよ♪」

「ん、じゃあ頼む。」

「はい♪」

こうして2人は見回りを一時中断（さぼって）して、競技場へと向かった。

ep. 13　9月19日－3（後書き）

ちょっとキャラの口調が曖昧……かな？

がんばって勉強します……！

ep. 14　9月19日ー4　（前書き）

新生活開始のドタバタで更新が遅れてしまいました……。

しかも新居の回線工事の予定も未定で、次回の更新も遅れてしまうかもしれません。

なるべく早く更新できるよう頑張りますので、お待ちいただけると幸いです。

ep. 14　9月19日―4

「よしとうちゃーく。」

「あれ勇斗、……風紀委員（ジャッジメント）の仕事は？」

「もう終わったのかにゃー？」

勇斗が玉転がしの会場、第7学区第3競技場に着くと、そこには既に上条と土御門がいた。

「あーうん、ちょっとさぼってきた。」

「……それでいいのか風紀委員（ジャッジメント）。」

「まあさっさと終わらせちまえば大丈夫だろ。　んー、つーか当麻……」

「……何だ？」

「お前……、また事件か？　……しかも、魔術師がらみの。」

「うっ！？」

「図星か……」

「……何でわかったんでせうか？」

「いやー、だってお前さっきまでより明らかにテンション下がってるし。『また事件か？』って聞いたとき土御門が苦笑いしてたからな。」

「うー……」

「にゃー、まさかそんなことで気づかれるなんてにゃー。　おれもまだまだ修行が足らないかにゃー。」

「まあ普通の奴なら絶対気づかねーだろ。　……で、手伝ったほう

がいいのか？」

「んー。　今回の事件ってやつは、ローマ正教の魔術師たちが学園都市内部に侵入、そして何者かと霊装『刺突杭剣（スタブソード）』を裏取引する、ってやつですたい。」

「……その霊装の効果ってのは？」

「ざっくり言えば、聖人を即死させる。　そんな代物だにゃー。」

「！！　……わかった。続けてくれ。」

「ああ。　で、魔術サイドと科学サイドのせめぎあい、そして魔術サイドの内部でのせめぎあい。　そいつらのせいで学園都市、イギリス清教必要悪（ネセサリウス）の教会、そのどちらもが表だって動けないんだにゃー。　だから、オレとステイルがカミやんの個人的な知り合いとして対処にあたってる。　だから風紀委員（ジャッジメント）である勇斗に直接協力を求めるのは厳しーんだにゃー」

「……なるほど。魔術師（そいつら）たちもそれを狙ってわざわざ今学園都市（ここ）に潜入してんのか。
つくづく小細工好きだよな、魔術師って。」

「まーそこは仕方ないにゃー。　で、オレたちはこのクソ広い学園都市からその潜入した魔術師を探し出して、裏取引をぶっ潰さないといけない訳ですたい。」

「……マジか！？」

「そーなんですたい。」

「うー、そうだ。　魔術師探すんだったらインデックスに協力頼めないのか？」

「あー、それは俺も土御門に提案したんだ。　でも……」

「その件に関しても、魔術サイド内部でのせめぎあいの都合上、禁書目録はこの事件に絶対に関わらせちゃダメなんだぜい。」

「……あー、なんとなく言わんとしてることはわかった。」

「多分それであってるぜい。　……で、だ。この件に関してオレ達には不利な条件しかないと言ってもいい。だから正直猫の手も借りたいっていう状況なんだ。　だから勇斗には風紀委員（ジャッジメント）の立場を使って後方支援（バックアップ）をお願いしたいんだにゃー。　あくまでも間接的に、索敵や追跡、カミやん不在時のインデックスの保護とかをにゃー。」

「んー……。まあ、索敵とかに関しては正直どうにかなる。見回りを口実にすればな。　ただインデックスの保護についてはな……。流石に見回りに連れてく訳にもいかないからちょっと厳しい。」

「んー、わかったにゃー。……それじゃあカミやんはインデックス問題も担当するって方向で！　学園都市で事件が起きてる匂いは極力隠すって感じでだにゃーっ！　適当に辺りを見て回るとか約束して、魔術戦の起きそうな所からさりげなく遠ざけといてくれってトコですたい」

「あん？　何だそりゃ！　お前は簡単に言うけどさあ……ッ！」

「大丈夫だって！　フラグまみれ上条当麻ならどうってことないぜい！」

「何だその根拠ゼロの自信の塊は！　大体、俺達の競技はどうすんだよ。黙ってサボったら吹寄絶対キレるって！　それこそ目も当てられない感じで！！」

「それこそお前のフラグ構築能力で何とかなんじゃねーか？」

「だにゃー。今大事なのはインデックスの方だぜい。つっても、あ

んな禁書目録なんざ適当に食べ物与えてりゃどうとでも制御できそうな気はするけどにゃー。困ったらとりあえず事件の現場と逆方向にお菓子を投げるにゃーっ！」

「インデックスには悪いが、おれも同感だな。」

「……お前ら、インデックスが今のこと聞いたら頭蓋骨までかじられるかもしれないぞ。いや、アイツが俺以外の人間に噛み付きやってる姿は見た事ないけど……」

「……よし！　役割分担が終わったところでそろそろ競技時間だにゃー。」

「よし、そろそろ集まるか。」

「はい？　……え、ちょ、ま、……もう決定なのかよ！？」

勇斗と土御門は出費のでかい仕事を上条に任せることにし、それぞれ競技の準備を開始した。

「と、いうわけで競技開始の時間だ！！」

「さっさと終わらせて仕事いくにゃー」

「だな。　……罰ゲームを逃れるためにもどうにかして勝ちたいなー。」

「んーカミやん。罰ゲームって何のことだにゃー？」

「御坂の学校とうちの学校で総合学校順位で負けたほうが勝ったほうの言うこと何でも聞かなくちゃなんねーんだよ。」

「……御坂って、もしかして常盤台のレールガンのことかにゃー？」

「ん、お前よく知ってんな。　そーだよ、あのビリビリ中学生ですよ。」

「……カミやんテメェまたフラグかこの野郎！！」

「ちょっ……！？　まて土御門！　いきなり殴りかかってくんじゃねーよ！　しかも毎回毎回フラグとか訳わかんねーよ！！」

そうやって上条と土御門が乱闘を始めたところで、　ピー！！　と競技開始の笛が鳴る。

「おい土御門！！　競技始まっちまったぞ！！」

「そんなこと言って逃げよーってもそうは問屋がおろさないぜカミやん！！　……勇斗！！　打ち合わせ通りやっちまえ！！」

「任せなさーい！！」

そう言って勇斗は背中に翼を展開させ、おもいっきり力を込めて翼をしならせていく。

競技に先んじてあった学年の打ち合わせの時に、時間短縮のために勇斗と土御門が提案した作戦。

――――全部ふっ飛ばしちゃえ大作戦――――

大玉転がしのルールが、号砲と共に左右両サイドの２５個ずつ合計５０個の大玉をそれぞれ敵軍の後方にあるゴールラインへと転がしていき、先に半数以上の大玉がゴールラインを割った学校が勝利する、といった変則的なものであるからこそ、可能な作戦。

通常の大玉転がしと異なり、自軍と敵軍の大玉が最低一度は必ず交差するため、この瞬間に大玉をぶつけたり、能力を飛ばしたりして相手を妨害する事も可能となっており、まともにやりあえば乱戦は必至である。

だが、勇斗、上条、土御門には一刻の猶予すらも惜しい。

だからこそ提案した、この一瞬で終わる作戦。

（まさかあっさり通るとは……。　みんなどんだけ棒倒しでやる気使い果たしたんだよ。）

活躍やら手柄やら、全部勇斗1人のものになってしまうというのに反論がほとんどでなかった（吹寄が少しごねはしたが）打ち合わせの様子を思い出し、苦笑いしながら、勇斗は更に翼に力を込めていく。

「……まあいいか。好都合だし。　……んじゃ、本日2回目行くぞー！！」

勇斗は自軍に一声かけ、みんなが頷いたのを確認し、込めた力を解放し翼を振るう。

ビュゴッ！！　という凄まじい音を立てて吹き荒れる本日２度目となる烈風が、敵軍の大玉諸共、自軍の大玉をほとんど全て敵軍の後方にあるゴールラインの向こう側に吹き飛ばした。

ピピー！！　と、競技終了の笛が鳴る。

「……さて、お仕事タイムの再開だ。」

背から伸びる白い翼を虚空にとかしながらフィールドに背を向け、勇斗は上条と土御門のもとに向かった。

「おい土御門！！　もう競技終わってんぞ！！」

「なにぃ！？　……チッ、まさかこんな早く終わるとは……　早すぎるゼイ、勇斗。」

「早すぎるってなんだよテメェ！！　願ったりかなったりじゃねーか！！」

「……命拾いしたなカミやん。覚悟しとくんだぜい。」

「なんか理不尽だっ！！」

そんな感じにぎゃあぎゃあやって騒いでる2人のもとに、勇斗が到着した。

「……この学年、ほんとに何もしねーんだな。　お前らに至っては最初から最後まで大乱闘だし。」

「まーせっかく大能力者（レベル4）がいるんだからうまく使わない手はないって事ですたい。　それにカミやんのフラグ体質に対しては、負けるとわかっていても立ち向かわなきゃいけない時があるんだにゃー。」

「……激しく同感。」

「勇斗が寝返った？　くっ……、味方してくれると信じてたのにッ！！」

「お前のフラグに関しては男なら多分１００人中１００人味方しねーよ。」

「だにゃー。」

「くっ……」

ｏｒｚそのままにうなだれる上条を見ながら、勇斗は土御門に言う。

「じゃあ俺は頑張ってお前らの後方支援（バックアップ）まわるから、何かわかったら情報くれ。　いくら魔術について知ってても、流石に潜入した魔術師見つけんのは無理だからさ。」

「了解だにゃー。　頼んだゼイ。」

そして勇斗は上条、土御門と別れ、初春と合流し再び見回りを再開した。

ep. 14　9月19日－4　（後書き）

なんか8割がた会話で埋まってる気が……

しかも前話からほとんど話が進んでない　orz

ep. 15　9月19日－5（前書き）

まさかまだネット工事が無いなんて・・・！

・・・6月中旬～7月にならないとネット工事が入らないそうです（泣）

・・・かなり遅れてしまいましたｆ^＿^；

待っていただいたかたも、そうでないかたも、楽しんでいただけたら幸いです。

ep. 15　9月19日―5

競技が終わると、勇斗は再び初春と合流した。

「先輩、お疲れ様でした。」

「全くだ。あいつら全部おれに押し付けやがって。」

「あ・・・、ごめんなさい先輩。こんないっぱい競技入ってるのに、無理言ってシフト変えていただいちゃって・・・」

本来であれば、勇斗の見回りのシフトは強豪校との競技に一段落ついた午後からであったのだが、先日の1件で黒子が負傷してしまったためシフトの変更を余儀なくされ、初春と黒子の強い希望でこの時間帯に変更したのだった。

「気にすんなよ。先に仕事終わらせた方が気が楽だし、十分競技に出れてる。
それに、女の子と祭まわれてるんだ。嫌な訳無いだろ」

「・・・っ！！
あっ、ありがとうございますっ！！！」

初春を真っ赤にさせるフォローを勇斗はのたまう。

「・・・っと、もう見回り終わりの時間か。」

「あ・・・、みたいです。」

「よし、じゃあまたな初春。・・・暇なとき連絡くれれば一緒に回ってやるから。」

「はい♪　ありがとうございます。　お疲れ様でした、勇斗先

輩。」

そういって、たたた、と初春は走って行った。

「・・・さて、そんじゃお手伝いといきますか。」

厄介事の前の癒しの時間の終了を自ら告げ、携帯を取り出し、土御門に電話をかけた。

「で、今はどうなんだ？」

『ナイスタイミングだぜい勇斗。一財銀行周辺にでっかい看板を持った外国人の女がいないか探してくれ。カミやんの幻想殺しが、その女の何か・・・、おそらく隠蔽用の術式を破壊した。そいつがどうも怪しい。』

「了解」

勇斗はズボンのポケットから携帯端末を取り出し、風紀委員の権限で学園都市の監視カメラネットワークにアクセスする。

「・・・、・・・、いた。金髪で作業着姿ででっかい看板抱えた女。一財銀行から北に１５０ｍの大通りだ。」

予想外にあっさり見つかった女の姿を端末のモニター越しに見ながら、勇斗は土御門に告げる。

『さすが勇斗だにゃー。サンキュー。』

そういって電話は切れた。

が、３０分後、土御門から勇斗に電話が来た。

『勇斗。第７学区南中学周辺でもう１回探索を頼む。』

「さっきからずっと追跡中だ。そんなん忘れるくらいなんかあったのか？」

『・・・ステイルがやられた上に吹寄が巻き込まれた。そんなとこだ』

そっけなくも、苛立ちを隠せない声で土御門は言う。

「・・・魔術師ってのは一般人を無差別に巻き込むような人間だったか？」

『普通はありえないな。ま、この件に関しては完全に向こうさんも予想外だろう』

「・・・なるほど。で、だ。位置は地下鉄二日駅、北Ａ１入口前だ。北上中。」

『了解』

「ナビ続けるからそのまま追いかけろ。」

『了解。カミやん回収して追いかけるにゃー』

勇斗は土御門に指示を出して走らせる。

しばらくすると土御門、そして合流した上条が、金髪の女が映る端末画面に映るようになった。

・・・と、画面奥で女が突然立ち止まった。

それにあわせて上条と土御門も１０メートル弱の間合いを空けて立ち止まる。

モニター越しに女が何か話始めたのを見た勇斗は、監視カメラを集音モードに切り替える。

無音だった映像に騒音と話し声が加わる。

『・・・お前が仕掛けた術式で、全く関係のない人間が倒れたぞ。覚えてるか、お前と初めて会った時に、俺と一緒にいた女。お前の目には、アイツが魔術と関係あるように見えたのかよ。』

怒りを内包して、わずかに震える上条の声がする。

が、それに対する女の返答はあくまでも軽い。

『この世に関係のない人間なんていないわ。その気になれば、人は誰とだって関係できるものよ？』

それを聞いた上条の表情を見て、女は言葉を付け足す。

『・・・今さら何を言っても無駄だろうけど、あの子はホントは傷つけるつもりはなかったわよ。』

少しだけ、声のトーンを落として、女は言う。

が、すぐに不敵に笑って

『・・・お姉さんだって、一般人を傷つけたくはないもの。・・・ま、プロの子は違うけど。』

そう言い、女は単語帳の１ページを口で破る。

ジジッ、と甲高いノイズのような音を捕らえた端末のモニターの向こう側で、土御門の体がくの字に折れ曲がり、ガタガタと震え出す。

慌てて駆け寄る上条の姿をくすくす笑いながら眺め、

『ふふっ。再生と回復の象徴たる火属性を青の字で打ち消したわ。多少は耐性があるみたいだけど・・・』

そう言って、土御門を眺め回す。

『それだけではお姉さんに敵わないわよ♪』

同時、土御門の体が崩れ落ちるのが見えた。

「・・・くっ、まずいっ・・・・！」

土御門が戦闘不能に陥ったいま、魔術師の女に相対しているのは上条のみだ。

いくら上条が対魔術師に有効な幻想殺しを所持していても、経験の絶対数が違いすぎる。

「チッ・・・、悪いな土御門。約束破るぜ。」

勇斗はそう言って能力を発動、背中に翼を出現させてそこへ飛んで行った。

上条の右手が迫って来る分厚い氷の壁を殴りつける。

だが、氷の向こう側にいたはずの女、オリアナ＝トムソンの姿は、崩れ落ちる氷の向こう側には無かった。

想定外の出来事で一瞬停止する上条の思考。

その隙をついて飛来する極薄、鋭利な石刃が上条に迫る。

（まずっ・・・！！）

鈍く光り迫って来る石刃を目では捕らえているものの、体の反応が遅れる。

「くっ・・・！！」

ギリギリのタイミングで上がる右腕。

・・・が、右腕が上がるより早く、上条の視界がブレた。

「！？」

驚きの色に染まるオリアナ＝トムソンの目に飛び込んできたのは、上条の体育着の首根っこを掴み、背から伸びる白い翼で空を叩き、宙に浮かぶ勇斗の姿だった。

ep. 16　9月19日ー6（前書き）

いつもより、ちょい長めです。

やっと9巻終わるかな……

ep. 16　9月19日―6

「ゆっ……、勇斗っ！！　くっ、苦しい……！！」

「お！？　わりっ！」

勇斗は地面に降り、上条の首を解放する。

「ゲホッゲホッ……！　……助かったぜ。　サンキュー勇斗。」

「どういたしまして。」

そして2人はオリアナに向き直る。

「……まるで天使の翼ね、それ。」

オリアナは単語帳を口に近づけながら言う。

「ふふ。そっちのツンツン頭の子とさっき握手した時にも感じたんだけど、学園都市ってずいぶん珍しい能力（チカラ）持ってる子を集めてるのね。」

言って、単語帳のページを口で破る。

彼女が左腕を横にまっすぐ伸ばすのと同時、黒い闇の剣がオリアナの腕にまとわりつくように出現し、一気に長さを増して2人に迫る。

「伸びる剣なんざ、……御坂相手で見慣れてんだよ！！」

上条は前に出ると右手を伸びてきた剣に叩き付ける。

右手が剣に触れた途端、闇の剣が剣先から根元まで一気に弾け、霧散する。

「！！」

そこでできた隙を、勇斗は見逃さない。

脚に力を込め地面を蹴って、瞬間の後には約１０メートルの間合いを一気に詰めて、オリアナの正面にまで踏み込む。

が、

「んふ。甘いわよ。」

「！！」

勇斗はそこで、オリアナが1枚のページをくわえているのを見た。

虚空に水球が現れ、一瞬にして膨張し、指向性を持った水蒸気の爆風が、至近距離から勇斗に向かって炸裂する。

「くっ……！！」

とっさに翼を使って身を守るも、後方に吹っ飛ばされる。

それと入れ替わるように、上条が一気に距離を詰めるべく、前へ出る。

対して、オリアナは単語帳のページを再び口で破る。

直後、上条の後方から突風が吹く。

強い風に背中を押され、足をもつれさせた上条は前のめりに倒れていく。

「ふふ。舌をかまないようにちゃんと歯を食いしばってね。」

オリアナは距離を詰め、右脇に挟んだ看板を跳ね上げ、上条の顎へ強烈なアッパーを繰り出す。

凄まじい衝撃を受け、上条は動きのベクトルを無理やりに変えられ、後方へと吹き飛ぶ。

「!?　当麻!!」

「よそ見は、ダ・メ・♪」

「!!」

体を大きくひねって放たれた左足の蹴りが、勇斗をとらえる。

「ぐあっ！！」

勇斗の体が後方へと飛ばされた。

「くっ……！！」

「んふ♪」

余裕の姿勢を崩さないオリアナに対し、勇斗と上条は早くも全身を痛みに襲われている。

その痛む体にムチ打って2人は追撃に対して構えようとするが、オリアナは不敵に微笑んだまま動こうとはしない。

「……お前はどうして追い打ちをかけない？」

それに違和感を覚えた勇斗がオリアナに言う。

「お前の目的は『刺突杭剣（スタブソード）』とかいう霊装の取引を成功させることのはず。なんでさっさと追い打ち……例えばさっきの昏倒術式を使ってさっさと逃げない？　こんな所で余裕を見せつけてたって良いことは無いだろ。」

「あら。いい質問ね。」

笑みを崩すことなく、オリアナは言った。

「お姉さんは一度使った術式は二度と使わないのよ。だからお姉さんは複数の色と属性を組み合わせてたくさんの手札を用意して、作った魔道書（カード）を日めくりカレンダーみたいに破り捨てて使ってるの。それで、さっきの術式はもうないから、どうやって君たちを排除しようか考えてるのよ。」

「……複数ってもたかだか４つか５つのものの組み合わせでしかないのに、何でそんなに術式にバリエーションがあるんだ？」

今度は上条がそう言う。

「またまたいい質問ね、うふふ。……組み合わせているのはそれだけではないのよ。よーくお姉さんを見ていれば分かるかもね？」

オリアナは左手の単語帳を、自らの口へ持っていく。

だが、オリアナは術式を発動させることなく単語帳の厚紙をくわえるだけだ。くわえる位置をずらしながら、２人をずっと見つめている。

先に気付いたのは勇斗だった。

「……そうか。角度だ当麻。　角度は西洋の占星術の基礎だったはずだ。」

その能力の外見ゆえ、一時は神学系の研究機関の集まる第１２学区の学校にいた（いさせられた）ときに、そんな話を聞いたことがある気がする。

「あら。そっちの子、かなり物知りね。正解よ。……０。（コンユンクテ）から９（イオ）、１７１。（オポシティオ）から１８９。、８１。（クワルトゥス）から９９。、１１１。（トリヌ）から１２９。（セクストゥス）、５４。から６６。、０。（パラレル）から１。、その他色々な座相法則。（アスペクト）『星座と惑星の関係はその角度によって役割を変える』っていう理論よ。あなたなら聞いたことがあるんじゃない？」

オリアナの問いかけに勇斗はうなずく。

「それに、この魔道書（カード）にはページ数の数秘的分解も構成要素の１つとして取り入れているから、厳密に言えば同じ魔術は二度と使えない。過ぎた過去を繰り返せないように、一度めくったページは二度と返らないから。」

オリアナは淡く笑って言った。

「……さて、おしゃべりはこれくらいかしらね。そろそろ思いついたから、これで鬼ごっこはおしまい。」

単語帳のページの角で自分の上の唇をなぞりながら、しかし、ページは破らずに。オリアナは告げる。

「次に放つは赤色で描く風の象徴、角度にしてジャスト0。のコンユンクティオ、総ページ数にして577枚目の使い捨て魔道書、『明色の切断斧(ブレードクレーター)』　……あなた達、もし今いる場所から動いちゃうと死んじゃうから、動いちゃだめだよ？　ま、どうにかして動かないと次でチェックメイトだけどね♪」

笑って、オリアナは単語帳のリングから魔道書(カード)を引き抜く。

地面に、オリアナを中心として半径約1メートルの円が浮かび上がり、その円周上から幾本もの文様が伸びていく。

……無力さに憤り、右手を強く握りしめる上条の横で、勇斗はぼんやりと地を走る文様を見ていた。

なぜだろう。さっきから、正確に言えば、オリアナ（魔術師）＝トムソンと相対してから、自分の力がゆらいでいる気がする。

強弱のゆらぎではなく、何か根本のところで。

自らが内包する何かが、動いているかのように。

（……なんだ、これ）

この能力を発現してから今まで感じたことのなかったゆらぎ。

決して不快なものではなく、どこか、そこはかとない懐かしさをも感じる。

そしてなぜか、こんな言葉が口から出た。

「……当麻。準備しとけ。」

「！？」

そう言ったきり、上条が驚いた顔で見つめても、再びゆらぎに沈む勇斗。

確証はないが、不思議とこの状況を打開できる確信があった。

「それじゃあ……　行くわよ。」

そういってオリアナがくわえた厚紙を吐き捨てると、術式が完全に発動する。

『明色の切断斧（ブレードクレーター）』

真空の刃が、真逆のギロチンのように文様から吹き上がる。

そのギロチンが、勇斗と上条の周りをあっという間に取り囲み、２人を戒める檻となる。

「おい、勇斗！！　どうするんだ！？」

焦り、憤る上条とは対照的に、完全に落ち着き切った勇斗は一言だけ

「こうする」

と言って、背中に翼を出現させる。

その翼は、ジジッ、とノイズがかったようにゆらいでいる。

「勇斗……？　翼が……」

「いいから構えろ当麻。……行くぞ」

そう言うと、勇斗は翼をふるった。

真空の刃で隔離された2人を見ながら、オリアナは新たな術式、――『昏睡の風（ドロップレスト）』を発動しようと再び単語帳を口元に近づける。

（魔術に精通していない一般人の割には、頑張ったわね、少年たち。まだまだ弱かったのがちょっぴり残念だったけどこっちも仕事だから、悪く思わないでね。）

そして単語帳のリングから魔道書（カード）を引き抜き、勇斗と上条にむけて『昏睡の風（ドロップレスト）』を放とうとする。

が、その瞬間。

何かの力が吹き荒れ、『明色の切断斧（ブレードクレーター）』の文様と、それによって生み出された真空の刃がすべて吹き払われた。

「！？」

オリアナは目を見開いて驚愕する。

視線の先には背に翼を出現させた少年がいる。

（な、今のは一体……？　……今の感じは、術式の魔力をそれ以上の魔力でもって消し飛ばした？　いやでも、今の力は……普通の魔力とは全然違っていた　くっ！　ただの学園都市の能力者が、なぜこうも魔術に干渉できるの！？）

困惑するオリアナ。

そんな彼女に向かって、右手を握りしめた上条が踏み込んでくる。

状況を呑み込めないオリアナは、とにかく目の前の敵（上条当麻）を倒す事に専念する。

プロの運び屋としてくぐってきた経験がオリアナの思考を切り替え、彼女は魔道書（カード）を吐き捨て、『昏睡の風（ドロップレスト）』を放つ。

「喰ら――――ッ！！」

だが、最後まで叫ぶ前に、上条の右手が『昏睡の風（ドロップレスト）』の先端を殴り飛ばす。

そのたったの一撃で昏睡をもたらす風の槍が砕け散り、霧散する。

（な、んで……ッ！？　今度は、触れられただけで異能（魔力）の力が消し飛ばされた……！）

理解不能な状況が重なり、オリアナは目の前の敵への更なる対処法がなかなか浮かばない。

そして、両者が近接攻撃圏内に入る。

もう単語帳など使っている暇はない。

「くっ……！！」

右の脇に挟んだ看板を振り下ろし、オリアナは本気で上条の頭頂部を狙う。

しかし、重なった混乱のせいでそれには威力も正確性も欠けている。

上条はぐるりと身をひねって振り下ろされた看板をかわし、更に踏み込む。

（……ッ！！）

そしてゼロ距離で、上条の右拳が炸裂した。

オリアナの体が後ろへ吹っ飛び、彼女の手から手放された看板が上条のすぐ横へと落ちた。

「……やった、のか？」

「……みたい、だな。」

上条の呟きに、勇斗が答える。

「とりあえずこれで『刺突杭剣（スタブソード）』は回収できる。土御門や、学園都市に潜伏してるらしい取引相手は心配だけどな。」

「……一応、一番の危機は脱する事ができたと考えて良いのか？」

「……まだわかんねーけどな。」

と、そのとき、2人の耳に笑い声が聞こえてきた。

2人は慌てて視線を戻す。

「ふふ。全く……、意外と乱暴なのね。ボタン取れちゃった」

仰向けに倒れていたオリアナが、眠りから覚めたような動きで、むくりと上半身を起こしていた。

「な……、効いて……なかったのか！？」

「……やっぱりこういうオチかよチクショウ。」

「ふふふ。別にお姉さんがとってもすごい！！　……っていう訳ではないわよ？　キミ。体に溜まったダメージのせいでインパクトが完璧じゃなかったし。まあ……素人の握り拳にしては上出来でした、といった所かしら。」

不敵に笑ってオリアナは言う。

「ただ、プロのお姉さんにとってはまだまだ欲求不満が募るレベルだけど、ね。」

彼女は左手の単語帳を口へ持っていき、単語帳の１ページを引き抜く。

オリアナの周囲で風が吹き、彼女の体が小型の竜巻に吹き上げられ、ものの一秒も経たずに建物の屋上へとたどりつく。

「……おい、忘れ物あるけどいいのかよ。」

『刺突杭剣(スタブソード)』を指さして、勇斗は言う。

「ふふっ。それは一度あなたたちに預けておくわ。た・だ・し、燃えてくるのはこれからよん♪」

「……何でだ？」

今度は上条が疑問を放った。

「何でこんな重要なものをみすみす敵に渡すんだ？　どうしてそんな簡単に引き下がるんだ……？」

「ふふふ。なぜかしら、ね。それを考えるのも楽しみの一つよん♪」

そう言って彼女は建物の死角へ移動し、オリアナは姿を消した。

勇斗と上条の二人は『刺突杭剣（スタブソード）』に向き直る。

土御門の携帯からステイルに連絡を取ると『刺突杭剣（スタブソード）』を破壊しろという単純明快な答えが帰ってきたので、そうしようというわけだ。

「く……ッ！何だこれ。結構……。硬いな。」

「プロの梱包を真似てるみたいだな、これ……。」

しばらく布地を引っ張っていると、きつく巻かれた布が緩んでいった。

2人は巻かれた布を外していく。

しかしその先に、『刺突杭剣（スタブソード）』はなかった。

そこにあったそれは、ただの看板だった。学生が作ったような、手製のちゃっちい看板。

「何だ……これ？」

「一体どうなってる……？」

2人は呆然と呟いた。

答えてくれる者のいない、静寂の中で。

オリアナ＝トムソンは街を歩きながら、通信用の霊装でリドヴィア＝ロレンツェッティと会話していた。

その姿は先程までの作業服とは違う。

「……この学園都市、なめてかからない方が良いわね。」

『それは、どういうことでしょう？』

「2回も、お姉さんの魔術、破られちゃった。」

『……計画の方に支障は？』

「……わからないわね。だから、」

『だから？』

「ここからはお姉さんがんばっちゃう♪」

あくまでも軽く、ただ、目に決意を秘めて、彼女は断言した。

ep. 16　9月19日－6（後書き）

ネット開通は６月２６日以降です

……もう少し

ep. 17　9月19日ー7（前書き）

いよいよ今日ネット開通（予定）！！

嬉しいので友人の協力でｅｐ．１７アップします！！

ではでは、よろしくお願いします！！

ep. 17　9月19日―7

「『使徒十字（クローチェディピエトロ）』……か。まったく、なんて話だ」

ステイルは携帯電話の通話を切るとポツリと呟いた。

道端のカフェのテラスの一角を、勇斗、上条、土御門、ステイルの4人で陣取り、話し合いをしているところである。

「ペテロの十字架、ねえ。たしかペテロってもともとのローマ教皇領の持ち主じゃなかったっけ。」

「そうだぜい……。今ではバチカン市国と呼ばれてる教皇領バチカンのある土地をもともと持ってたのがそのペテロさんですたい。」

勇斗のつぶやきに土御門がこたえた。

「ペテロさんの死後、遺体が埋められ、十字架が立てられ、墓が作られた。元々はそんなでかくなかったんだが、そこにルネサンス期の大改築で現在の聖(サン)ピエトロ大聖堂が出来上がったわけですたい。ローマ正教の総本山がにゃー。」

「うーん……要するに偉い人を奉ってるっていうことか？」

と、今度は上条が尋ねる。

「聖人の死体を利用して新しく建てる教会の権威を補強したとも言えるけどにゃー。　ま、それくらいのことならイギリス清教(うちら)もやってるけど。」

「ふーん……、で。オリアナが運んでたのはそっちのペテロさんの十字架だったと。それって危険な物なのか？　それとも国宝級の骨董品よろしくレア価値がついてんのか？」

「まあ十二使徒の1人が関わってる霊装だからそれ相応の価値もあるけど、気にするべきは、もちろん前者だね。さっきも言ったようにローマ教皇領の始まりは広大な土地にペテロの墓、つまり『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を立てたことだ。そして逆もまた然り、つまり『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を立てた場所は、漏れなくローマ教皇領と同質の空間になる。たとえこの学園都市であっても例外ではない。」

「「！？」」

勇斗と上条の表情が驚きに染まる。

「バチカンという国は、その内部全体が巨大な教会になってるようなものなんだよ。バチカンという範囲内に、指向性のある魔力が充

満していて、それによって常にローマ正教にとって都合良く話が進むようにできている。」

「なるほどね……」

と、そこで勇斗が口を開いた。

「やつらの目的は『使徒十字（クローチェディピエトロ）』のその効果を利用して科学サイドトップの学園都市を支配下におさめて、魔術サイド最大勢力としての面子を取り戻すってとこか。」

「ああ、多分そういうことだ。……全く、君の理解の早さにはいつも驚かされるよ。そっちの男にも見習ってほしいものだね。」

「おい、それはおれのことか？」

と上条が言うと、

「君以外誰がいるんだい？」

「……くっ、反論できない……！」

「まあ君の理解の遅さはこの際おいておくことにして、だ。……止めるよ、この取り引き。さもなくば、世界は崩壊よりも厳しい現実に直面する事になる。」

声に、勇斗と上条、土御門は頷いた。

「ま、とりあえずは一旦休憩だにゃー。　勇斗とカミやんは昼飯でも食べて腹ごしらえして、また午後がんばるにゃー。おれたちはいろいろと調査してくるぜい。よーし、一時かいさーん。」

そういうと、魔術師２人組はさっさと行ってしまった。

「……よし、おれらももう行くかー。」

「だな。あ、おれは１７７支部で昼飯食うから。……インデックスがんばれ。」

「……がんばります。」

これから先のインデックスの子守りを思って気が重くなる上条と別れ、勇斗は１７７支部に向かった。

「あっ、勇斗先輩。お疲れ様でした。」

勇斗が１７７支部につくと、勇斗の心の清涼剤、初春がテーブルで弁当を食べようとしているところだった。

「おう初春。なんだ、お前もここで昼飯食うのか。」

「はい。荷物もここに置いてありますし、……競技が伸びて出遅れて場所取りできなかったんです。」

「それに涼しいしな。」

そう言って勇斗は荷物から弁当を取り出し、初春の向かい側に座って弁当を広げる。

「にしても、1人で食うつもりだったのか？」

「いえー、もう少しすると白井さんと佐天さんがくることになってます。」

「なるほど。」

「はい。……と、すいません。佐天さんからメールが」

そしてしばらく携帯を操作し、携帯を閉じて言った。

「白井さんが暴れたそうで傷口が開いてしまったそうで……。まだ病院にいて遅れるそうです。」

「あいつ……　何やってんだよ……」

勇斗は呆れてため息をついて言った。

「まあ待っててもしょうがないから一緒に食おう、初春。」

「そうですね。ぜひご一緒させてください♪」

そう言って2人は昼食タイムを開始した。

「いやー、初春の肉じゃがうまかったな。」

時間は現在１４時５０分。昼食後に初春と散歩してまったりとした時間を過ごした勇斗は、午後の競技へと向かった初春と別れて公園のベンチに座っていた。

「心は癒されたし、天気もいいし、にぎやかだ。平和だな……と言いたいところなんだけどなー。」

そうつぶやいた勇斗がやっているのは、学園都市の監視カメラネットワークにアクセスしてのオリアナの捜索である。

（ふう。なんか最近当麻の事件巻き込まれ体質でもうつったか？最近妙に大事件に巻き込まれてる気がするんだが。　……まあ自分から首突っ込んでるってのも否定はできないけど。）

そんなことを思いながら、第7学区の監視カメラの調査を終えた勇斗は次に隣の第5学区のカメラの調査を始める。

（『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は土御門やステイルが必要悪（ネセサリウス）の教会のメンバーと調査を進めてくれてる。ならおれもできることをしないとな。）

オリアナの姿の特徴をもとに検索するカメラの数を絞り込み、一つ一つ調べていく。

それから数分して、

「見つけた……」

第５学区、地下鉄西部山駅の出入り口の監視カメラ。

そこにオリアナの姿が映っていた。

勇斗はすぐに土御門に電話を掛けた。

「土御門、オリアナを見つけたぞ。」

『！！　……機械はあんま魔術に対応できないから警戒してるはずのあいつらには使えないと思ってたんだがにゃー……。どこだ？』

「第５学区、地下鉄西部山駅の監視カメラに３０秒前には映ってた。ただ、たった今監視カメラから消えた。魔術を使ったか単に死角に入ったか、どっちかはわかんないけどな。」

『了解、だにゃー。すぐにカミやん達に伝えてくれ。そしたら勇斗も一応そこに向かってくれ。オレもすぐに向かうにゃー。』

「わかった。」

そう言って通話を切り、すぐに当麻に電話を掛ける。

「オリアナを発見した。場所は第5学区、地下鉄西部山駅。そこの監視カメラに1分前に映ってた。ステイルを連れて急いで向かってくれ。」

『わかった。』

勇斗も携帯と端末をポケットにしまい、移動を始めた。

地下鉄を使って移動しようと最寄りの地下鉄の駅までたどり着いたとき、勇斗の携帯が鳴った。発信者は上条当麻となっている。

「どうした？」

『西部山駅に着いたんだけどどこに行けばいいんだ？』

「……学園都市のセキュリティシステムで自動探索かけてるけど反応が全くない。多分術式か死角を通ってるかしてるんだと思う。ステイルに頼んで魔術で探せないのか？」

『それが専門外らしくて……』

と、途方に暮れているとステイルの声が聞こえてきた。

『土御門が探索魔術をかけてくれるらしい。僕たちは先にオリアナを追うよ。』

どうやらステイルはステイルで土御門に電話をかけていたらしい。

「あいつ魔術使うとやばいんじゃなかったのか？　……まあこの際しょうがないか。わかった。」

そう言うと電話は切れた。

（待てよ。確かオリアナは魔術による魔道書への干渉を察知して迎撃できると土御門は言っていた。ならもしかすると探索魔術の魔力

をたどってオリアナが土御門の位置を割り出すことも可能なんじゃ……）

そう考えた勇斗は、端末に土御門の携帯の番号を入力して土御門の居場所の検索を開始。土御門のもとに直接向かうことにする。

おそらく今土御門は電話で上条とステイルに指示を出していて電話はつながらないだろうし、魔術を使った後、例外なくボロボロになってしまうからだ。

自分1人加わってどれだけできるか不安だが、いないよりはマシだろう。

しばらくして、検索の結果が出る。

土御門は今西部山駅から歩いて１０分弱の地下道にいるようだ。

なぜそんなところにいるか不思議に思ったが、大覇星祭のパンフレットを見るとちょうどその周辺が１０キロ走のコースに指定されている。

どうやら１０キロ走のコースにバスが引っかかってしまい、自力で移動しているようだ。

しかし、何にせよ早めに合流しておこう、と勇斗が思った瞬間、端末から土御門の携帯の電波の反応が突然消えた。

「！？」

突然の反応の消失。それが意味しているのは――

「ちっ！！　早すぎるだろ！！」

勇斗は翼を広げ空を舞い、一気に土御門のもとへ飛んで行く。

地下道の通路は完全に崩壊していた。

通路の崩落それ自体は免れているが、壁、天井、床、その全てが砕かれ、スプリンクラーが破壊された天井からは、大量の水が床に降り注いでいる。

そんな惨状の中で、オリアナは地に倒れた土御門を見下ろしていた。

「……結界を破壊して通信用霊装で聖人、カンザキカオリを呼ぶなんてね……。なかなか面倒な真似をしてくれるじゃない。」

「ふん……。私達が運んでいる物は『刺突杭剣（スタブソード）』です、って素直に主張し続けてれば良かったものを。そうでないと分かれば、こちらだって遠慮なくアイツを戦力投入させる事ができる。むしろ、『刺突杭剣（スタブソード）』がないならアイツを待機させておく理由なんてないだろう。何せ、一番の弱点が消えてしまったんだから。」

「ちっ！！　……なら探索魔術の使い手のあなたを殺して、さっさとこの場から逃げさせてもらうわ！！」

そう言ってオリアナは単語帳（魔道書）の『原典』を口にくわえ、破り取ろうとする。

土御門は一瞬観念したような表情を浮かべたが、すぐに不敵に口を吊り上げた表情を浮かべ言った。

「勝手にしろ。……逃げられるんならな」

「？」

訝(いぶか)しげな表情を浮かべるオリアナの背後。

翼で空気を叩いて宙を舞い、体を大きくひねって今にも蹴りを放とうとする勇斗がそこにいた。

「！！？」

蹴りが放たれる寸前に勇斗に気づいたオリアナは、とっさに腕で防御の構えを取る。

が、ろくに体勢を立て直す暇もなかったオリアナの体は、勇斗の運動エネルギーを乗せた蹴りで、いともたやすく吹っ飛んだ。

吹っ飛ばされ、地面を転がるオリアナを横目に見ながら、勇斗は土御門のもとに駆け寄る。

「ったく……。心配してきてみれば案の定過ぎる展開でいっそ笑えてくるよ。」

「……でも助かったにゃー。サンキュー勇斗。」

「どういたしまして。」

「（……助けに来たついでにちょっと協力してくれ。仕掛けたいハッタリがある。おれが怪我で動けず、戦闘要員が勇斗しかいない今、第1目標はあいつを追い払うことだ。無茶はできない。）」

「（了解。捕まえるべき敵を追い払うってのが悔しいけどな。まあよっぽど変なのじゃなかったらいくらでも合わせてやるよ。）」

「（ふっふっふ。まあ適当に話を合わせてくれにゃー。）」

そう言うと土御門は立ち上がったオリアナに向けてこう言った。

「どうだオリアナ。神裂が来るまでこいつがお前の足止めをするぞ。」

「……さっきも戦って思ったけど、その子、風紀委員（ジャッジメント）よね。そんな子が魔術サイドに干渉してもいいの？　たしか不可侵条約でも結んでいたんじゃなかったかしら？」

蹴り飛ばされたことによるダメージをそれほど感じさせない気丈な声で、オリアナは尋ねる。

「ふん。お前らがすでにそれを破ってるんだ。どうしてそれをおれらだけが、律儀に守る必要がある？」

そんなオリアナを嘲笑うかのような口調で土御門は応えた。

「お前らの目的が『刺突杭剣（スタブソード）』の取引でなく、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』による学園都市の支配であるということが分かった時点で、オレ等学園都市暗部の人間――ほんの一握りだがな――に学園都市統括理事会の通達があった。『敵の学園都市に対する敵性が明らかになり、実際に敵対行動が行われている今、迎撃・捕縛等に限るが、魔術側への攻撃を認める』とな。」

そして土御門は一度言葉を切って、してやったりの表情を浮かべ、言った。

「そして更に学園都市統括理事会は、科学サイドの隠し玉をこの事件の担当に当たらせることにした。……もう、ここまで言えばわかるだろう？」

「……まさか……」

「そう、こいつが科学サイドの隠し玉。学園都市の対敵性魔術勢力への対抗手段の１つさ、オリアナ＝トムソン。」

「……っ！！」

「そんなの信用できないか？　おれが嘘をついていると思うか？　もしそうなら気の済むまでこいつと戦っていけばいい。いくら魔術に疎くても、お前程度相手なら時間稼ぎくらい朝飯前だぞ。」

土御門のそのセリフに合わせて、勇斗も薄く笑う。

オリアナは判断に迷う。

さっき一度戦った時の感触では、倒すのはそれほど難しくはないかもしれないとも思っている。

体術のレベルは少なくとも互角以上。それにオリアナには曲がりなりにも『原典』がある。

ただし、この翼をもつ少年は、得体がしれない。

その翼に秘められた力。

……さっき一度魔術を打ち破られた身としては警戒しておくに越したことは無い。

（ちっ……）

オリアナは心の中で舌打ちした。

（カンザキカオリが実際にここに向かって来てるのか来ていないのか、判断がつかない……。実際にここに来てると考えても、絶対負けるとは思ってないけど……。大きな事を成し遂げなければならないんだから、下手に傷は増やせないわね……。）

と、オリアナは現状を整理する。

（探索術式は、魔道書（カード）のページごと破壊したからもう使えない。相手の坊やたちは1人が完全な足手まとい。こんなに逃げるのに好条件なのはそうそうない。ここは今のうちに逃げる！！）

オリアナ＝トムソンは魔術を発動させて爆発を起こし、粉塵を巻き上げると、勇斗と土御門に背を向け、地下道の出入り口へと走り、地下道から逃げ出した。

巻き上げられた粉塵の向こうで、オリアナが逃げる気配がする。

勇斗は牽制として、翼を振るって衝撃波を飛ばすが、吹き散らされた粉塵の向こうにオリアナの気配はない。

どうやら本当に逃げたようだ。

「……ま、ミッションクリア、ってとこか？」

「第1目標は、クリアできたみたいだにゃー……。」

「ほんとはここでとっ捕まえたかったけどな。」

「まあそれがベストではあるが……、あいつは強い。おれ等必要悪(ネセサリウス)の教会のメンバーでも1対1はキツイかも、しれないにゃー……。だから、無理は、させられなかった、にゃー。」

「確かにあいつと1対1でやるのはキツそうだな。やりようはありそうだけど絶対それ相応の傷は負わされそうだ。」

「……学園都市の能力者にそんなことやられたら対魔術師専門戦闘機関、イギリス清教第零聖堂区、必要悪(ネセサリウス)の教会の面子が丸潰れだからなるべくやめてほしいにゃー……。」

土御門の声にはいまだ力は感じられないが、軽い口調を取り戻したようだ。

「ちょっと、肉体再生（オートリバース）使わせてくれ、勇斗……」

「おう。見守っててやるよ。」

「……頼むぜい。」

そう言って土御門は能力を使い、できるだけ怪我を直していく。

そんなボロボロにされた友人を見ながら、勇斗は絶対にさっさと事態を終結させようと、強く思った。

ep. 18　9月19日－8（前書き）

最近ディスガイア4にはまってます。

あれはなんかクセになる……

と、いうわけで、今日も夜更かしです^^;

ep. 18　9月19日―8

土御門は肉体再生（オートリバース）を使い終わると、「ちょっと待っててくれにゃー。」と言ってちょっと姿を消し、10分後、手に新品のケータイを持って再び現れた。

「……さっきの戦闘で携帯壊れちまったから新しいの貰ってきたんですたい。」

「……お前、盗んだりとかしてないだろうな……。」

「いやー、……学園都市とイギリス清教の両方のエージェントをやっておりますオレには、そんなことする必要がないんだにゃー……。」

「……お疲れ様でーす。」

いつもの口調は少し戻ってきたものの、呼吸は浅く、土御門の声はまだ弱々しいままだった。

そして、どうやら土御門は、新しい携帯を貰ってすぐに上条とステイルの2人と連絡を取っていたようだ。

「あいつらはもうすでにオリアナの捜索を再開している。……さっきの事があるからあいつらも警戒して逃走してるはずだ。となると、学園都市のセキュリティはあまり当てにならない。だからこっからは自分たちの力で見つけ出すしかないゼイ。」

「だな……。かなりキツイけどやるしかないな。」

と、そんな2人のもとに上条から電話が入った。

土御門の携帯が音を立てる。

「どうしたカミやん？」

『……土御門、勇斗……』

土御門が手に持った携帯のスピーカーから聞こえてくる上条の声は、怒りや悲しみをこらえるかのように、震えている。

「どうしたカミやん！？　何があった？」

土御門が焦ったように上条に尋ねる。

『ふざけんじゃねえよ……。　姫神がオリアナに襲撃された……。』

「なんだって！？」

驚く勇斗とは対照的に、土御門は冷静だった。

「……容態は？」

『今ステイルが魔術で治療してくれてるはず……。……かなり危ないらしいけどな。』

「……そうか。」

『……ふざけんじゃねえ！！　なんであいつが襲われなくちゃならなかった！？　なんであいつが傷つけられなくちゃならなかっ

た！？　なんで大覇星祭(このまつり)を、ローマ正教なんかに邪魔されなくちゃなんねえんだよ！！』

「……当麻……」「……カミやん……」

『……わりぃ。八つ当たりしちまった。……ごめん2人とも。……まずはあいつらをとっ捕まえる。そして絶対姫神と吹寄に謝らせてやる。だから勇斗、土御門。……絶対あいつら見つけ出すぞ。』

「……もちろんだ。」「……言われなくても、わかってるにゃー。」

上条の決意に、2人は頷いた。

『……っても、手掛かりが無いんだけどな……。』

と、上条は息を吐きながら言う。

『……バス停でオリアナを見失った。このあたりにはいるはずなんだ。どうにかして見つけられないか？』

「……ちょっと厳しいにゃー。『理派四陣』の触媒になるオリアナの魔道書（カード）ももう無いからにゃー……。……オリアナが、どの路線を使ってそうかとか……分かんねーかにゃー……？」

『このバス停からは、第7学区の外周を回るルートのバスが出るみたいだけど、オリアナがどこのバス停で降りるのかが分からない。まだバスに乗ってる可能性もあるし、2番目のバス停の近くには地下鉄の駅がある。それに4番目は各学区行きのバス路線が集まるターミナル駅だ。そのどこかで乗り換える可能性もある。』

「チッ……、八方ふさがりだにゃー……」

土御門が、悔しそうに唇を噛んだ。

2人の問答を聞いて勇斗も考えを巡らせる。

全く予想のつかない、オリアナの動きに。

そして、彼女の目的に。

（……ん？）

そんな時、勇斗は違和感を感じた。

……オリアナの目的

最初は、『刺突杭剣（スタブソード）』の取引があるから、止めるのを手伝ってくれと言われてこの仕事を手伝い始めた。

ローマ正教の魔術師たちが、どっかの魔術組織と学園都市の中で『刺突杭剣（スタブソード）』の取引をするから、と。

だが実際問題、オリアナ達が持っているのは『使徒十字（クローチェディピエトロ）』だった。

しかも、取引などなく、それはローマ正教が学園都市を支配下に置くための、学園都市で『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を使うための嘘情報だった。

……なら、なぜあの時、一番最初に上条がオリアナを見つけたとき、オリアナは学園都市をうろついていたのだろうか。

取引がないのなら、余計なリスクを負わずに、ホテルにでも籠っていればよかったのに、なぜそんな敵に見つかるようなことをしたのだろう。

一体、なぜ。

「……土御門。気になったことがある。」

勇斗は、悩み続ける土御門に向かって言った。

「何だ勇斗？」

「オリアナが街の中をうろついてる理由だよ。」

一拍おいて勇斗は続ける。

「この追いかけっこが始まったのは、午前中に上条がオリアナの術式を偶然破壊した所から。……じゃあ、オリアナはあの時、何の目的でそこにいた？　オリアナ達の目的は、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を、……あの時はまだ『刺突杭剣（スタブソード）』って言ってたけどな、取引するつもりでは無かった。だから人と会うため、ってのも可能性は低いはず。それに、午前中はオリアナは『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を持ってなかったぜ。」

「……確かに……。……なのに歩き回ってたって事は……、……きっと何か理由がある。」

そう言って土御門は思考の渦に沈む。

「……『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は、まだ発動されてない。それと絡んでるのか……？　もしかしてオリアナの目的は、条件探しか……？」

『……そうだ土御門。ステイルが『使徒十字（クローチェディピエトロ）』の保管について、イギリス清教から情報が入ったって言ってた。何か役に立てねーか？』

「ホントかカミやん？　……些細な事でも、良い。ちょっと詳しく話してくんねーか……にゃー？」

『ああ。まず1つめ。保管庫は窓がふさがれドアが二重になってるという事。確か、光が入るのを防ぐため……だったかな。』

「光……か。『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は強大な霊装だし、不用意な発動を防いでるのか……？」

『……なぁ、その『使徒十字（クローチェディピエトロ）』ってのは、太陽の光に当たっただけでヤバイのか？』

「いや、多分、それは違うにゃー。もしそうなら、今だって太陽は……出てる。それで、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を発動できるなら……とっくに、やってるはずだぜい。ただ、はるか昔の、十字教のはじまりを考えれば、霊装の発動に……何らかの、光が関わってる可能性はかなり高い……。大昔の、まだ十字教が分派する前は、光を用いる術式も珍しくなかったからな。……ただ、如何せん情報が少ないな……。……カミやん、他に情報は無いのか？」

『もう1つある。オルソラからの報告メールがステイルから転送されてきたやつが。ただ、外国語で書かれてて全然読めなかったけどな。』

「……とりあえず送ってみてくれ。」

『わかった』

そう言って通話は一度切れ、そして上条からメールが送られてくる。

「……これは……、イタリア語だにゃー。」

「イタリア語か。えーっと、なになに……。『『使徒十字(クローチェディピエトロ)』保管担当部署について』……なるほど。保管するってことは不用意な霊装の発動を防ぐことも必要だろうから、これを見れば『使徒十字(クローチェディピエトロ)』の使用、発動条件もわかるかもな。」

「だにゃー。えっと、続きは、と。『全く……。『使徒十字(クローチェディピエトロ)』保管庫担当部署のやつら、年2回の大掃除で、昼に掃除するの忘れてるからやれって言ってんのに、夜になったらなったで勤務時間中だってのにホロスコープで星占いして遊んでやがる。何て奴らだ。掃除の日決まってるから、今日やらなきゃいけないってのに、昼の内に済ませなきゃいけないんですよ、とか言ってまた今日も働こうとしないで帰りやがった。くそっ……、怒られんのはおれなんだぞてめぇら。』　……って、大半は、監査官の愚痴だな……こりゃ。」

そう言って土御門は、上条の携帯電話に電話を掛ける。

「カミやん、メールは読んだ。……学校にある、日直が書く日誌みたいなもんだったな。『使徒十字（クローチェディピエトロ）』には、年2回の大掃除があって、いくつかのルールがあるみたいだ。1つ目は、決められた日付に行わなければならないという事。2つ目は、昼の内に済ませなければならないという事。だ、にゃー。……やっぱり……大した情報じゃねーかもにゃー……」

土御門は言い終わると頭をかきながら再びメールの文面を見返し始める。

「……？？　……ちょっと待て土御門。ちょっとメール見せてもらっていいか？」

土御門の話したことに、わずかに違和感を覚えた勇斗は、土御門のケータイを見る。

「……変だな。『使徒十字（クローチェディピエトロ）』って、ローマ正教にとって大切な霊装なんだよな？」

「そうだにゃー……。それこそ、やつらにとっては、涙を流して跪くぐらいの神聖さはあるはずだぜい。」

「じゃあなんでこんなに管理がいい加減なんだ？　普通そんなすごい物だったらもっと丁重にしっかりと扱うと思うんだけど。」

「……確かに。……各部署から集められたエリート集団なんだから『使徒十字（クローチェディピエトロ）』の価値だって知ってるはずだ。……一体どういう事だ？」

「気になるのはまだ他にもある。２重扉を用意して光の侵入を防いでるくせに、掃除は日中にする。『決められた日にやる』というルール１を破ってでも日中に掃除をしようとしていた。ってことは、この霊装にとって危険、つまり『使徒十字（クローチェディピエトロ）』の発動を握るのは昼ではなく、夜に出る光の可能性が高いってことだよな。」

「……夜にある光、か。確かに十分ある話だにゃー。」

勇斗と土御門はそう言って考え始める。

「でも、夜にある光って何だ？」

「月明かり……、いや、違うにゃー……。月齢周期はカレンダーの流れ、つまり太陽暦と……一致しない。行事の日付だって、気分で決めてるわけじゃなく……、宗教的な意味がそこにあるからこそ、その日に決まってるんだにゃー。月齢周期が……キーポイントだとしても、月齢の方がズレてくるから、使用に適切な特定の日付を、……決める事ができない。それに、月明かりだけでアウトなら、大掃除の日付を厳密に定めておく必要がないしにゃー。」

「……夜にある光、か。」

『おーい……。2人とも―。……置いてかないでくれ……。』

携帯から流れてくる、上条の寂しげな声も気にせず2人は考え続ける。

『はあ……。さすが朝の星座占いランキング第11位の上条さんなだけありますね。全く友人に相手されませんよ。』

携帯から上条の声がする。

「後でかまってやるから頑張れっ……ん？……星座……？」

上条がポツリと言ったその言葉をもとに、一気に考えがまとまっていく。

勇斗が横を見ると、土御門も顔に笑みを浮かべている。

「……サンキュー当麻。お前のおかげでわかった気がする。おそらく、『使徒十字(クローチェディピエトロ)』の発動のキーとなる光は……星座だ。」

「そうかも、しんねーにゃー……。星座を利用した霊装を使った魔術ってのは、それほど……珍しくないからにゃー。」

『……なあ……。『使徒十字(クローチェディピエトロ)』を発動させるには星座の力が必要だって事だけど……そもそも星座を使うってのは、具体的にどんな感じなんだ？』

「……カミやん、覚えてないか？　……夏休みの終わり、御使堕し(エンゼルフォール)の時、大天使『神の力(ガブリエル)』だって星座、あれは夜空1面だったけどな、を使って魔術を放とうとしてたことをにゃー。つまり、星座を使う魔術ってのは、占星術から天使の術式に至るまで、いろんな魔術に通じるところもあるってことだにゃー。……それに、星座を形作る星1個1個の間にとてつもない距離があったとしても、地球上からの見た目の形だけに注目して、夜空(プラネタリウム)というスクリーンに浮かぶ、規則性のある図形そのものだけを、魔法陣として組み込むから、単純な形であっても、スケールがでかく、比例して強力になる。これほど使い勝手の良い魔法陣は……そうそうないって訳だにゃー」

そして、土御門は自分の考えを述べる。

「おそらく、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は、見た目の星座の図形を利用した霊装なんだろう。オリアナがあちこち移動してたのは、星座の力を、最も適切に利用できる魔術的な位置を探っていたからだ。……だが確かに、その説であってる可能性が強いんだが……、いくつかの矛盾点が、クリアできてないにゃー。」

「それって何だ？」

と、勇斗が質問する。

「いいか勇斗。……カミやんも聞いててくれよ。『使徒十字（クローチェディピエトロ）』ってのは、一二使徒の１人であるペテロの死に深く……関わる霊装だ。ただ、ペテロが死んだのは６月２９日。今とは３か月くらいずれち

まってるから、その頃の星空の様子とは、変わっちまってるはずだ……。それに、日本とバチカンの空じゃ……緯度や経度の関係で見える星座も若干だが違う。見た目の星座の図形を利用した霊装にとって、そのズレは大きい。その点をどうにか説明しないと、この仮説は成り立たないにゃー。」

「……て、ことは。　……今、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は使えない、ってことか？」

「……使えないものをわざわざ持ち込むってことは無いだろーから、多分使えるようにするための条件があるのかもしれないにゃー。」

土御門は考え込むような顔で言った。

「……だが、実は、それについてゆっくり考えてる暇はもう無いぜい。」

土御門はそう言って時計を指し示す。

「オリアナ達が『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を使うために夜空に星座が出てくるのを待ってると仮定すれば、発動のタイムリミット……おそらく日没だが……は、おそらく午後7時前。日没前に光り出す星もあるから、場合によっては午後6時でも危ない。……そして今は午後4時くらい。……つまり、残された2時間ちょっとの時間で、あいつらと、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』を見つけなくちゃなんない。……とにかく今は、動くしかない。オレはこれからオリアナのルートを占星術的に洗い出してみる。上手くいけば……オリアナが次に目指している場所が分かるかもしれないからにゃー」

『ちょ、待った！　お前、そんな状態で動いても大丈夫なのか！？』

「そんな、状態？　ハッ。……カミやん、このオレがどんな状態だってんだにゃー？」

「ボロっボロのボロっボロじゃねーか。」

「……せっかくの人の強がりは素直に受けるもんだゼイ。……時間が無いんだ。やるしかないだろ。」

土御門は笑ってそう言った。

「勇斗はカミやんと手分けして、あいつらを探してくれ。……おそらくもう監視カメラは役に立たない。気合で頑張ってくれ。」

「……ああ、やってやるさ。」『……ああ、わかってる』

「……よし。……こっからが正念場だ。おれらがあいつらを止められるか、それとも学園都市がローマ正教に支配されるか。すべてが決まる。それじゃあ、……行くぞ。」

「おう！！」『おう！！』

そして3人は、再び動き始めた。

ep. 18　9月19日－8（後書き）

そーいえばバカテス2期始まりましたね^^

見たいなー

ニコ動だけじゃなくｙｏｕｔｕｂｅでも配信してほしかったなー

ep. 19　9月19日ー9（前書き）

説明が多くてほぼ本文と同じな気が……

……そろそろオリスト入れたいと思います。

ep. 19　9月19日―9

現在時刻は午後４時３０分。

勇斗はさっきの電話の後、１度上条と合流し、上条がオリアナを見失ったバス停を中心とした、円形に周辺を捜索していた。

表通りから裏道まで、隅々まで歩き回る。

ほぼ確実にオリアナは自律バスに乗って逃げているだろう。

だが、オリアナを見つけることができず、魔術的な技術不足で土御

門を助けられない勇斗と上条にとってできるのは、こうして地道に歩き回って探すことのみである。

（……流石に焦るな……）

勇斗はため息をついて思う。

（時間は限られてるのに、探さなきゃいけないところはいっぱいある。しかも、その手掛かりはないときた。）

……本来だったなら、心が折れて、あきらめそうになっても仕方ない。そんな状況のはずだ。

だが。

勇斗は周りを見渡す。

歩道には、楽しそうに歩いている学生達の姿がある。

スクリーンには、楽しそうに競技に参加する学生達の姿が映し出されている。

そんな彼らみんな、そして自分自身にとっても、学園都市は大切な居場所だ。

この生活を、居場所を、失う訳にはいかない。

（……風紀委員（ジャッジメント）として、この街を守る。絶対に学園都市を、ローマ正教には渡さない。）

勇斗は、改めてそう決意した。

更に捜索を続けること１５分ほど。

時刻は午後４時５０分。

勇斗の携帯が着信を知らせた。

表示に映るのは、上条当麻の文字。

勇斗は急いで通話に出た。

「どうした？」

『……ステイルから連絡があった。』

と、上条はそこで１度言葉を切り、

『……姫神はなんとかなってくれたみたいだ。』

と、安堵のため息をついて言った。

『ステイルがかけた回復魔術でショック症状を脱して、あの先生の病院に運ばれたらしい。だからたぶんもう……、大丈夫だ。』

「……だな。ならもう安心だ。」

勇斗もその結果を聞き、心から安堵する。

「……なら後やることは……、あいつらを止めて、吹寄と姫神に謝らせるだけだな。」

『……ああ。絶対やってやる。』

上条は静かに、力強く言った。

『あ、そしてステイルから伝言。土御門が何か発見したらしい。いったん合流しようぜ。』

「ああ。わかった。」

そう言って通話を切り、勇斗は事前に集合場所に決めておいた喫茶店に向かった。

勇斗、上条、土御門は、集合場所である喫茶店に集合した。

「……お前、顔色も良くないし冷や汗も出てるけど……ホント大丈夫か？」

「にゃー、意外と何とかなってるぜい。」

勇斗の心配に土御門は苦笑いで返す。

「で、調査結果についてだが、わかった事は2点。あいつらは秋の星座を使って使徒十字（クローチェディピエトロ）を使おうとしてるという事。もう1つは、オリアナがまわっていた各『天文台』は、そのどの地点から眺めても、ある一定の星座を全く同じ魔術的意味で、読み取れるように工夫がされていたという事。……だにゃー。」

どこから星空を眺めても、同じように見えるというのは、一見すれば当たり前のような理論だが、これが魔術的な意味を含むとなると事情は異なる。

星座とは、いわば地球上から見た星空の仮の姿で、厳密に言えば、一歩でも異なる地点から星空を観測すれば、星座はほんのわずかに形を変える。その肉眼ではわからないレベルの誤差でも、術式が暴走してしまう場合があり、それゆえ、星の力を借りるギリシアやエジプトなどの術者が、より精密な天文台を求めて巨大な神殿を築いていった。

星空自体は誰にでも利用できるが、準備にえらく手間がかかる、というのが星座利用型術式の特徴である。星座は様々な術式に応用できるが、それを行うために、各術式にそれぞれ対応する天文台を別個に建てる必要があるほどだ。

ほんの少し動いただけで魔術的意味が異なってくるにも関わらず、まわったいくつかの天文台から全く同じ意味が読み取れる。それはつまり、何らかの魔術的な仕掛けがあるということだ。ゆえに、偶然という訳が無く、オリアナ達が秋の星座を使って使徒十字（クローチェディピエトロ）を使おうとしているという事は確定事項である。

と、土御門は補足する。

しかし、こうも言った。

「確かにオリアナが歩き回ってた理由は星座に関する事だった。おそらくそこに『使徒十字（クローチェディピエトロ）』発動の鍵があるってのも間違ってないんだろう。だが『使徒十字（クローチェディピエトロ）』が歴史上使われたのは夏だ。どう考えても今現在の秋の星座で、代用できるとは思えないんだにゃー。」

やはりその矛盾点について、最後まで疑問を拭い去れない。

その不確実さが、彼らの思い切った行動を拒む。

「ステイルが英国図書館にいるイギリス清教のメンバーに情報収集を頼んだとか言ってたが……、まだなのかにゃー……」

が、土御門が渋い声でそう言った所で、携帯電話が鳴った。

「！！　　よし、イギリス清教からだ！！」

いつもは冷静な土御門が少し慌てたように携帯電話を操作し、スピーカー機能をオンにする。

新たな情報を期待して、３人は携帯電話に注目する。

わらにもすがるような思いで、３人は耳を澄ます。

そして、携帯電話から聞こえてきた声は、

『あら。そちらはステイル＝マグヌスさんで合っているのでござい

ましょうか？』

「「「間違い電話かよ！！」」」

『…申し訳ございませんでした…』

3人が同時に叫ぶと、電話の向こうから女性のしょんぼりした声が聞こえた。

「あーあー、こっちは土御門元春。ステイルと一緒に動いてるから、報告ならオレの方で受けとくにゃー。……で、なんかわかったのか？」

『そうなのでございますよ。英国図書館の記録を当たってみた所、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』に関する新情報を入手できましたので、そのご報告でございます。』

「ん？　この声……もしかしてオルソラか？」

と、上条が尋ねる。

……

（土御門、オルソラって誰だ？）

（今月の頭くらいにあった『法の書』騒ぎの時に、カミやんのフラグメーカーの餌食になったシスターだにゃー。）

（なるほど）

上条がオルソラの天然っぷりに苦労している間、勇斗と土御門が話していると、

『では本題なのでございますよ。良く聞いていてください』

と、さっきまでのふわふわした声と違い、芯の通った声で、オルソラは話し始めた。

それを聞いた3人の緊張度が一気に増す。

『英国図書館の記録からわかった事は、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』の使用条件についてなのでございます。……何でも、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は星座の力を借りて使用される大規模霊装なのだとか。その力は、ローマ正教の

誇る１０の高位霊装、『聖霊十式』の１つに数えられるほどです。十字架を大地に立てるのは、夜空の光を正確に集め、角度を合わせて星座の光を的確に受け止め、術式に組み込んで魔術的効果を発動させるためでございますね。そして、ここからが最も重要な点でございます。』

と、ここで１度、オルソラは言葉を切る。

『……『使徒十字（クローチェディピエトロ）』は８８星座全てを用いて、世界全土で自由に発動することが可能でございます。』

「「「！？」」」

勇斗と上条と土御門は驚愕で目をむく。

『聖ピエトロ……、英国では聖ピーター、スタンダードでは聖ペテ

ロでございますが、彼が殉教したのは6月29日とされているのでございます。当然、バチカンで『使徒十字（クローチェディピエトロ）』が使われたのは、その直後だったと思います。まあ……ようは、バチカンという地方で使われたのが6月末から7月初めと覚えていただければオッケーなのでございますよ。……あくまで、バチカンという地方ではですが。』

その言葉に土御門が反応する。

「……バチカンという地方では？」

『はい。歴史上『使徒十字（クローチェディピエトロ）』が使用されたのは1度きりでございますが、その十字架はバチカン以外の地方でも使用できるように作られていたようでございます。……6月29日に使えるのはバチカン地方のみ。他の場所で使うには、それぞれ対応した日付でなければならないのでございます。エリア特定と星座の選択に、魔術的・科学的共に、複雑で高度な知識が必要である上、様々な制約が生まれるものの、この方法なら世界のどこであっても、ローマ正教による支配化が可能となるのでございます。』

「ちょっと待って。」

と、勇斗が質問する。

「『使徒十字(クローチェディピエトロ)』作成のきっかけは、ペテロの死じゃなかったっけ？だったらなんで、ペテロが死んだ日時や場所以外でも使えるようになってるんだ？」

『……実はペテロ様は当初、ご自身がどこで殉教すべきか熟考していたらしいのでございます。今日において、ペテロ様の眠る地がローマ正教の中心地となっている事からも分かる通り、ご自身の殉教地がその後の十字教の歴史に大きく関わると存じていたからと思われます。……従って、ご自身がバチカン以外の場所でも……ローマ正教にとって、より相応しい場所があるならそこを選べるよう、『使徒十字(クローチェディピエトロ)』の使用条件に幅を持たせておくために、生前から霊装を準備し、霊装完成の準備を進めていた可能性が高いのでございます。』

「でも……」

と、今度は上条が質問する。

「場所はともかく、日付の方は変えられないんだろ？　で、実際にペテロさんは６月２９日に処刑された。ちょうどバチカンで『使徒十字（クローチェ ディ ピエトロ）』が使える日付に。……ってことは、その日に合わせて、わざと捕まったってことか？」

『……その可能性が高いかと。……どうやら、処刑の瞬間まで、色々と魔術的細工をしていたようですし……』

「ありえない話じゃ……ないにゃー。……おそらく、ペテロは、自分の死が最もローマ正教の為になるタイミングを見計らってたんだろうにゃー。」

土御門は感心半分呆れ半分といった微妙な表情を浮かべて言った。

「……さすが高位霊装だな。由来のすごさが半端ない。」

「だな……。」

イギリス清教2人の話を聞いて、勇斗と上条は驚く。

「……で、オルソラ。今日……9月19日に日本で『使徒十字(クローチエディピエトロ)』を使う事が出来るポイントってのも、もう分かってんのかにゃー？」

『はい。もちろんなのでございますよ。』

土御門が聞いた言葉に、ふふ、っと笑って、オルソラは返答した。

土御門は携帯電話の通話を切った。

現在時刻は午後５時２０分。

「ここまで長かったが、ようやく事態が好転してきたって感じだにゃー。このまま上手く進んでくれるとありがたいんだが。」

土御門が指し示した、最後のチェックポイント。

第２３学区、鉄身航空技術研究所付属実験空港。

学園都市の航空・宇宙開発分野を一手に担い、トップクラスの警備態勢で守られた場所である第２３学区のど真ん中である。

「オリアナがこれまで回ってた天文台ポイントは、みんな警備が手薄な所ばっかりだった。実際に足を運んでみてわかったが、警備の少ないエリアから順番にリスクの高いエリアへと向かってた。オリアナやリドヴィアは、こっちが思ってる以上に学園都市って場所を警戒してる。てことで、オリアナが警備網で上手く足止め喰らってることを祈って、こっちもさっさと追撃かけるぜい。ヤツらが向かってるのは、事実上ラストの天文台ポイントだ。ここで捕らえて全部終わりだ。」

「ああ。」「もちろんだ。」

３人が決意を固めていると、ステイルが走ってこちらにやってきた。

「はあ……。遅れてすまないね……。」

疲れた様子で言うステイルに、土御門は不審そうな目を向けて、

「全く……。どこほっつき歩いてたんだにゃー。」

「いや……」

歯切れの悪い返事をするステイルを、勇斗と上条が擁護する。

「あー、ステイルは姫神を助けてて大変だったんだよ。慣れない魔術使ってな。」

「そうそう。そんで小萌先生を大感激させて、たいそう懐かれて困り顔だったんだよ。」

……この場では、明らかに逆効果だが。

「ぶっ！？　ば、馬鹿げた事を言うな！！　僕は……」

ステイルは焦ったように弁解するが、光のないにごった目で、土御門は冷たい視線をステイルに向ける

「……にゃー。これがあれか。カミやん病か。このクソシリアスな時に、人が血まみれんなって必死に探索魔術とか使ってたってのに、お前はその頃ラブコメ空間満喫中かよ。しかも相手はインデックスじゃなくて小萌先生だし。なんなんだよお前ら。男ならちゃんと一本筋を通せよ。後輩風紀委員（ジャッジメント）一筋の勇斗を見習えよ。」

「カミやん病とか言うな。義妹一直線のテメェに何だかんだ言われてもちっとも実感湧かねーよ。つーか勇斗が後輩一直線ってのに驚

きだよ。」

「まあ確かに気を配ってるっちゃ気を配ってはいるけど。」

「「「このロリコンが」」」

「……予想通りの反応をありがとう。だがステイル以外の2人にはその言葉をそっくりそのままご返却してやるよ。こんにちは同類。」

「なっ！？　だっ、誰がロリコンだ！」

「いやだって後輩がアウトならお前だって御坂がいる時点でアウトだろ。土御門は……この前自分で言ってたし。」

言い合う3人を見ながら、ステイルは静かにため息をついた。

「……とまあそろそろこんな不毛な争いはやめるか。おい土御門、第２３学区って警備きついんだろ。どうするんだ？」

「ああ。今回はおれのエージェントとしての特権を使う。」

「さっきの話をあっさり流せるこいつらは一体……。　……で、特権って？」

「ああ。」

土御門はニヤリと笑って携帯電話を操作して言う。

「学園都市統括理事長って知ってるかにゃー？」

ep. 19　9月19日ー9（後書き）

もう9月19日だけで9話分か……

……おそらく、次で終わります！！

ep. 20　9月19日―10（前書き）

……終わりませんでした。

そして展開も無理やり感が……＾＾；

ep. 20　9月19日―10

第23学区。　そこは、学園都市内部に住む人間にとってすらも、あまりなじみのない学区である。

そこは、わずかに丸みを帯びている地平線が、はるか先に広がるのが見えるほど、広く開けている。

その広大な敷地の大半は滑走路やロケットの発射場であり、その平坦な地面が背の高いフェンスでいくつもに区切られている。

建物はかなり巨大だが、その数も少なく、周辺の滑走路のサイズが半端な大きさではないため、正しい大きさが頭で理解できない。

そんな灰色の広大な土地を、勇斗、上条、土御門、ステイルの４人は走っていた。

「しかし……、こんなに楽に侵入できるなんてな。すげーな土御門。」

「ははは―。もっとほめるにゃー。」

真剣な表情は崩さずに、土御門は言う。

そんなやり取りを聞いて、ふと勇斗は２０分ほど前のやりとりを思い出す。

地下鉄のホームに、列車が入ってくる。

そんななか、土御門は列車に全く目を向けず、勇斗と上条とスティルの方を向いて言った。

「学園都市統括理事長に話をつけて、第２３学区の警備配置と警備方法をちょっぴり変えてもらったぜい。その切り替え時の隙をついて入り込むにゃー。」

そんな土御門の話を、正確には学園都市統括理事長という言葉を聞いて、勇斗は思考の渦に身を落とす。

（……学園都市統括理事長、アレイスター＝クロウリー、か。）

勇斗がまだ、第１２学区の神学系の学校にいた（あくまで短期間いさせられただけだが）ころ、世界最大の魔術師として、その名前を聞いたことがある気がする。もちろん、教師は魔術なんて存在しないものを研究していた、ただの変人だと言っていたが。

（今月の頭に色々あったらしい『法の書』だって、昔アレイスター＝クロウリーが聖守護天使エイワスから伝えられたことを書いたものらしいし。）

近代の魔術史に大きな影響を与えた人物、それが、アレイスター＝クロウリーだ。

（科学サイドのトップでありながら、世界最大の魔術師の名前を名乗る。……一体何を考えてんのかねー。）

さっきの電話では、科学にも魔術にも通じる土御門と対等以上の立場で話をしており、世界の相当深い場所に位置する人間だということは何となく想像がつく。

（ま、そんな人間だからこその考えってのもあるのかね。何を考えてるかはわかんねーけど。）

勇斗はそれ以上考えるのをやめ、土御門の話に意識を戻す。

気づくと、列車はホームに止まっていた。

「……この列車に乗ったら、もう後戻りはできないにゃー。待っているのは、学園都市の命運をかけた戦いだぜい。覚悟は決まったか、勇斗、カミやん。」

土御門が、勇斗と上条に問いかける。

「そんなのはとうにできてるよ。」

「……ああ。ここで全部終わりにする。」

勇斗と上条はそう言って、電車に乗り込む。

それを聞いて、魔術師２人も乗り込む。

４人の後ろでドアが閉まり、発進した列車は、地下鉄のトンネルを２３学区に向けて進んでいく。

そんな感じで、２３学区についた４人は、広大な飛行場を走っていた。

現在時刻は午後５時４０分。

タイムリミットまであと２０分から８０分。

その時間帯になれば、いつ『使徒十字（クローチェディピエトロ）』が発動してもおかしくはない。

焦りを感じながら４人は走る。

そして、彼らの前にフェンスの壁が見えてくる。

「よし、ここが目的地だぜい！！」

土御門はそう言い、フェンスに手足を引っ掛け、一気に飛び越えようとする。

が、そのとき、偶然上条は見つけた。

夕日に照らされて光を反射する、唾液に濡れた2枚の単語帳のページを。

そして、上条が声を上げる間もなく、フェンス全体が、高熱でオレンジ色に変色した。

フェンスに両手足をつけていた土御門の体が、電気を浴びたように跳ね、しゅう、という肉が焼ける嫌な音が土御門の手足から聞こえる。

目を固く閉じ、思い切り歯を食いしばり、やけどに苦しむ土御門を見て、勇斗、上条、ステイルの足が止まる。

しかし、フェンスにはさんであったページは2枚。

オリアナの先制攻撃はまだ終わらない。

突如、虚空に現れた槍が、ステイルめがけて飛ぶ。

「！？」

ステイルはとっさによけるが、その槍がステイルの腕をかすめる。

バチッ！！

という音がして、閃光が走り、ステイルが地面に倒れこむ。

突然のことに勇斗と上条が驚愕していると、

「行け、勇斗、カミやん……。おれは火傷をくらっちまったし、ステイルは多分、強烈な電撃でやられた……。すぐの復帰は無理だし、ここで時間を食ってる余裕もない。行ってくれ！！」

と、土御門が叫ぶ。

「くっ……！！」

そして、勇斗は視線をフェンスの向こうに向ける。

そして見た。

およそ５００メートルほど向こう、小さな滑走路を挟んだ向かいの建物の壁に、オリアナが寄りかかっているのを。

彼女の手には、金属リングで束ねられた単語帳があった。

「来るぞ当麻！！」

「分かってる！！」

そう言うと、上条はフェンスを殴りつける。

高熱で赤く輝いていたフェンスから、その熱が失われる。

それを見た上条は、フェンスに手足をかけ飛び越える。

勇斗は能力で生み出した翼をはばたかせて、飛び越える。

同時、オリアナは単語帳のページを口で破り取った。

魔道書の原典が起動し、爆音が勇斗と上条の５００メートル先から響いた。

オリアナが生み出した、渦を巻く空気でできた巨大なハンマーが、２人のもとに襲い掛かってくる。

渦巻く強大な圧力が建物をなぎ倒し、アスファルトをめくりあげながら、飛来する。

「……ふん。強風対決ならまけねーぞ。」

『原典』の発動と共に周囲に満ち始めた魔力、それに呼応するかのように能力が再び揺らぎだすのを感じ始めながら、勇斗は翼を振るった。

勇斗の翼によって放たれた烈風が、オリアナの空気のハンマーと激突する。

そして、大量の空気をまき散らして、空気のハンマーが霧散し、アスファルトの壁を吹き飛ばす。

「……その翼、マジでどうなってんだ？　めちゃめちゃノイズがかってるように見えんだけど。」

「……今日が初めてだからよくわかんねー。ただ、さっきも…魔術（オリアナ）

師と戦ったときもこうなってたし、なんか秘密でもあるのかも、な！！」

お返しとばかりに、翼を振るって衝撃波を飛ばす。

砕け散ったアスファルトごと、衝撃波がオリアナへ向けて飛んでいく。

驚きと苛立ちが両方表れた表情で、オリアナが単語帳のページを口で破り取ると、衝撃波とアスファルトの破片がオリアナの左右に弾かれる。

「……やっぱ甘いか。」

「いや、十分すげーだろ。」

そんなことを言い合いながらも走り続けて、２人と１人の距離が縮まっていく。

３人の激突が始まった。

タイムリミットまで、あと最短で１５分。

「んふ、女同士で楽しむのも面白いと思っていたのに。あの聖人はやっぱり来ないのかしら。」

勇斗と上条との距離は、約２００メートル。

「追加の警備員（アンチスキル）や増援の魔術師もやって来ない。ふう、ギャラリーが多くても、それはそれで楽しかったのに。」

約１５０メートル。

「まあいいわ！　私の相手は科学サイドの奥の手の少年に、不思議な右手を持ってる少年！　相手にとって、不足は無いわ！！」

あと約１００メートル。

愉快そうに叫び、オリアナは単語帳のカードを噛み破った。

ガラスの割れるような澄んだ音が鳴り響き、直後、周囲の音がすべて消える。

「！？」

「……結界、ってやつか？　ま、関係ないな。」

勇斗と上条は走り続ける。

そして、オリアナが勇斗の翼の間合いに入る。

「行くぞっ！！」

勇斗は軽く飛び上がり、その勢いも利用して、２本の翼をオリアナに向けて振り下ろした。

鋭い翼がオリアナに迫る。

対してオリアナも、カードを噛み千切って迎撃する。

光でできた壁が展開され、翼とぶつかって火花が散る。

「んふ。やっぱりあなた、なかなかやるわね。」

「……そりゃどうも！！」

と、オリアナの視界から勇斗の姿が一瞬で消える。

驚愕の表情を浮かべ、一瞬動きの止まったオリアナめがけ、拳を握って上条は突っ込む。

同時、背後に回った勇斗は体をひねって蹴りを放とうとする。

先に届くのは上条の右手。

右手が、オリアナの体に触れる。

……と、オリアナの姿が、風船が割れるように弾けた。

「「！！？？」」

「……やっぱり警戒しておいて正解だったわね。そのスピードに。」

驚愕で動きが止まった2人の前に、再びオリアナが現れる。

「……幻術！？」

「んふ、お姉さんに同じ手は通用しないわよ♪」

そう言うと、一瞬で勇斗の懐に潜り込み、掌底で顎を打ち抜く。

一瞬の後、体を翻し、左足の蹴りを勢い良く上条の脇腹へと叩き込む。

「ぐっ！！」

上条の体が真横に吹っ飛び、その体が砕けたアスファルトに叩き付けられる。

「……翼の子のスピードはさっき身をもって体感したからね。悪いけど、対策くらい練っちゃうわよ。」

薄く微笑んで、オリアナは言った。

「くっ……」

先の一撃で軽く脳震盪を起こしながらも、勇斗が立ち上がり、続いて、上条が立ち上がる。

2人とも、もう体がふらついている。

「ふふっ。腰が砕けるのが早いわね。それでお姉さんと渡り合おうっていうのは、子供の背伸びも良い所じゃない？」

「だから、どうした。」

ふらつく体で立ち上がり、まだ少し焦点の合っていないような目でオリアナをにらみながら、勇斗は言う。

「お前はここで、おれ達が止める。『使徒十字(クローチェディピエトロ)』なんざ使わせない。おれは絶対学園都市(このまち)を守る。おれ等の大切な居場所は、渡さねえ！！」

言って、勇斗は翼を槍のように撃ち放つ。

「ちっ！！」

オリアナは横に跳び、２本の翼の槍をかわす。

「……ローマ正教の支配下についちゃった方がずっと安全だと思うけど？　それに、イギリス清教から何を吹き込まれたかは知らないけど、『使徒十字(クローチェディピエトロ)』は、人と世の幸せを『最も都合が良いように』組み替えるもの。もしかしたら世界中の人々を幸せに導くかもしれないのよ？　もちろん、学園都市の人達だって例外じゃないのよ？」

「お前らにとってだけ都合がいい、捻じ曲げられた幸せなんざ願い下げだ。」

と、勇斗は即答する。

「自分たちの居場所くらい自分たちで守るし、自分たちの幸福くらい自分たちで見つけてみせる！！」

今度は、その翼を横薙ぎに振るう。

「くっ……！！」

オリアナは単語帳から1枚のカードを噛み取り、魔術を発動する。

魔力の通ったアスファルトが隆起し、翼が受け止められる。

だが同時に上条が真正面から突っ込む。

オリアナはとっさに腕をクロスさせてガードの体勢をとるが、そのガードの上に、上条の全体重の乗った右拳が叩き付けられる。

「ぐっ……！？」

衝撃を逃がす暇がなく、オリアナの両腕に鈍い痛みと振動が伝わる。

「……おれだって言わせてもらうけどな」

そう、上条は言う。

「……なんでテメェらみたいな魔術師ごときに大覇星祭を潰されなくちゃなんねーんだよ。」

5本の指に力が入り、拳がさらに強く握りしめられる。

「科学と魔術のバランスだの、テメェらの面子だのなんだのは正直どうだっていい。伝説の霊装だ？　そんなもんでごまかしてんじゃねえよ。　……テメェらの勝手な行動でこの祭りが潰されること。そして、テメェが傷つけたやつらにまだ魔術を使おうとしていること。おれが許せねえのはそこなんだ。」

と、そこで上条は言葉を切って、

「……だから、テメェのふざけた幻想は、……おれ達がここで全部ぶち殺す！！」

そう強く言い切った。

赤から紫に変わりつつあり、一番星が瞬き始めた空の下。

３人が再び動き出す。

再び上条は、正面からオリアナへと突っ込む。

対してオリアナは単語帳のページを口で破り、魔術を発動させる。

青白い炎が吹き上がり、いくつもの炎の剣ができる。

そしてオリアナは、それを上条に向けて放った。

上条の右手だけでは対処できない量の炎剣。

しかしそれは、勇斗の翼の一振りで消し飛ばされた。

（また術式の魔力以上の『力』で消し飛ばされた……。いったい、どうなっt）

思考の渦に陥ったオリアナを、上条の声が強制的に引き戻す。

「うおおおおお！！」

「！？」

気づくと、上条はもう目前まで迫っていた。

とっさに、拳が当たる直前、オリアナは足で、上条の片足を内から外へと大きく払い、上条のバランスを崩させた。

「おわっ！？」

「ふふ。なめてかかっちゃだめよ。」

バランスを崩して膝をつく上条、その無防備にさらされた頭に、オリアナはカウンターを叩き込もうとする。

が、

「させるかよ！！」

と、オリアナの右側に瞬時に移動した勇斗が、強烈な蹴りを放った。

「がっ……？」

わき腹を強(したた)かに打ち据えられたオリアナが吹っ飛んだ。

「……サンキュー。」

心の底から安堵したように、上条はつぶやく。

「気にすんな。……油断すんなよ。」

そう、勇斗は返す。

その前方で、オリアナがゆっくりと立ち上がる。

「……さっき、……あなた達、言ってたわよね。」

言いながら、一歩一歩オリアナは近づいてくる。

「自分たちが負けられない理由を。」

勇斗と上条は、オリアナが近づくにつれ、空気が凍っていくような気がした。

「そんなもの、私にだってあるの。」

場の空気を、オリアナが支配していく。

「絶対に負けられない理由……止まれない理由が！！」

痣だらけで、所々に擦り傷を負いながらも、目には強い意志の力が浮かぶ。

「礎（Basis104）を担いし者！！」

その言葉を聞いて、勇斗と上条の体に緊張が走る。

魔法名。

魔術師が、戦闘で魔術を行使するときに名乗る名前。

それは、一部の魔術師にとっては『殺し名』であり、自身の覚悟、信条を表すことと同義だ。

「……こっからが、本番か。」

「……みたい、だな。」

2人が構えを取る。

が、その瞬間

オリアナが恐るべき速度で上条の懐に突っ込む。

「な……ッ！！」

回避も防御も許さないスピードで上条の至近距離に迫ったオリアナは、単語帳のページを口で破り、その手で上条の腹から胸を撫で上げた。

その直後。

オリアナの手が触れた場所から空気が吹き荒れ、

ボッ！！

という鈍い音を上げながら、上条の体が鳩尾（みぞおち）を中心に突き上げられる。

そしてそのまま、オリアナは宙に浮いた上条の鳩尾を、拳で打ち抜いた。

「ご、がっ……！？」

その一撃で３メートル以上吹っ飛んだ上条には目もくれず、勇斗の方をむいたオリアナは再び単語帳のページを破り取る。

巨大な黒い、影を固めてできたような槍が打ち出される。

「！！　……何度やっても同じだ！！」

そう言って、勇斗は翼を振るう。

原理や正体すらいまだに曖昧な力が、その槍を吹き飛ばす。

「……やっぱり出力じゃかなわないわね。」

無表情にオリアナは告げる。

「でもね、……力でかなわないなら数で押すわよ！！」

「！？」

気づくと、勇斗の周囲、全方位を、黒いカケラが漂っている。

そしてそれらが、一斉に勇斗に向かって放たれる。

「ちっ！！」

消しきれないと判断した勇斗は、とっさに飛び上がるが

「！！　……追尾型（ホーミング）！？」

飛び上がる勇斗を追いかけて飛ぶカケラが、勇斗に直撃した。

「ぐあっ！！」

とっさに振るった翼で7割のカケラは吹き飛ばしたものの、残り3割のカケラと、落下によるダメージが勇斗を襲う。

「……油断なんかしてたら、死んじゃうわよ。」

そう、オリアナは皮肉めいた笑みを浮かべながら言う。

そのオリアナをにらみつけながら、勇斗と上条は立ち上がった。

その2人のもとへ、オリアナが向かってくる。

無造作に見えてその実、全く死角のない動きで。

「あ、それともう一つ。」

楽しげに、オリアナは言う。

「……何だよ。」

と、勇斗は返す。

「……高速移動は君だけの専売特許じゃないのよ？」

「！！」

何かの光が閃く。

勇斗がそう思った時には既に、斬られていた。

オリアナが生み出した氷の剣で、左肩から右のわき腹まで、袈裟懸けに。

「ぐ、あああああああ！？」

倒れこんだ勇斗と、それを見て動けずにいる上条にむけ、オリアナは言う。

「……殺しはしないけどね。　ああ、そういえば。　高位の魔術師で、体術とかの戦闘術を極めてる人たちだったら、音速を超えて動くのなんて、難しいことじゃないの。　ま、……君たちが言った聖人（キカオリ）が来るっていうハッタリが、役に立ったのよね。これだって、対聖人用に考案した術の１つなんだから。」

鮮血を流す勇斗を見ても、オリアナは表情を変えない。

むしろ楽しげに、声が響いた

戦いを続ける、２人の足音がする。

上条を排除しようと、オリアナが魔術を放つ音がする。

その魔術を、上条が『殺す』音がする。

オリアナが、飄々と話す声がする。

上条の怒号が聞こえてくる。

地面に倒れる勇斗は、学園都市の運命をかけた戦いの音を聞いていた。

もちろん、勇斗は何もしようとしなかったわけではない。

だが、

（痛みで、……まともに演算ができない。）

左肩から右のわき腹にかけて走る激痛が、勇斗から立ち上がる力と、能力を使う余裕を奪う。

（……でも、アイツは1人で戦ってんだ。右手に宿る、不思議な能力だけで。）

勇斗は拳を握りしめる

（おれだって、こんなところで寝てる場合じゃないだろ！！）

だが、その意識に逆らって、体は動かず、だんだんと意識が薄れてゆく。。

（くそっ……！！　どうにかなんねえのかよ！？）

……そんなとき、勇斗は気づいた。

……自分の中のゆらぎが、……どんどん大きくなっ……ていることに。

（……これは、一体なんなんだ？）

勇斗は頭に疑問符を浮かべる。

が、その間にもどんどんゆらぎは大きくなっていく。

……あたかも、何かが抑圧から抜け出そうとしているかのように。

（……これは、いったい……）

そこまで考えが及んだ時、勇斗は薄れゆく意識の隅で、上条が地面に倒れ伏すのが見えた。

そこまで見た勇斗は、意識を手放す。

無意識に、ゆらぎの中に身をゆだねながら。

残る全てのページを解き放ち、上条を撃破したオリアナは、誰ともなしにつぶやいていた。

「……これで、お姉さんの願いがかなう。」

オリアナはそう言って、その場を立ち去ろうと歩き出した。

……だが、その後方で、力が渦巻き始めるのを、彼女は感じた。

「…？」

彼女が後ろを振り返ると、そこには翼を背に出現させ、立ち上がっ

ている勇斗がいた。

依然として血は流れ続け、顔はうつむいていて見えない。

「……まだやるの？」

そう問いかけるオリアナの声に、しかし勇斗は一切の反応を返さない。

ただ、代わりに答えてでもいるかのように、翼のノイズがひどくなっていく。

そして、そのたびに強くなっていく『力』。

「チッ……！！　やっぱり殺しちゃうべきだったかしら！？」

そう言って、拳を握り、勇斗に向かうオリアナ。

……その目前で、勇斗の背中が弾け飛んだ。

「くっ！？」

その余波で吹き飛ばされる、オリアナ。

地を転がされ、それから立ち上がる。

……そして顔を上げ、彼女は驚愕する。

それは、瀕死に近かった勇斗が立ち上がったことにではなく、

体に負ったはずの傷が消えていることについてでもない。

「……何なの？」

オリアナは目前の光景を受け入れられないといった様子でつぶやく。

「一体何なの？」

……

「……その水晶の翼と、金色の輪っかは？」

ep. 20　9月19日―10（後書き）

次こそ、次こそ終わらせる！！

……はず

ep. 21　9月19日ー11（前書き）

やっと9月19日編終了！！

みなさんお待たせいたしました＾＾；

そして気づいたらpv50000，ユニーク60000超え！！

みなさん、この駄文を見てくださってありがとうございます。

ep. 21　9月19日―11

オリアナの数メートル先、そこに立つ……否、３０センチほど宙に浮かぶ勇斗の背には、これまでの白い光の翼ではなく、青っぽい鋭い光を放つ、水晶でできているような鋭利な翼が、頭上には、金色に光る輪が出現していた。

その姿はまるで天使のようであり、勇斗から感じられる力の量も、天使と呼ばれるに足る、膨大な量だった。

勇斗のその姿を見て、オリアナは言葉を失う。

そして今、オリアナは気づいた。

あの、翼のノイズから感じられた、正体不明の力。

……あれは確かに天使（テレズマ）の力だった。

だがそれは、オリアナがよく知るテレズマではなかった。

オリアナにはよくわからない、『謎』の力によって干渉を受けており、既存のものとは全く異なるものになっている。

それだけではない。

オリアナが感知したテレズマは、現代魔術でよく扱われる、『神（ウリ）の火（エル）』・『神の薬（ラファエル）』・『神の力（ガブリエル）』・『神の如き者（ミカエル）』に対応するもので

はなかった。

「……まさか、……これは」

そのテレズマは、かつて、神の右側に座する天使であったが後に反逆し、天使の3分の1を率いて神に逆らったことで、天界より堕ちたとされる大天使に対応するもの。

『明けの明星』の名を冠し、堕天使とされながらも、人間に光を与えた者として崇拝されることもある存在。

「……これは……、光を掲げる者（ルシフェル）……？」

上条は立ち上がることができずにいた。

オリアナから受けた最後の攻撃のダメージのせいではなく、場を支配する、圧倒的な雰囲気に。

（あれが……）

8月の終わり、『御使堕し（エンゼルフォール）』の時と、似た感覚を、上条は覚える。

胃袋に石を詰め込んだような感覚、呼吸は乱れ、心臓は早鐘を打つ。

その威圧感、存在感。

あの時の『神の力（ガブリエル）』と比べれば、まだまだ弱いが、それでもあの天使と同質のものを上条は感じる。

（あれが、勇斗の本当の力……！？）

なぜ勇斗がこんな魔術的な力を持っているのか。

なぜ学園都市の能力者が、こんな魔術的な力を振るっているのか。

気になることはいくらでもある。

聞きたいことはいくらでもある。

しかし、上条は答えを知らないし、その場のだれもがその問いに対する答えを持ってはいない。

ただただ、勇斗（てんし）が、そこに君臨するという事象だけが、確固たる事実だった。

「……どうやら、覚醒しちゃったみたいだにゃー……」

少し離れた場所で、土御門は呟いた。

その場所にも『天使』が発する圧倒的な力、威圧感、存在感は伝わってくる。

「……オリアナが原典任せにめちゃくちゃ強力な結界張ってくれたおかげで、外部に漏れてないのは助かったにゃー。もし漏れてたら今頃禁書目録は大騒ぎしてどうやってでもこっちに来ようとしてただろうからにゃー。」

と、土御門は安堵の息を吐く。

「それにしても、……力の質は『光を掲げるもの（ルシフェル）』、か。　……アレイスターの奴、魔術サイドに……、いや、十字教にケンカ売る気満々じゃねーかにゃー。」

苦笑しながら言うが、実際問題、ばれてしまえば相当まずいだろうと土御門は思う。

科学サイドの人間がテレズマを、しかも、堕天使の力を使う。

（特にローマ正教あたりの人間だったら、ぶちぎれて学園都市に乗り込んでくるぐらいするんじゃねーかにゃー？）

そうなれば、待っているのは壮絶なお仕事タイム。

自分の目的は、舞夏のいる学園都市を守ることなのだから。

（全く……、先が思いやられるにゃー。）

そんな中、勇斗が動いた。

うつむいていた顔を上げ、まっすぐにオリアナを見る。

「……bfshldvgheovbf.jov.jfvbil……」

聞き取れない、謎の言葉をつぶやいて、ゆっくりと右手を上げていく。

オリアナはそれを見て、いや、それと同時に高まっていく魔力のうねりを感じて我に返った。

（これは……、まずい！！）

オリアナはあわてて、保険として持っていた、１枚の防御術式のカードを発動させる。

同時、勇斗の手が空に向く。

そして、

光が降り注いだ。

音が炸裂し、閃光が走る。

全てが収まったとき、勇斗の前方、１５０メートルの範囲が、半円形に破壊しつくされていた。

ただ、オリアナが立っていた場所だけが、破壊を免れている。

（くっ……。原典で防御したとはいえ、ここまでダメージを負うなんて……。今の出力は、並の、魔術師なら、一瞬で、消し飛んでる……。）

そして、オリアナは意識を失い、倒れた。

それを見ている勇斗の背中から翼が溶けるように消えていく。

同時に、頭上の輪っかもだんだんと透けていく。

その勇斗の後ろから、上条の声がした。

「……勇斗。大丈夫か？」

勇斗は振り返ってそれにこたえる。

「……ｃｒｓｆあｎｊｏｌｉあ。何とｃｊｉｏｈｕｒｅｉな。」

「……わりい。今、何て言った？」

勇斗はそう言われると、翼と輪っかが完全に消えるのを待って、口を開いた。

「ああ、何とかな。って言った。」

「そ、そうか。……で、今のは何だったんだ？」

「……わかんねえ。ただ、おれがなんかの力を使ったのは覚えてる。天使みたいな姿になったのもな。……ぐあっ！？」

そこまで答えたとき、強烈な頭痛が勇斗の体を襲った。

「！？　だ、大丈夫か！？」

「……やばい、かも」

頭痛と同時に、体全体をだるさが襲う。

「わりい……。任せた……」

そう言って、勇斗は意識を手放した。

「……、ここは……、病院、か。」

勇斗が目を覚ますと、そこは第７学区の病院だった。

外は暗く、もう深夜のようだ。

鈍く痛む頭に気をつかいながら体を起こして、時計を見ると、時刻は１時３０分。

オリアナとの戦いからはだいぶ経っている。

「……！！　そういえば、『使徒十字（クローチェディピエトロ）』はどうなったんだ？」

全く情報がない。

自分がオリアナを倒したのは覚えている。

しかし、そのあとどうなったのか。

と、混乱している勇斗のもとへ、１人の来客があった。

「どうやら、目が覚めたみたいだね。」

「！　……先生。」

それは、上条がよくお世話になっている、カエル顔の医者だった。

「さて、いくつか話しておくことがあるから、よく聞いてほしいんだがね。」

そう言って一旦言葉を切って、

「まず1つ目、君の友人たち、……上条君と金髪の彼と長身の英国人からの伝言だが、『万事解決！！』だそうだ。また何かの事件に首突っ込んでたみたいだね？　君たちは。」

「いやー……、ははは。」

「……気を付けないと君まで病院マスターになってしまいそうだね。」

呆れたように少し笑って、続ける。

「そして2つ目、君の症状についてだ。　どうやら慣れない量の演算をこなして脳に負担がかかってたみたいだね。まあそこまでひどいものじゃあなかったからよく寝れば治るだろう。ま、安静のために明日……いや、今日か。今日一日は能力の使用を控えるように。」

「……はい。わかりました。」

「ま、普通に出歩くのは問題ないからね。君たちが守った大覇星祭をめいいっぱい楽しむといい。」

「！！　……はい。」

一体どこまでこの人は知っているのだろうか。

思わず苦笑いを勇斗は浮かべる。

「さて、そして3つ目だが……」

と言ってカエル顔の医者は部屋の出口に向かっていき、

「……そこの彼女にもちゃんとお礼を言ってあげるんだよ？」

と言って、部屋を出て行った。

「そこの彼女？」

勇斗はポカンとした表情を浮かべると、あたりを見回す。

……すると、ベッドの縁、ベッド脇の椅子に腰かけ、上半身をベッドに乗り上げる形で眠る、初春がいた。

どうやら見舞いに来てくれていたようだが、昼間の疲れと眠気に負けてしまったらしい。

「見舞い、来てくれてたのか。」

自分の身を案じてくれる初春の行動が嬉しくて、勇斗は初春の頭を撫でる。

「サンキュー。」

もう夜も遅く、初春を起こすのはかわいそうだったので、これ以上は朝に持ち越すことにして、勇斗は再び眠りはじめた。

第7学区、窓のないビルの内部

昼も夜も問わず、モニターや計器類の光があふれ続けるこの建物にある生命維持槽のビーカーの中で、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』、アレイスター＝クロウリー

は口元に笑みを浮かべていた。

「ハイブリッド。『似て非なる他者の境界を超える者』。演算によってテレズマを操り、非科学的法則に基づいてＡＩＭ拡散力場に干渉をかける、科学と魔術の境を超える者。……やはり、素晴らしいな。」

心の底から愉快そうに、彼は言う。

「君の研究は、プランに縛られる私の人生のいい気晴らしだよ。」

アレイスターの進めるプランにおいて、勇斗の位置づけは、いい気晴らし。

もちろん、プランに組み込む気も満々なのだが。

科学と魔術の境を越える勇斗の力、それをうまく利用、解析すれば、虚数学区の制御可能化を早められるのではないかと、アレイスターは考えていた。

「……まあ、まだまだ『光を掲げる者（ルシフェル）』のテレズマの演算統制には苦労しているようだが……。これからどんどん慣れていってもらわなければな。繰り返し繰り返し、反復作業が勉強の基本だろう。フフフ……」

そして朝、勇斗は目を覚ました。

上半身をベッドから起こし、周囲を見回す。

深夜、ベッドの端で寝ていた初春の姿は無い。

どこに行ったのだろうかときょろきょろ見回していると、入り口のスライド式のドアが開いた。

前髪の先がかすかに濡れ、タオルを持ち、何より、いつもの花飾りを外した初春だった。

どうやら、顔を洗いに行っていたようだ。

「おう、おはよう初春。」

「！　勇斗先輩！？」

と、とても驚いた声を上げた。

「昨日は心配かけたな。悪かった。ごめん。」

「……ほんとですよ。どれだけ心配したと思ってるんですかー。」

初春は少しほほを膨らませて言う。

「ごめんごめん。あと、ありがとな初春。お見舞い来てくれて。」

が、勇斗が素直にそう言うと、ふふっと微笑んで、

「どういたしまして、ですね♪」

と言った。

「さて、そういや今日も見回りあったよな。」

「はい。今日の担当は第７学区北側で１１時から１３時です。」

「……よし、お詫びとお礼を兼ねて昼ご飯はご馳走するよ。楽しみにしててくれ。」

「ホントですか！？　ありがとうございます♪」

「いやいや、気にすることないさ。よし、先生呼んでさっさと退院するか。」

「はい！」

そう言って、勇斗は立ち上がった。

自分たちが守り抜いた平和を実感しながら。

（……ま、まだまだ謎はいっぱい残ってんだけどな）

昨日の顛末や、使徒十字の行方（クローチェディピエトロ）はもちろん、１番は自分の能力について。

自分が振るった力の正体とか。

テレズマではないかと目星をつけているが、確証はない。

（ま、考えててもわかんないし、後で土御門に聞いてみよう。）

そうやって思考を放棄(まるなげ)し、勇斗は退院の手続きをするために早足でカエル医者のもとへと向かう。

大覇星祭でやりたいことは、まだまだいっぱい残っている。

勇斗はさらに早足になる。

さっさと祭りを楽しもうと、病院を出るために。

ep. 21　9月19日－11（後書き）

大覇星祭自体は、あと１ｏｒ２話ほど続きます。

ご了承くださいませ＾＾；

設定資料２（前書き）

設定というか……

短い短い補足です＾＾；

設定資料２

勇斗の能力について

９月１９日、オリアナとの戦闘中に、能力に『ゆらぎ』が発生する。

その『ゆらぎ』が発生している間は、魔術を、”術式を構成している魔力ごと吹き飛ばす”という形で、無効化できる。

実はこのゆらぎとは、勇斗の体に内包された『光を掲げるもの（ルシフェル）』のテレズマであり、このテレズマを

翼をはばたかせて生んだ風に乗せ、飛ばしていた。

しかし、このテレズマは、何らかの力の干渉を受けており、既存のテレズマとはだいぶ異なっている。

”術式を構成している魔力ごと吹き飛ばす”というのは、ある量の水を大量の水で押し流すのに近い。

アレイスターからは”ハイブリッド”と呼ばれ、『似て非なる他者の境界を超える者』。演算によってテレズマを操り、非科学的法則に基づいてＡＩＭ拡散力場に干渉をかける、科学と魔術の境を超える者、と称される。

ep. 22　9月20－25日：大覇星祭Ｏｔｈｅｒ　Ｄａｙｓ（前書き）

遅くなりました＾＾；

バイトの準備の息抜きで書いてたつもりが……

全部書いちゃいましたｗｗｗ

読んでいただければ、報われる思いです＾＾；

ep. 22　9月20―25日：大覇星祭Ｏｔｈｅｒ　Ｄａｙｓ

９月２０日。

カエル顔の医者に退院の許可をもらった勇斗は、初春と一旦別れ、クラスの方に合流した。

上条は頭や腕などに包帯を巻いていたが、元気そうにしている。

土御門も少し疲れたような顔をしているが、上条たちと騒いでいた。

（……やけど負ってた割には元気そうじゃねえか土御門）

他のクラスメイトに聞かれてはまずいため、勇斗は小声で土御門に話しかける。

（おお、勇斗か。いやー、これでも一晩中肉体再生（オートリバース）使い続けて頭疲れてるんですたい）

（ああ。表情見たら疲れてんのはよーくわかった。）

（……全く、演算ってのは苦手だにゃー。）

（しゃーねーだろ。）

（おっしゃる通りで。ところで……勇斗、後で昨日のことにつ

いて伝えておきたい。時間とれるか？　……そうだな、昼休みとか大丈夫かにゃー？）

（あー、悪い。昼はジャッジメントの見回りで抜けるぞ。）

（……一応聞いておく。誰と見回りだ？）

（あー。……初春だが）

（……やっぱりか。　……ようこそこちらの世界に、勇斗。……いや、ロリコン。）

（……テメェ、そろそろいい加減にしやがれ。そしてその不名誉なあだ名をやめろ！！）

声を抑えて、だがしかし、強く握った拳で、勇斗は土御門につっこみを入れた。

「ぐぼぁ！？」

割とマジな勢いで、土御門は飛んで行った。

「おはよう当麻。」

「おはよう勇斗……あいつ何したんだ？」

苦笑いしながら上条は土御門を指さす。

「うーん……、ま、いつものことじゃん？」

「ま、確かに。」

「だろ。……ま、土御門の事は置いといて、さっさと今日の競技の準備しようぜ。」

「ああ。えーっと、今日は、」

「騎馬戦の予選だな。」

「……復活早々上条さんは身の危険を感じます……」

という上条の言葉とは裏腹に、珍しく『不幸』は起こらず、無事に騎馬戦は終了した。（勇斗達、ｗｉｎ！）

昨日の無気力はどこへやら、テンションが上がり、優勝したかのように騒ぐ同級生を苦笑いで見ながら、勇斗は見回りに向かう。

その後ろで、吹寄の怒声と、頭が頭を打つ鈍い音が聞こえたがスルーした。

「お疲れ様です、勇斗先輩。　体調は大丈夫ですか？」

「うん、問題ない。ありがとう初春。」

初春と合流した勇斗はそんなやりとりをかわして、見回りへ出発した。

その後、特に変わったこともなく平和な雑談の時間だった仕事を終えて、2人は第7学区のレストランへと向かった。

「よくここに、御坂さんと白井さんと佐天さんの4人で来るんですよ。それで、ずっと食べたいと思ってたパフェがあって……」

「今日はおれのおごりだから、何でも頼んでくれていいよ。」

「ホントにいいんですか！？　ああ……、ついに、ついにあの

憧れのビッグパフェが……！！」

初春がうっとりした視線を向ける先、見れば、高さ３０センチほどありそうな、というか、バケツパフェとでも言いそうな、巨大パフェが鎮座している。

「いつもだとちょっと贅沢になっちゃって食べられなかったんですけど……今日はお言葉に甘えちゃいますね♪」

満面の笑みを浮かべた初春に、勇斗は引きずられていった。

昼食を済ませ、午後の競技に向かった初春と、勇斗は別れる。

すると、ちょうどそこに土御門から電話が入る。

「おーす勇斗。さっきは、お楽しみでしたね！」

何も言わず、勇斗は電話を切った。

再び携帯電話が鳴る。

「……テメェ。」

「悪い悪い。それで用件なんだがな、今から時間大丈夫か？　昨日の事だ。お前に関わることもあるから、なるべく早く話しておきた

いんだが。」

「流しやがった……。まあいいや。大丈夫だ。ちょうど俺もいろいろと聞こうと思ってたし。どこに行くといい？」

「んー……、じゃあ第7学区第2公園でいいか？」

「おう。ちょうど今近くにいるから、すぐ行くよ。」

「了解だにゃー。」

そう言って切れた携帯をポケットにしまい、勇斗は公園に向かう。

途中、自販機でコーヒーを買って、公園のベンチに座って一服する。

そうやって土御門を待つ間、先程のレストランでの光景を思い返した。

ドン、とテーブルを揺らして、置かれる巨大パフェ。

実物を目の前にして若干顔が引きつる勇斗の前で、キラキラした瞳でそれを食べ始める初春。

すごくおいしそうに食べてくれて、おごった甲斐もあるというものだった。

（あそこまで嬉しそうにしてくれると、またおごってやろうという気になるね）

そんなこんなで勇斗が5分ほど座っていると、公園の入り口に例の金髪グラサンの姿が見えた。

「おう、勇斗。待ったかにゃー？」

「まあ少しはな。……ほら」

さっき1本多めに買っておいた缶コーヒーを土御門に放り投げる。

「っと、サンキュー。」

そう言ってコーヒーを受け取った土御門は、缶を開け、コーヒーを1口のみこむと、表情を真面目なものに変えた。

「……さて、それじゃあ昨日の事について話そうか。」

「ああ、お願いするよ。」

「じゃあまず使徒十字(クローチェディピエトロ)についてだ。結果として、霊装が発動することは無かった。ナイトパレードの花火が丁度霊装の発動時間に当たってててな。お前も学園都市に結構いるからわかると思うが、あの光量だ。夜空の星の光なんざ全然見えなかったゼイ。後はカミやんから連絡をもらったおれと、意識を取り戻したステイルがリドヴィアの居場所を探させた。で、いろいろあって、使徒十字(クローチェディピエトロ)は必要悪(ネセサリウス)の教会(ス)の方で回収完了したにゃー。」

「……オーケー把握。オリアナとリドヴィアは？」

「そっちも必要悪(ネセサリウス)の教会で回収済みですたい。」

「なるほど。」

「……で、どっちかって言うとこの話はまあどうでもいい。重要なのはもう片方の話だ。……勇斗、お前の能力についてだな。」

「……おれもぜひそれが聞きたかったんだ。頼む。」

「了解だにゃー。まず、……勇斗、お前、頭上の輪っかと水晶みたいな翼を覚えてるか？」

「……ああ。ぼんやりとだけどな。」

「あの現象を引き起こしたのは、お前の体に内包された天使（テレズマ）の力だ。それも現代で言われてる四大天使のものじゃない。ずっと昔、天より堕ちたとされる大天使……光（ルシフェル）を掲げる者に対応してる。」

「……やっぱりテレズマだったか。そんな気はしてたけど。」

そう言って、勇斗は言葉を切った。

「けど、何でおれは能力者なのにテレズマを扱えるんだ？　普通ならお前みたいに拒否反応が出るんじゃないのか？」

「……そこはまだよくわかってないにゃー。だがとりあえず言えることは、昨日勇斗が振るってた力はテレズマだってことだにゃー。」

「そうか。……しかもそのテレズマは堕天使のもんだと。」

「そうだにゃー。……科学の街にいる能力者が、どんな原理かは知らないが、魔術側の力を使い、おまけにそれは堕天使の力だった……。まあ……お前が光を掲げる（ルシフェル）者の力を振るったのを知っているのは、オレとオリアナくらいのもんなんだがな。それが魔術サイドの人間に知られちまうのはかなりまずい。ケンカ売ってるようなもんだからな。　ただ、それが魔術サイドにばれようがばれまいが、ローマ正教からすれば、学園都市の能力者に自分たちが敗北したという事実だけで、学園（ココ）都市に攻め込む口実にもなりかね

ない。」

と、一口コーヒーを飲んで、話を続ける。

「お前は不可抗力とはいえ、力を振るって、ローマ正教の魔術師を追い払った。その報復を狙って、この街にやってくる魔術師たちと、下手すると殺し合いになるかもしれない。その覚悟があるか、聞きたいんだ。」

そう、土御門は言うと、じっと勇斗の目を覗き込んで、続けた。

「逃げ出すのも構わない。オレがどうにかしてお前の生活は保障しよう。　戦うのも構わない。お前にはそれができる力があるだろう。」

そう言って、今度は本当に黙り込んだ。

勇斗は考える。

自分がどうすべきなのか、どうしたいのか。

いや、そんなのは考えるまでもない。

勇斗は口を開く。

「戦うよ。」

意志を込めて、土御門の目をまっすぐ見て、言う。

「戦う。」

「……ホントに、いいのかにゃー？　待ってるのは……そうだな、カミやん以上の厳しい生活かもしれないがいいのか？　命の危機に、何度も何度もさらされる。　それでいいのか？」

土御門はそう言うが、勇斗の意思は変わらない。

「ああ、やってやる。　いつかどうせまた上条がどっかでいろいろやってるから、学園都市が狙われる事になるんだろ。おれはこの街を守りたい。だから、戦う。ただ、その立ち位置が風紀委員（ジャッジメント）で収まるのか、お前や当麻と同じように科学と魔術の狭間になるか、それだけだ。」

勇斗の意思は強く、それがわかったからこそ、土御門も短く言葉を返す。

「……わかったにゃー。なら、がんばろうゼイ。」

「ああ。」

勇斗は残ったコーヒーを、一気に飲みほして言う。

「死力を尽くしてやらせてもらうよ。」

「ふっ、頼んだぞ。」

決意を新たにして、勇斗と土御門は次の競技会場へと向かった。

９月２５日。

学校対抗順位で、勇斗達の高校が常盤台中にコテンパンにされて上条が涙目になったり、能力者同士の場外乱闘を、勇斗と、退院した白井が鉄拳制裁で止めたり、上条がいつも通りのラッキースケベ的ハプニングを起こしたり、初春に誘われてフォークダンスを踊る勇斗の横で、御坂と踊ってた上条が白井と追いかけっこを始めて、キレた御坂が電撃をまき散らしながら白井を捕まえるのを笑いながら観賞したりしながら迎えた、大覇星祭最終日。

この日、勇斗達は競技が無かったので、勇斗、上条、インデックスは、閉会式まで屋台巡りをすることにした。

財政難にあえぐ上条家計をかんがみて、勇斗がインデックスに食べ物を与えていたのだが、インデックスの食欲はいつも通り凄まじく、勇斗の財布から、樋口一葉さんが1人お引越ししてしまった。

そんな犠牲を払ってインデックスを満足させ、3人が歩いていると、視界にベニヤ板と角材と釘で作ったいかにもお手製な屋台が入ってきた。

店番をしているのは霧ヶ丘女学院というお嬢様学校の女子高生だ。

「おー。当麻、これ『来場者数ナンバーズ』じゃねーか。結果見てったらいいんじゃないか？」

「あー、だな。」

そう言って上条が受付に近づいていく。

「？　ねーねーゆうと。　『らいじょうしゃすうなんばーず』って何？」

「んー、まあ宝くじみたいなもんかなー？　大覇星祭中の総来場者数を予想して、紙に数字を書いて受付の人に渡すんだ。で、祭りの最終日の１０時までの総来場者数と予想した数が近い人には豪華賞品プレゼント、みたいなやつ。」

「ふーん。じゃあとうまは多分だめだね。」

「多分ｎ「えー、来場者数ナンバーズの結果、あなたの指定数字は見事ドンピシャ！！　１等賞です！！　賞品は北イタリア五泊七日のペア旅行です！！　おめでとうございます！！」……まじか

よっ！！？？」

「え！！？？　どうしようゆうと！！　なんか天変地異でも起こる気がするんだよ！！」

「おれも激しく同意だインデックス！！」

しかし、後ろで叫ぶ2人と違い、上条は落ち着いていた。

ガランガラン鳴り響くハンドベルの音を、呆然とした様子で聞いている。

そんな上条に向けて、半袖Tシャツ、赤いスパッツという姿のスポーツ少女なお嬢様は、屋台のカウンターの下にある物置スペースから大きな封筒を取り出して言った。

「本来は学生向けではなかったんですが、大覇星祭終了後の振り替え休日期間を利用して参加するプランでして。旅行に関しての詳しい日程、観光予定、必要書類などは全てこちらにありますので、後で目を通しておいてください。なお質問がある場合は当女学院ではなく、ツアー担当の旅行代理店の方にお願いします。」

と、営業スマイルの少女から封筒を渡される上条。

が、上条は両手を組むと、首を傾げて、

「あのー、ちょっと聞いても良いですか？」

と言った。

「旅行に関する詳しいご質問にはお答えできない場合があります。それでもよろしいなら。」

「1等賞って、あの1等賞ですよね」

（（……え？））

予想斜め上の質問で、勇斗とインデックスの目が点になった。

「……ご質問の意味が分かりかねますが」

「一番運の良い人が当たるあの賞なんですよねッ！？」

「ええと、もう行っても良いですか」

「いや待った！！　これは北イタリアの旅なんですよね？」

「これぐらいなら答えられるので答えますけど、書面にそう書いてあると思うのですが」

「気がついたら飛行機が得体の知れない科学宗教の私設空港に向かっていたりとかっていう壮絶展開はありませんよね？」

「……あ、分かった。もしかして海外旅行はこれが初めてですか？」

「いや、そう言われればそうなんだけどさあ！！」

「とにかく2等賞以下の発表がありますので、質問は旅行代理店の方にお願いします」

「あっ、ちょっと！　いやおれも分かってるよ、十中八九そんなイレギュラーは起きないって事ぐらい！　でもなんかありそうじゃね？　飛行機がいきなりハイジャック犯に乗っ取られたり、目を覚ましたらそこは南極のど真ん中だったりとか！　分かってるよ考えす

ぎだって事ぐらいでもなんか落とし穴がありそうな気がするけどこれ本当にペアで北イタリアに行けるんだよな！？　ねえってば！！」

上条がそこまで行ったところで勇斗が上条を強制回収。

店番をしていた女の子に「連れが迷惑をかけましたー！！」と言い残して、ダッシュで逃げた。

「……お前、テンパりすぎ。」

「……すまん。」

「後ろで見てたけど相当痛い人だったかも。」

「……すいませんでした。」

とかなんとかやって、上条の精神のライフを削り取って遊んだ勇斗とインデックスだった。

その後、「今すぐ帰って準備しないと間に合わないんだよ！！」とせかすインデックスに引きずられていった上条を見送ると、勇斗は暇になった。

「さて……、これからどうするか。」

と、当てもなく歩き出そうとした勇斗の背中に何かが飛びついてきた。

「いえーい！！　迷子捜索隊けっせーいっ！！　ってミサカはミサカははしゃいでみる！！」

と、いろいろ気になるワードを発した謎の物体―おそらく少女であろう―は首に手を回すと、おんぶのかっこうをとった。

「……ミサカ？」

そうつぶやいた勇斗が背中の物体を地面におろし、その顔を見てみる。

そこにいたのは、外見年齢１０歳前後、肩までの長さの茶色の髪と同色の瞳、そして立派なアホ毛を持った、御坂美琴そっくりな姿の少女だった。

「……お前、妹達（シスターズ）の１人なのか？」

「そーだよー。妹達（シスターズ）の最終ロット、検体番号（シリアルナンバー）２０００１号、打ち止（ラストオー）め（ダー）だよってミサカはミサカは自己紹介してみる！！」

「……なるほど。ミサカネットワークがバグった時のための上位個体ねぇ。」

道端の屋台からジュースを買ってあげて、ついでに自分の分のジュースも買って、それを飲みながら、２人は公園で話すことにした。

「話が早くて何より、ってミサカはミサカは胸を張ってうんうん頷いてみる。」

「……で、何しに来たんだ？　打ち止め（ラストオーダー）。」

「んーとー、あの人と一緒に大覇星祭を回ってたんだけど、はぐれちゃって困ってたところにあなたと上条当麻さんを見つけたから『実験』の時と『残骸（レムナント）』の時のお礼を言おうとしたんだけど上条さんがどっか行っちゃったからそっちへのお礼はまた今度にして今はまずあなたにお礼をしようと思ってて、もしよかったら風紀委員（ジャッジメント）のあなたにこの後あの人を探すの手伝ってくれないかなーという期待を持って会いに来たんだよ、ってミサカはミサカは一息で説明したせいで酸欠になりながらも自分の現状を説明してみる！！」

「あー……お疲れさん。」

「ねぎらいの言葉が少ない、ってミサカはミサカは……酸欠がー……」

「まずは落ち着けって。」

「……すーはーすーはー……よし、落ち着いたよってミサカはミサカは報告します！！」

「それは良かった。　なら一つ一つ、もう1回言いなさい。」

「わかったー。なら、まずはあなたへのお礼だね。残骸（レムナント）の時はありがとうございました、ってミサカはミサカは誠心誠意感謝の気持ちを述べてみる。」

そう言って、打ち止（ラストオーダー）めはぴょこんとアホ毛を揺らして頭を下げた。

「気にすんなよ……と言いたいところだけど、素直に受け取っておくよ。どういたしまして。」

その言葉を聞いて打ち止め（ラストオーダー）は、再びぴょこんとアホ毛を揺らして頭を下げた。

「……で、２つ目は？」

「えっと、大覇星祭を一緒に回ってたあの人を見つけてほしいの、ってミサカはミサカは言ってみる。」

「なるほど。迷子捜索ってのはそう言う事か。」

「そうなんだよ。すぐにあの人はふらっ、てどっか行っちゃうんだからー、ってミサカはミサカは愚痴をこぼしてみる。」

「多分迷子になったのはお前だけどな。」

「むー。そんなことないもん！！ってミサカはミサカは地団駄を踏んでみたり！！」

「はいはい。で、いなくなった奴の名前は？」

「全く聞いてないし……ってミサカはミサカはショックを受けたんだけど。　まあいいや、その人は一方通行（アクセラレータ）っていうのーってミサカはミサカはちょっとなげやりに伝えてみる。」

「ぶっ！！　一方通行（アクセラレータ）！？　何であいつとお前が一緒にいるんだ？」

「あの人は自分の命を張ってわたしの命を助けてくれたの、ってミサカはミサカはあの人の優しさというか変化っぷりを伝えてみる。」

「……そーか。あいつもいろいろあったんだな。っていうか命って！？」

「うん。あの人が能力使って私を助けてくれてるところに、研究員

だった人が銃を撃って、反射で弾けなかったらしくて……頭に被弾しちゃって、何とか助かったけど演算能力なくしちゃって、それで、今はミサカネットワークで代理演算してるの、ってミサカはミサカは事の顛末をお伝えします。」

「……アイツ、すげーな。」

「そーなの、ってミサカはミサカは両手を組んでゆっくり頷いてみる。　……とゆーか気になったんだけど、あなたってあの人と面識あるの？ってミサカはミサカは聞いてみる。」

「んー、そーだなー。あれは年単位で昔の事か。実はおれも昔ちょろっと暗部にいたことがあるんだけど。」

「なんだかとんでもないカミングアウト聞いちゃったかも、ってミサカはミサカはちょーびっくり。」

「まあ詳しい話は割愛するが。そこでたまたまアクセラレータと会ったんだけど、ああ、『実験』（レベル6シフト）の前な、……好みのコーヒーの話題で意気投合して仲良くなったんだよ。」

「それでそれで！！　ってミサカはミサカは続きを促してみる。」

「でな、ある時研究員の一人がいたずらしたんだよ。アクセラレータの好きなコーヒーの銘柄全部買い占めてな。実験施設に備え付けの売店みたいなとこで売ってたんだが、おれ達は実験期間中でカンヅメだったからそっから出れないわけだよ。そしたらあいつぶちぎれて、……必死になだめたなー。外出許可なんかとる間もなく能力使って外出てコーヒー調達してきて。帰ってきたらもう機材はボロボロだったな。研究員は失神してたし。人的被害が０、ただし金銭的損害は歴代トップクラス。それがあいつと会った時の通称『コーヒー事件』だったなー。」

「そーなんだー。って、ミサカはミサカは人に手を出さなかったあの人に驚いてる。」

「やっぱりあの『実験（レベル６シフト）』が歪めちまったんだろ。　……と、そして噂のあいつを探すんだったな。遅くならないように急ぐか。」

「あ、忘れてなくてよかったー、ってミサカはミサカは安堵のため

息を吐いてみる。」

「忘れてねーよ。」

そう言って、勇斗は打ち止め(ラストオーダー)を連れて、１７７支部へと向かう。

風紀委員(ジャッジメント)１７７支部の端末にアクセスしたところ、ラストオーダーの迷子届が出ており、（そのデリカシーのなさがミサカは頭にくるのーっ！　ってミサカはミサカは両手を振り回してポカポカやってみる！！　とか言っていたが）届出主(アクセラレータ)は例の病院にいるという事だったので、勇斗はラストオーダーを連れて、病院へと向かった。

「……おや、勇斗君。また来たのかい？」

第7学区の病院に入って早々、ちょうどロビーに出てきていたカエル先生に声をかけられた。

「……いや、今日は迷子のお届けですよ。」

「迷子？」

そう言うと勇斗は、売店でお菓子を熱心に見て動かないラストオーダーを指さした。

「ああ。そういえばアクセラレータ君が迷子を1人置いてきたと言ってたね。」

「ちゃんと迷子センターに届け出てましたよ。あいつ。　……

ところで、お見舞いしたいんですが、大丈夫ですか？」

「ああ、問題ないよ。部屋の番号は教えるから、あの子も連れて行ってあげてくれ。」

「わかりました。」

そして、アクセラレータの部屋番号を教えてもらった勇斗は、ラストオーダーを引きずって、彼の部屋へと向かった。

「お邪魔しまーす。」

「ただいまー、ってミサカはミサカは叫んでみる！！」

そう言って2人が病室に入ると、アクセラレータと、黄泉川がいた。

「騒がしィなぁ。……って、なんでお前がここにいンだァ？」

「なんだアクセラレータ。知り合いか……って、勇斗じゃん。何だ、こいつと知り合いだったじゃん？」

「はい。うーん、昔馴染みって感じですかね？」

「……まァ、そんなところだなァ。」

「あー、ほっとしたじゃん。こいつに友人がいて。ちょうど困ってたじゃん。お見舞いに来てくれる人がいなくて、こいつも退屈してたじゃん。」

「黄泉川ァァァァァァ！！」

それを見ていた勇斗とラストオーダーは思わず噴き出した。

「……チッ、つーかお前は何しに来たんだァ？」

「ああ、お前の迷子（ラストオーダー）のお姫様を連れてくるついでにお見舞いしようと思ってな。ま、そんだけ叫んでれば大丈夫そうだな。……首元のそいつ以外は。」

首元のチョーカーを見つけて、勇斗はそう言った。

「なんだ、お前風紀委員（ジャッジメント）してんのか。……あァ、まァな。おかげでこいつらがいねえと日常生活すら送れねェ。苦労してンだよ。」

「……もっと大切にしてやれよ。お姫様をな。」

そう言って、勇斗は立ち上がり、ドアの方へ向かった。

「なんだ、もう帰るじゃん？」

「はい。そろそろ閉会式があるんで、そっちの手伝いに行ってきます。」

そう言うと勇斗はアクセラレータとラストオーダーを見て言った。

「退院したらまたコーヒーでも飲んで話しよう。」

「あァ。いいぜ。」

「やった！！　ミサカも楽しみにしてるよー！！　ってミサカはミサカは期待に胸を膨らませてみたり！！」

「まずは退院しろよ。じゃ、お大事に。黄泉川先生も、お疲れ様でした。」

「おう、お疲れじゃん。」

そう言って勇斗は病室を出て、閉会式へ向かった。

閉会式では、勇斗はイタリア旅行の嬉しさと、御坂との罰ゲームへのプレッシャーが渦巻いた微妙なテンションの上条を観賞しつつ、開会式同様の校長の長い話を受け流し、終了後、クラス全員で打ち上げへと向かった。

……打ち上げが終わったとき、疲労でぶっ倒れてなかったのは、勇斗、上条、吹寄、姫神の４人だけだったという。

ep. 22　9月20－25日：大覇星祭Ｏｔｈｅｒ　Ｄａｙｓ（後書き）

さて、大覇星祭もようやく終わりまして、いよいよ9月末ですね。

書くのが楽しみですが、上手く書けるかどうかはわかりません＾＾；

努力してがんばります。

ep. 23　9月26日（前書き）

大覇星祭も終わり、いよいよ次の話です。

少し短いですが、ｅｐ．２３です。

どうぞ！！

ep. 23　9月26日

勇斗は朝食を作っていた。

ごはん、わかめと豆腐の味噌汁、焼き魚、卵、おひたし。

和食で統一されたおかずをてきぱきと準備、調理し、テーブルに並べていく。

全ての料理が机に並んだのは午後１：００。

時間的には朝食と呼んでよいか疑問が浮かぶが、前日までの大覇星祭の疲れと、打ち上げでの夜更かしのせいで普段より遅く起きた勇斗にとっては、これが朝食となる。

「いただきまーす。」

そう言って、勇斗は食事を開始する。

絶品というわけではないが、ひとり暮らしの高校生のおなかを満足させることはできるくらいの味の朝食(ちゅうしょく)を食べながら、今日から北イタリアはヴェネツィアへと旅行へ向かう2人組に、勇斗は思いをはせる。

「……あいつら、ホントにちゃんとイタリアに行けるんだろーか……」

「……へっくち！！」

「ん？　風邪でも引いたか、インデックス？」

「うー、きっと誰かが私たちの事噂してるんだよ。」

……インデックスの安全ピン騒動で、飛行機に乗り遅れかけたという事を、勇斗は知らない。

食事を済ませ、やることがない勇斗は、散歩することにした。

家を出て、どこへ向かうという訳でもなく、歩いていく。

すると、そんな勇斗に声がかけられた。

「あ、勇斗じゃない。」

そう言って近づいてきたのは、御坂美琴だった。

「御坂か。どうした？」

「実はアイツと大覇星祭で賭けをやってたのよ。学校対抗順位で負けた方が、勝った方の言うことを何でも聞くっていうやつ。」

「あー。何か当麻もそんなこと言ってたなー。」

御坂が言う『アイツ』＝上条当麻　だという事はすでに常識だ。

「で、今日その罰ゲームを執行しようと思ってたんだけど、アイツが見当たらなくて。どこにいるか知らない？」

「……アイツなら、今頃空の上だと思うけど。」

「……は？」

「北イタリアはヴェネツィアへ、5泊7日のツアー旅行に出かけたぞ。今朝出発で。」

そんなこと全く知らなかったのであろう御坂は、最初は口を開けてポカンとした表情を浮かべていたが、次第に表情を険しくすると、バチバチッ！！　と、周囲の空気を帯電させ始めた。

「あの野郎……！！　罰ゲームすっぽかして何やってんのよ……！！」

「おれを巻き込まれても困るんだが……。まずは落ち着いてその漏電をどうにかしろよ。」

「えっ！？　ああ、ごめん！」

そう言うと、漏電は収まったが、それでも怒りは収まらないらしい。

ぶつぶつと何かをつぶやいているが、『最大電圧でストレス発散……』だの、『超電磁砲（レールガン）のキャッチボール』だの、『新技の実験台』だのと、所々で聞こえてくるその不穏な言葉の数々に、勇斗は上条への同情を禁じ得なかった。

（……あいつ、終わったな。）

故に勇斗は、上条（しんゆう）当麻の命を守るために、こんな提案をする。

「なあ御坂。罰ゲームを盾にしてアイツをデートにでも誘ってみたらいいんじゃねーか？」

「へ？」

勇斗の言葉に、間抜けな声で反応する御坂。

「デ、デートって……あのデート？」

「そーだな。あのデートだ。」

「わたしが？」

「御坂が。」

「アイツと？」

「当麻と。」

そこまで言うと、急に御坂は黙り込んだ。

「……御坂？」

「……んふふ……。罰ゲームなんだから、何でも言う事聞かなくちゃいけないんだからねー……まずは何をしてもらおうかなー……ふへへへ」

何だかとんでもなく幸せそうな笑顔と共に、そんな言葉が唇から飛び出した。

「……お前、どこまでぶっとんでんだよ……。」

「……はっ！？　え、あ！　いや、違うわよ！！　そっ、その……何でもないわよーっ！！」

そう言い残して、御坂は走り去った。

「あんなにバチバチ言わせながら走ってって、……電子機器が心配だな。」

冷静に見届けて、しかしあえてずれたツッコミを、勇斗はボソッとつぶやいた。

ところ変わって、ここは北イタリア、ヴェネツィアの玄関口、マルコポーロ国際空港行きの機内。

機内食が出され、今は食事の時間である。

ブラウスとスカートという普段では見慣れない服装のインデックスと共に、上条は食事を楽しんでいた。

が、しかし、上条の体に悪寒が走る。

「？　どうかしたの、とうま？」

「……なんか、いやな予感がする。なんかこう、痺れる系の。」

「……どうせいつもの事なんだから無駄に何か起こるフラグを立てるのは感心しないかも。」

「もっとおれを励ましてよっ！！」

機内に、上条の悲痛な声が響いた。

御坂を見失った勇斗は、散歩を続行した。

（……そうだ、久々に遠出して第２２学区のゲーセンにでも行ってみようかな。）

そう考えた勇斗は、第２２学区の地下に向かうことにした。

第２２学区。それは学園都市最小面積の学区で、地下数百メートルまで開発が行われており、その内部に地下施設が発展している学区である。

地上部分に一般的な家屋やビルは存在せず、太陽光発電や風力発電に頼れない地下街で用いる大量の電力を補うために設置された、ビル３０階分程度の高さを持つ『巨大なジャングルジム』のように立体的に組み合わさった風力発電のプロペラが並んでいる。

その地下階層は全部で１０の区画に分かれていて、　地下へ至る道路は直径２キロの外周を這うように螺旋を描いており、上りと下りの車線を合わせると二重螺旋になる。

勇斗はその第３層、地下９０メートルの深さまでエレベーターで降り、入り口ゲートをくぐる。

ここにはスパリゾート安泰泉という『お風呂の形をしたレジャー施設』があり、お風呂だけでなく、ゲーセンやらショッピングモールやらボーリング場が詰め込まれているのである。

「んー……久々に風呂入ってくのも悪くは無いかなー。……ま、まずはゲーセンゲーセンっと。」

勇斗はスパリゾート安泰泉の建物に入ると、そのままゲームコーナーへと向かった。

「……ふう、満足満足、と。」

時間はすでに夕方。

音ゲーでハイスコアをたたき出し、対戦型クイズゲームでは優勝、『スキルアタック』という能力測定機械を応用した、耐衝撃機構を備えたミット型の標的に能力を叩きつけて力の強さを数字で出力するゲームでは、御使顕現（エンゼルライズ）の力を容赦なく（ただし、機械が壊れない程度に）振るって（具体的に言えば、翼を叩き付けて）優勝を掻っ攫って満足した勇斗は、ここで風呂に入っていくことにした。

「んー、どこにはいろうかなー。」

と、勇斗は悩んでいたが、そんな彼に向かって、後ろから声がかけられた。

「んー？　そこにいるのは勇斗かにゃー？」

聞き覚えのある声に勇斗が振り向くと、金髪グラサンの寮の隣人、土御門がそこにいた。

「おう土御門。奇遇だな。お前も風呂入りに来たのか？」

「そうだにゃー。ちょっくら疲れを取ろうと思ってここに来たんですたい。勇斗は？」

「おれは散歩のついでにふらっとな。」

「なるほどな。ま、とりあえず行こうゼイ。」

「おう。」

「あー……、いい湯だったな。」

プラネタリウムの星空の下、勇斗は言う。

「まったくだにゃー。……これで空が本物の空ならよかったんだがな。」

「それは言わない約束だ。」

そんなことを言っていると、勇斗の携帯に着信があった。

名前を見ると、上条当麻、と表示されている。

「「……」」

勇斗と土御門はそろって沈黙する。

（なあ土御門。これって出ても問題ないよな？）

（……ああ。多分、こっからイタリアの厄介事に巻き込まれることは無いだろうからにゃー）

（……だよな。よし。）

「もしもし？　どうした？」

『あ、もしもし、勇斗？　なんと……無事何事もなくイタリア着いたぞー！！』

「マジかっ！？」

予想に反した事実に勇斗と、そばで聞いていた土御門は驚愕する。

『まあ……他のツアー参加者とは合流できなかったんだけどな。』

「やっぱり無事じゃねえ！！」

『いや、でもオルソラとか天草式の人達と会えてどうにかなったんだよ！！　珍しく幸運だろ！？』

「……オルソラさんってこの前お世話になったシスターさんか。で、天草式はお前の知り合いの魔術組織か。確かに幸運だけど……。……何でだろう。嫌な予感しかしないんだが。」

『なっ！？』

「ま、とりあえず今のところは無事そうで何よりだよ。また定時報告でも入れておれ達を安心させてくれよ。じゃあな。」

ピッ

勇斗はそう言って電話を切った。

「もう一回言うけど……、魔術サイドの人間と会っちまってる

時点で嫌な予感しかしないよ。」

「……全くだにゃー。」

人工的な星空の光のもと、勇斗と土御門はそろって苦笑いを浮かべた。

その後、勇斗と土御門は某牛丼チェーン店で夕食を済ませ、学生寮へと帰った。

上条の旅行も、この街も、とりあえず今は平和なようだった。

ep. 23　9月26日（後書き）

第22学区については、wikiを参照しました。

それにしても、wikiって見てて面白いですよね。

この前は、気づいたら2時間くらい経ってました^^;

ep. 24　9月27日

前日、夜11時に寝た勇斗は、早朝5時に携帯の着信音で叩き起こされた。

「……なんなんだ？」

寝ぼけ眼で電話を取った勇斗は、携帯を耳に当て、そう言った。

「起きたかにゃー？」

「……土御門か。何だよ。まだ5時じゃねーか。眠いんだよ。」

「一応緊急だにゃー。」

「……何だ？」

「……キオッジア近海にローマ正教の聖霊十式の１つ、『アドリア海の女王』、ならびに『女王艦隊』が確認された。って言えばある程度の事情はつかめるんじゃないかにゃー？」

「……アイツ、また魔術サイドの事件に巻き込まれたのかよ。今ので一気に眠気覚めたわ。」

「ま、そういうことだにゃー。で、ちょっと話しときたいこととかあるからちょっと家来てくれねーかにゃー？」

「……はぁ。しゃーねー……。すぐ行くから朝飯準備して待っててくれ。」

「朝飯については舞夏の当てがあるから期待してくれていいにゃー。」

「了解。」

そう言って電話を切った勇斗はてきぱきと着替え、準備を済ませて、隣の部屋へと向かった。

「おう、早かったな勇斗。」

「おー勇斗ー。おはようなんだぞー。」

「おう土御門、舞夏。おはよう。」

玄関を開けると、土御門兄妹が既に待っていた。

「……よし、朝食の準備はしたし、勇斗も来たから私は帰るぞー。またなー。」

「また頼むにゃー、舞夏ー。」

「お疲れ舞夏。」

舞夏を見送った2人は、部屋へ上がり、テーブルを挟んで向かい合って座った。

「で、話しときたい事ってなんなんだ？」

「にゃー。今回の騒動で名前が上がってる聖霊十式の1つ、『アドリア海の女王』について説明しておこうかと思ってな。」

そう言って土御門は一度立ち上がり、台所へと向かって、お茶を取って帰ってくる。

「ずっと昔、かなりの繁栄を見た都市国家ヴェネツィアに対して危機を抱いたローマ正教が、大事が起きた時に一撃でヴェネツィアを葬れるように整えたのが、『アドリア海の女王』だ。対都市専用の大規模術式だな。だがそんな大それたものを、ヴェネツィアの迎撃程度の事には使えない。故に、ヴェネツィア用の防衛網として『女王艦隊』が用意された。ここまではいいか？」

「ああ。……また随分と古めかしい物を持ち出してきたな。そんなものを用意して、一体何を始めるつもりなんだ？」

「……正直そこがよくわからないんだにゃー。大規模術式『アドリア海の女王』はヴェネツィアに対してしか発動できない。ただ、今言ったみたいに、ローマ正教とヴェネツィアがいがみ合ってたのは、もう何百年も前の話だ。今じゃあむしろ世界的な観光地としてローマ正教が得る恩恵も少なくないはずだからにゃー。ここにきて急に壊す理由がわからないんですたい。」

「ここにきてヴェネツィアを破壊する……か。普通、そんな大それたことをやる理由と言えば……権力の誇示か？」

「……確かにその線はありそうだけどにゃー。実際この前、同じ聖霊十式の一つである『使徒十字（クローチェディピエトロ）』で大覇星祭期間の学園都市を攻撃して、少しも通じなかったからにゃー。ローマ正教が焦ってる様子が目に浮かぶようだぜい。でも、焦りを覚えた連中が動きを見せるにしても、何でヴェネツィアが狙われる事になるのか、という大きな疑問は依然として消えないんですたい。」

「やろうとするからには、絶対理由があるんだよな。……もしかするとこいつも、大覇星祭の時みたいに何かからくりがあるのかもな。……なあ土御門。『アドリア海の女王』って使って得することとかあるのか？」

「いや、そういうのはないにゃー。『アドリア海の女王』には破壊以上の価値は存在しない。ソドムとゴモラに振るわれた天罰と同じで、『あらゆる物から価値を奪う』効果を持つからにゃー。」

「ソドムとゴモラ……っつーと、たしか大天使『神の力』が火の矢の雨を降らしたせいで滅んだっていうあの背徳の都か。」

「そう。『アドリア海の女王』は、まずヴェネツィアを背徳の都に対応させ、火の矢の術式を打ち込む。それによって、ヴェネツィアは街の中心から外周まで、その全てを完璧に破壊しつくす。これが第1段階だにゃー。」

「？　第1段階？　てことは、それ以上があるのか？」

「そう。第2段階では、さらにヴェネツィアを離れていた人や物品をも狙って破壊する。ヴェネツィアに関わる全てのものが破壊されるんだにゃー。ヴェネツィア派っていう学問やヴェネツィアに関わる歴史さえ、もしかすると一瞬で消え去ってしまうかもしれないんだにゃー。」

「なるほど。本体だけでなく、関連のあるすべてを破壊しつくすねぇ。……考えるだけでぞっとするな。」

「ああ。……まあ、あくまで対象はヴェネツィアのみだから、学園都市にいるおれ達がそこまで警戒する必要はないだろうけどにゃー。」

「……思ったんだけど、その『アドリア海の女王』の照準制限を解くなんて魔術は無いよな？　科学サイドを目の敵にしてれば、『アドリア海の女王』で狙う相手なんて真っ先に学園都市になるんだからな。」

「それは確かにそうだが、その確率は低いんじゃねーかにゃー？　この大規模術式は昔ローマ正教がヴェネツィアに対抗するためだけに生み出されたもんだ。それが現代向けにバージョンアップして制限が無くなりました、って、口で言うのは簡単だけど、実際やるには魔術構成の書き換えやらエピソード性の追加やらでかなりの手間とコストがかかる。教皇クラスの魔術師ですらこんなもんだからな。並大抵の、あるいは優れている程度の魔術師だったら手を出すことすらできないにゃー。」

「なるほど。」

「ま、ここまで説明はしたが、後おれたちにできるのは、舞夏特製の朝飯を食べて、次の報告を待つことだにゃー。」

それからやく4時間、イタリアから何の連絡もなく、時間は過ぎていく。

あの後、舞夏の絶品の朝食に舌鼓を打ち、それからは土御門の部屋で待機しているが、そろそろ2人は退屈し始めていた。

「……暇だな。」

「暇だにゃー……。」

「まだ情報入ってこないのか？」

「にゃー。どうやらカミやんと天草式と＋αが『女王艦隊』の旗艦に乗り込んだっていうくらいかにゃー。」

「何だよそれ！！　思いっきり事態進行してんじゃねーか！！　言えよ！！　そんな大事なことは早く言えよ！！」

「まあまあ。いつも通りなら、これで片が付く。はい解決！　だからいいんじゃないかにゃー？」

「それとこれじゃ話が別だろうが！！」

と、勇斗が土御門に全力で突っ込んだとき、土御門の携帯が鳴りだした。

発信者は知らない番号である。

「……今回の報告かもしれないにゃー。ちょっと席外すぞ。」

「ああ、了解。」

土御門は席を立ち、台所の奥へと向かっていく。

勇斗はぼんやりと上条の苦労を労いながら、土御門が戻ってくるのを待っていた。

が、突然の「はぁ！！？？」という土御門の大声で、思考が中断される。

驚いて、電話を耳に当てる土御門に目を向ければ、さっきまでとは明らかに違う、真剣な様子の土御門が目に入った。

電話が終わったのか、土御門が居間の方に戻ってくる。

サングラス越しの瞳には、さっきまでのふざけた様子は全く残っていなかった。

「……どうしたんだ？」

「ローマ正教の魔術師が学園都市に侵入した。前回の……オリアナとリドヴィアの時とは違う。今回の連中は、学園都市を破壊しに来てる。」

「はあ！？」

まさかの事態に一瞬頭がついていかなくなる。だが、勇斗は何とか

疑問を口に出した。

「……一体何があったんだ？」

「手短に話すぞ。……さっきの電話はカミやんからだったんだが……さっき勇斗が言ってたな。『アドリア海の女王』の照準制限を解く術式は無いのかと。」

「ああ。」

「それがあったっていうのが１つ。」

「！！」

「まあそっちはいい。カミやん達が『アドリア海の女王』ごとぶっ潰してくれたらしいからな。これで、科学サイドの全滅は避けられた訳なんだが、……話はこっからだ。」

と、土御門は一旦話を区切って、再び話し出す。

「実はこの事件の黒幕は2人いたらしくてな、1人はカミやんがイタリア(むこう)でぶん殴ってくれたんだが。……もう1人の魔術師(くろまく)が、部下と共に、『アドリア海の女王』の保険として、この街に潜り込んでたらしい。で、この街をぶっ潰す計画なんだそうだ。……『アドリア海の女王』っていう大規模術式を使うことで、学園都市と同盟関係にあるイギリス清教の注意を集めて、何もなければ照準制限を解いた『アドリア海の女王』で科学サイドのすべてを破壊し、仮に失敗しても、別働隊が学園都市の破壊だけは行う。何ともえげつない作戦だろ。」

「……だな。」

「そうだ。だからその侵入者をどうにかしないと、今回の騒動は終わらない。……さてここで改めて質問するぜ勇斗。……お前は命の危機を背負ってでも、この街を守ろうという意志はあるか？」

その問いかけに対して、勇斗は即答する。

「……何度も言わせんなよ。」

強い意志を持って、答える。

「あるに決まってんだろうが。」

ここは第7学区の裏路地。

普段から日が当たらないため、じめっとした印象を与える道に、１０人ほどの男達が立っている。

１０人は皆一様に『窓のないビル』を見上げている。

傍から見れば、１０人の服装と相まって、とても異様な光景に見えただろう。

１人はどこかの民族衣装のような恰好。

そして残りは全員鎧をまとい、武器を持った、映画にでも出てきそうな騎士の恰好をしているからだ。

不審な集団以外の何物でもなく、見れば、スキルアウトですら通報してしまうかもしれない。

しかし、彼らは通報されることなく、そこに立ち続ける。

時間は午前１０時。普段であれば人通りは多いはずなのに、なぜか。

それは、人払い、認識阻害、光の操作など、徹底した隠蔽術式群によって、完全に身を隠しているからだ。

その集団の中、１人だけ服装の違う男が口を開いた。

「まさかビアージオと『アドリア海の女王』で失敗するとはな。…

……だから油断するなと常々言っているのに。」

その言葉を聞いて、騎士の1人が口を開く。

「し、しかし、ビショップ・アイザック。いくら異教の者とはいえ、子供たちを殺すというのはやりすぎでは……？」

それを聞いた他の騎士が口をはさむ。

「何甘いこと言ってんだよ。異教徒なんてみんな人じゃないんだ。しかもこいつらはおれたちに敵対してる連中だ。十字教騎士団（マーダークルセイダーズ）の流れを引く私達ローマ正教騎士団がなぜ殺して悪い！？　大体……」

手を上げ、ヒートアップしかけたその騎士を止めたのは、先程ビシ

ョップ・アイザックと呼ばれた男だった。

「お前のいった事はもっともだ。本来であれば、神の愛を説き、子供たちの考えを改めさせるのが正しいのだろう。しかし……この街は『使徒十字（クローチェディピエトロ）』による支配さえはねのけた。あの聖霊十式の１つのな。それに今回、ヴェネツィアでは幻想殺し（イマジンブレイカー）、が同じく聖霊十式の『アドリア海の女王』さえ打ち破ってしまった。……もうこの街は敵性だ。こうなればこれ以上放っておくことなどできない。それに……」

突然言葉を切ったビショップ・アイザックに全員の視線が集まる。

「……出迎えが来たようだしな。」

「「！！？？」」

裏通りの向こう、ビショップ・アイザックが見つめる先を全員が見る。

そこを歩いてくるのは2人の少年。

緑色の腕章をつけた少年と、金髪にサングラスをかけた少年だった。

「こんにちは、ローマ正教(こりない)の魔術師(カスども)の皆さん。」

にこやかに、勇斗は言う。

「ジャッジメントだにゃー。『条約』を違反しての破壊行為未遂でテメェら全員ボッコボコにしてやるにゃー。」

あくまでにこやかに、土御門は言う。

笑顔の下にのぞく敵意に反応したのか、騎士団の面々から、敵意や殺気が溢れ出す。

「……なんだガキども。俺たちを止めにでも来たのか？」

「はん！！　科学の能力者ごときに俺たち騎士団が止められるとでも思ってんのか？」

「おい、まずはこいつらから殺しちまおうぜ！！」

盛り上がる騎士団から溢れ出ていた敵意や殺気が、魔力という具体的な力へ変わる。

「……こいつら、話し合う気がみじんもないのな。騎士団が聞いてあきれるよ。ただのＤＱＮじゃないか。」

「ま、最初から敵意全開でいったおれらに言えた事じゃないけどにゃー。」

「……まあな。」

周囲に溢れ出す力を、勇斗は感じ取る。

そして、呼応するように、自らの根底でゆらぐ力。

９月１９日、その日には自らの意志で制御することができなかったゆらぎ。

だが今は、不完全ながら、自らの意志で統制できている感覚がある。

それを感じ取ったのか、土御門が言う。

「……勇斗、いけるか？」

「……ああ。」

そう言って、勇斗は前に出る。

「やってやるさ。」

直後、勇斗の背から翼が飛び出す。

今までよりも鋭く、青白い光を放つ1対の翼。

そして、頭上には白い輪が浮かぶ。

「こんだけヒントもらえれば、ミスなんてしねーよ。」

天使(ゆうと)は不完全ながらも、圧倒的な力を持って、そこに君臨する。

「な……。」

それを見た騎士団は言葉を失った。

なぜ、この科学の街に、天使の姿をした者がいるのか。

全く持って理解できない。

そしてそれは、やがて怒りへと変わってゆく。

「貴様ぁ！！　その姿、我らが神の威光を愚弄しているのかっ！？」

「この見かけ倒しめ！！　お前から血祭りにあげてくれる！！」

そういうと、騎士団のうち3人が、各々の武器を持って襲い掛かってくる。

「この3人での攻撃は我らが十字教の『三位一体』が反映されている術式だ！！」

「最後に我が主の威光を知って死ね！！」

「くらえ、異教のサルが！！」

そう言って3方向から突っ込んでくる騎士たち。

「勇斗！！　だいじょうぶなのか！？」

「……まあ、見てなって、土御門。」

そう言うと勇斗は、無造作に翼を薙いだ。

一瞬にして術式は破壊され、突っ込んできた3人はそのまま弾き飛ばされる。

意識を刈り取られ、地に転がる仲間の姿を見て、他の騎士たちは言葉を失う。

そんな静寂の中、勇斗は言った。

「普通騎士団とかの人間だったら何かこう……相手の雰囲気とかから力量差が分かったりすると思ってたのになあ。それすら分からず突っ込んでくるなんて、その程度なのかよ、ローマ騎士団って。」

その一言は、残りの騎士団の面々を怒らせるのには十分すぎた。

各々の武器を手に取り、天使(ゆうと)に向かって走る騎士団。

……ビショップ・アイザックは、勇斗が翼と輪っかを現出させた瞬間から、魔術的な目で勇斗を分析していた。

（……どうなってる。これは。……こいつの翼と輪と、身に纏う力の力場は確かにテレズマに酷似している。ただ、正体がつかめない……。それに、総量がおかしすぎる……。この量は……テレズマに換算すれば軽く見積もっても聖人に匹敵するぞ！！？？）

そこまで分析を行ったところで、彼は騎士団が全滅しかけていることに気づく。

無理もない、と彼は思う。

聖人と同等の力を持つ人間に、ただの騎士団がかなう訳がない。

「お前ら！！　逃げろ！！」

無駄とは感じつつも、叫ぶ。

勇斗の口元に笑みが浮かんだのを、彼は見た。

ある者は壁に叩き付けられ、ある者は翼による打撃を受け、またある者は翼から生み出された衝撃波をまともにその身にくらい、倒れ伏す。

早い話が、騎士団全員がのびていた。

「さて、残ってるのはあなた1人なんだけど、……まだやるの？」

「……あれだけの力を振るっておきながら1人も殺さないか。とんだ甘い人間だな。」

勇斗の問いかけを無視して、アイザックは言う。

「そんな甘い人間にやられるとは、騎士団も弱くなった。」

そして勇斗を見据えて、告げる。

「まあいい。もともとこいつらになど期待はしていない。ここにいた騎士団全員でかかってきても、どうせ私には敵わないのだから。……行くぞ能力者。次は私が本気を見せる番だ！！」

その言葉を聞いて、勇斗は気を引き締める。

騎士団が発したものとは比較にならない魔力が周囲に満ちる。

「……数価。　４０．９．３０．７。合わせて８６。メム＝テト＝ラメド＝ザイン。照応。水よ、蛇となりて剣のように突き刺せ！！」

ズバン！！と地下の水道管を破って、地面から噴水のように水の柱が飛び出す。

その水の柱がまるで蛇のように動き、何本もに枝分かれした水の蛇が、槍となって勢いよく勇斗に襲い掛かってくる。

「！！」

勇斗は右手をあげ、不可視の『力』を放って水の槍を破壊する。だが破壊を免れた槍は、容赦なく周囲を切断する。

切断された街灯が、アスファルトにひびを入れ、めり込んだ。

「な！？　対能力者用に強度が上がってる街灯をこんなあっさり切った！？」

「ふん！！　この程度で驚かれても困るなあ！！　……世界に満ちる四大元素が一、我が声に答え給え！！」

アイザックがそう言うと、さっきよりもさらに広範囲の水道管が弾け、水がアイザックのもとに集まってくる。

「……我が名はアイザック。属性は水。水を統べる力はあの方に比べればまだまだだが、それでもローマ正教でナンバー2だ！！……水の力……とくと味わえ！！」

その言葉の直後、瞬間的に凍りついたたくさんの水粒が空気を切り裂き、散弾のように勇斗に飛来する。

「くっ！？」

翼をふるって氷粒を全て打ち砕き、そのまま翼で空気を叩いて後へ飛び、アイザックから間合いを取る。

「遅いぞ！！」

アイザックは右手を振るって周囲を漂う水から再び槍を生みだし、

勇斗に向かって打ち出す。

「……甘いんだよ！！」

勇斗は再び右手を上げ、『力』を放って破壊しようとするが、

パチン！！　とアイザックが指を鳴らすのが聞こえた。

直後、槍を形作っていた水が、水蒸気へと変わる。

（……！！　体積変化による爆発か！！）

そこまで気付いたところで、水蒸気が撒き散らされた。

「……今の爆発はただの水蒸気爆発ではないぞ。」

水煙が充満する中、アイザックは告げる。

「高密度の魔力と、少量ではあるが『神の力（ガブリエル）』のテレズマ。それを水蒸気に加えて、物理的に撒き散らす。いわば魔術的な衝撃波を喰らわせる術式だ。戦車程度なら、鉄クズにできるだろう。……さあ、どうした能力者。もう終わりなのか？」

と、それに答えるように水煙が吹き散らされる。

そこにいるのは、全く変わらない勇斗の姿。

「終わりとかって……本気で言ってんの？」

「まさか。」

吹き散らされたはずの水煙までが宙を舞い、アイザックの支配下に戻る。

「久しぶりの全力なんでな。この街の破壊を止めたいのなら、この程度では困るということだよ。」

「なら安心しろ。この程度なわけないだろ。」

そう言うと、勇斗は地面に転がった街灯を片手で持ち上げ、構える。

「おれも、本気で行くぞ。」

「！！」

その言葉にアイザックは反応する。

手を広げ、言葉を紡ぎ、再び水槍を作りだそうとした。

しかし同時、勇斗は手に持った街灯を振るって、アイザックに向かって突っ込む。

正確には彼の頭上で形を変えつつある水球に。

振るわれた街灯で叩き飛ばされた水が、霧となって辺りを舞う。

数瞬遅れて、ドバン！！　という轟音が響く。

アイザックは、何が起こったか全く知覚できなかった。

「……音速を超える移動速度、数百キロ単位で重さのあるだろう街灯を振るう腕力……。その力、やはり聖人と同じか……っ！！」

「……らしいな。」

「……くっ！！貴様は一体何者だ！！　この科学の街にいながら聖人と同等の力を振るうとは！！」

「ただの学生だよ。……多分。」

そう言い返すと再び勇斗は構え、告げる。

「生憎、おれは眠いからな。さっさと終わらせるけど、許してくれよ。」

直後、アイザックが何も言い返す間もなく、彼の体が打ち飛ばされる。

超音速で飛び込んだ勇斗が、街灯を横薙ぎに振るったからだ。

「ごがっ！！？？」

吹き飛ばされ、道路を転がるアイザック。

『アドリア海の女王』の保険として学園都市に侵入していたローマ正教の一団は、こうしてあっさり全滅した。

――窓のないビルの内部――

『……なかなか豪快だったにゃー。』

『ま、あいつ身体強化みたいなのしてたし大丈夫だろ。なんかの力纏ってたし。』

『確かにそうだにゃー。……さて、それじゃ後片付けでもするかにゃー。』

『だな。』

モニター越しに勇斗と土御門の話を聞いているのは、『人間』アレイスター＝クロウリーである。

「……魔術現象への感覚鋭敏化。テレズマの制御能力の向上。ふふふ、どれもすばらしい成長ぶりだな、ハイブリッド。」

口元には笑みが浮かぶ。

「残る大きな課題は、内包するテレズマへの自己干渉可能化だが…

……、ふむ、この調子ならすぐにでも克服するだろう。」

そう言って、再びモニターへと目を向ける。

「さて、愚かな魔術師諸君ら。次は一体いつ来てくれるのだろう。」

心底愉快そうに、彼は呟いた。

ep. 24　9月27日（後書き）

戦闘をもっとうまく書きたいです……

ep. 25　9月28日（前書き）

遅くなりました^^;

ep. 25です。どうぞ！

ep. 25　9月28日

「お帰りなさい、上条当麻君……ふっ。」

「今笑いやがったな！！」

「いえいえ。そんなことは……ふふっ。」

「笑ってんじゃねーか！！」

ここは第7学区、いつもの病院に戻って、そのまま入院していた上条を、勇斗と土御門がお見舞いに訪れたところである。

「……また厄介事に巻き込まれやがって、一回研究してみた方が良いんじゃねーか？　不幸。」

「いやー……上条さんも激しく同意ですよ……。なんか、

どっか出掛ける度に事件に巻き込まれてるような気がするなー……。」

「それに関しても激しく同意だけど、カミやんの場合どこにいても事件に巻き込まれるからもうあきらめた方が良いと思うんだけどにゃー？」

「それに関しても激しく同意だな。」

「……否定できないところが悲しくなりますからもうやめて上条さんのライフは０よ！！」

「……まあ、それは置いといて。お前、結局イタリアにいたのはどれくらいなんだ？」

「あっさり置いておかれたっ！？　……イタリア行ってその日の夜に事件あって次の日の朝に超音速旅客機で帰ってきたから２４時間もいませんでしたよ！！」

上条は叫ぶ。

「つーか何なんだよ超音速旅客機(あれ)！！　このケチョンケチョンにされた体であれはねーだろ！？

以下、回想←←

『マルコポーロ国際空港に学園都市製の超音速旅客機が停まっているはずだから。あれだね、最大時速７０００キロメートルオーバーだそうだから、日本まで１時間ちょっとって感じかな？』

『大型旅客機で！？　それは幻のノースアメリカンＸ－１５研究機とかじゃねえの！？　そんな並のミサイルより速い飛行機に何の訓練も積んでない俺が乗れるもんか！！』

『大丈夫大丈夫。実際に乗った僕だから言えるけど、ちょっと無重力を感じる程度だから』

『それを１時間もか！？　胃袋の中身が全部逆流しちゃうと思いますけど！！』

『大丈夫大丈夫。実際に乗った僕だから言えるけど、そんな事を考えている余裕は最初の１０分で消えるはずだから』

『何がどう大丈夫なんだよ！！』

『まぁ、僕から言えるのは１つだけかな。……無理なものは無理だから諦めて帰って来い。』

『いやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

→→以上、回想終わり。

……あれはあり得ないだろ。しかもおかげでインデックスがせっかく科学に慣れ始めてたのに心閉ざしちまったよ。……まあ、あの強烈なGと内蔵の苦しみの中で無理やり機内食頼んでトラウマくらったのはアイツの自業自得なんだけどな。」

「……なんつーか、ご愁傷様。……あ、そういえば。」

「……何だ？　まだこの上条さんに対して何かあるって言うのですか勇斗さん！？」

そう言っておびえる上条に向かって、勇斗は告げる。

「大覇星祭の罰ゲームは覚悟しなさい（はーと）　ｆｒｏｍ御坂美琴……だってよ。」

土御門と共に、勇斗は上条の肩をポン、と叩いて言った。

「「……ファイト。」」

「ぎゃあああああああああ！？　すっかり忘れてたあああああああああああああああッ！！」

病院中に、上条の悲鳴がこだまする。

ひと騒動が落ち着いた後、売店で飲み物を買い、上条の病室に戻った勇斗と土御門。

3人は真面目に話し始める。

「さて、じゃあここで、昨日の1件について話をまとめておこうかにゃー。まずはカミやん、何があったか教えてくれないかにゃー？」

「ああ。ま、一昨日イタリアに行きました。そこで偶然引越し中のオルソラと手伝いの天草式と会って、飯とかごちそうになってたんだが、深夜に突然氷の船が出てきて。それに乗っちまった俺とオルソラはその船の中でアニェーゼってやつと会ったんだ。そいつと別れて1度脱出して、ルチアとアンジェレネってやつとも会って、ビアージオってやつがいるラスダンに乗り込んでやっつけた……って感じ。」

それを聞いた勇斗は、小声で、

「……土御門。」

「何だ勇斗。」

「女と会って事件巻き込まれて事件解決してまたフラグを立てたという認識でオケ？」

「万事、問題ないにゃー。」

という会話を土御門とかわした。

「……なるほど。で、そしたら学園都市の内部に別働隊がいたと。」

「そうだにゃー。それが昨日のあいつらだにゃー。」

「でも何かたいしたことなかったよな、あいつら。」

「……そりゃあ聖人クラスのやつにかかれば楽勝だろうけどにゃー……」

「聖人！？　勇斗が！？」

聞き捨てならない土御門の言葉に、上条は反応した。

「いや、そういう訳じゃねーんだけど。」

「こいつ、能力で翼だけじゃ飽き足らず遂に輪っか出しやがってにゃー。そしたら超音速移動＋超腕力とかっていう聖人（チート野郎）になってたんだにゃー。」

「……もしかして、アレか？」

アレ、というのは、９月１９日、対オリアナ戦で現れた、あの天使化のことだろう。

「いや、まだそこまでは扱えてない。ちょっとさっき確かめたんだけど、昨日の一件でコツをつかんだみたいで、普通に演算して能力発動したら輪っかついてたよ。多分、最近魔術師とばっかり戦ってたから、あのゆらぎの統制も演算領域に入ったんだろ。ただその先は、……多分もうちょっと練習しないと無理だな。」

「そうか……。」

「ま、どうせすぐに戦いが起こる。それくらいの力は持っておくに越したことはないにゃー。」

突然、土御門は低い声でそう言った。

「……どういうことだ？」

上条は問う。

「簡単な話だにゃー。……カミやんがイタリアで『アドリア海の女王』を破壊。勇斗とオレ……ま、オレは居合わせただけだがな、はこっちでローマ正教を撃退。それに以前の『使徒十字（クローチェディピエトロ）』の件。『聖霊十式』で失敗、直接乗り込んでも失敗。そろそろ、アイツらも本気で来るだろう。もしかすると、今この瞬間にも、準備は進んでるかもしれないしな。」

それは当然の懸念だろう。

……

そしてそれはいずれ、現実のものとなる。

……

――――――――同時刻

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。

ここは、ローマ正教の総本山たる世界最大の聖堂だ。

その神聖で荘厳な空気の中、荒々しい足音が響く。

「チッ、結局あのバカ(ビアージオ)が失敗したってコトよ。しかも『アドリア海の女王』の核部分まで破壊されて、二度と再現できないときた！！
……まったく、照準解除の術式を考案し、組み立て、実用にまで漕ぎつけられたのは誰のおかげだと思ってんだか。全く納得いかないわね！！」

「……いくらお前であったとはいえ、あれは少し事を急ぎ過ぎだ。」

暗く、闇の帳(とばり)の降りた中、歩くのは2人。

1人は腰の曲がった男性の老人。

もう1人は19世紀のフランス市民に見られた格好をしているが、色は全身真黄色の出で立ちの若い女性である。

そして、女性が口を開いた。

「アンタ誰にモノ言ってんのよ？　私がやれっつったコトはやんの。それが世界の法則ってモンでしょ。バカバカしい。この期に及んでまだそんなコトも学んでないの？」

「貴様こそ、誰に口を開いているか理解は追いついているか。」

その一言で、場の空気が一変する。

一瞬にして、神聖な空気に、目に見えない威圧感が混ざる。

しかし、

「たかだかローマ教皇でしょ。それがどうしたの？」

女性は再び一瞬で、その場を、空気を、あっさりと打ち砕いた。

「アンタも分かってるでしょ、ローマ正教を動かしているのがいっ

たい誰なのかっていうコトくらい。別にアンタがここで消えようが、別の人間がアンタが今いるその座に就くだけなのよ？　でも私が消えたら代わりは利かない。自分の命でもかけて試してみたい？」

その言葉を聞いた老人――――教皇マタイ＝リースは、女性から1歩分だけ距離を取る。

忌々しさと、同時にわずかな羨望を込めて、彼は呟く。

「く……『神の右席』。教皇程度では響かぬか……」

『神の右席』

それはローマ正教の最暗部に位置する組織の名だ。

元々は十字教社会のピラミッド内には存在せず、歴代の教皇の影の相談役として設置された機関だった。

しかし、歴代教皇が彼らを頼りすぎてしまったが故に、いつしかローマ正教の中心に据えられ、指導者としての権力が逆転してしまった。

「……私が属するその『枠組み』の名前を知ってるってだけでもアンタは割と上部にいるってコトなんだけど。やっぱりそれじゃ満足できないんだ？」

そう言うと、彼女は笑ったまま、言う。

「コイツに目を通してサインをしなさい。」

「……この私に命令形か。……、待て、この書類は……。無知なだけの者達にここまでやるとなると、私もさすがに否定的な意見を述べねば……」

「この私に否定形はない。」

教皇マタイ＝リースの言葉を、女性は一言で打ち切った。

「私は『神の右席』、前方のヴェント。受動形、命令形、連用形、連体形、已然形、未然形、終止形、仮定形、その他。　こいつらはどうでもいいが、私は否定だけは認めない。私がやれっつったコトはやる。例え誰に対してであろうと、その法則は変わらない。だからアンタは書類にサインをする。分かった？」

老人は苦い表情を浮かべながら、小さく頷く。

「よろしい♪」

肯定の意思を確認し、そう告げると、ヴェントは去っていった。

彼女が去っていく後ろ姿を眺めながら、マタイ＝リースは再び書類に目を落とす。

わずかな月明かりのもと、彼は書類に書かれた文面を追い続ける。

そこに書かれているのは、

『上条当麻。上記の者を速やかに調査し、主の敵と認められし場合は確実に殺害せよ。並びに、学園都市内部に確認されている協力者を並行して調査し、必要であれば同様に殺害せよ。』

ということ。

つまりそれは、ローマ正教が総力を挙げてでも上条や勇斗を排除しようとするための申請書類だ。

（……少々早急すぎる。それがあやつの癖だな……）

彼は思うが、彼女が言った通り、彼女に否定形は存在しない。

苦々しくため息をついて自分の居室へ戻り、書類にサインをする。

これをもって、マタイ＝リースの本意には関わらず、上条、そして勇斗の調査、殺害の命令が発効された。

ローマ正教の、科学サイドへの逆襲が幕を開ける。

自分たちのあずかり知らぬところで暗殺が決定された彼らは、互いが持っている情報を共有し、少し話し合いを行い、そして解散した。

「……戦いか。」

病院を出たところで土御門と別れた勇斗は、寮への道すがら、歩き

ながら呟いた。

『きっとそろそろローマ正教(あいつら)も奥の手とか出してくるはずだ。最近何度も言ってるが、この街を守るってんなら……魔術サイドを敵に回すことも覚悟しとけよ。……お前は強い。きっと誰が来ようと、ほとんどの敵はお前の本気でどうにかなる。ただ、お前の本気は、ほとんどが魔術(あっち)サイドの力で成り立ってる。その力を振るえば振るうほど、魔術サイドから狙われる可能性が出てくることを忘れるなよ。』

ついさっき、土御門に言われた言葉がよみがえってくる。

（確かにこの力は、魔術サイドの不興を買うだろうな。なんせ能力者のくせに魔術を使い、その力の源が堕天使の天使(テレズマ)の力と来てるからな。）

そう考えて、薄く笑う。

（……けどな、見くびるなよ土御門。そしてローマ正教ども。おれはこの力で、この街を守る。）

……

（決めたんだ。絶対に負けないと。）

だが、勇斗が歩く路地に、突風が吹きぬける。

……それは、向かい風だった。

あたかも、この先の厳しい戦いを暗示するかのような、強い強い向かい風だった。

ep. 25　9月28日（後書き）

なんかこう、最近地味に忙しいなあ……

ep. 26　9月30日－1（前書き）

ようやく０９３０に突入します。

頑張って書きますので、読んでいただければ嬉しい限りです＾＾

ep. 26　9月30日―1

９月３０日。

残暑が厳しかった９月も、もう最終日となったこの日。

衣替えを翌日に控え、１８０万人以上いる学生の大半が動くため、学園都市の全ての学校で、衣替えの混雑対策として午前授業が実施される。

そんな日の、今は授業と授業の１０分休みの時間だ。

勇斗と上条は廊下の窓を開けて、ぼけーっと外を眺めていた。

「……何だよあれ。退屈過ぎんだろ、数学。」

「上条さんは激しく同意します……、うだー。」

前の数学が退屈で退屈で眠気に襲われていた2人は、休み時間が始まると同時、水飲み場で目覚ましがてら顔を洗ってきたのだった。

「……簡単すぎる。説明が下手すぎだし。」「……難しかったよな。さっぱりだったー。」

「「ん？」」

勇斗と上条が同時に声を上げる。

「……勇斗、お前、今なんて……。」

「え？　簡単すぎる、って。」

「……ダメだ。ついていけねえ……！！」

「……せめてお前はもっと頑張れよ。」

「……言い返せねえ。」

「……」

ポン、と勇斗は、手を上条の肩に乗せた。

「おーす、勇斗。カミやん。」

「おーっす。」

丁度その時、そう言って教室から土御門と青髪ピアスが出てきた。

「おーす。」

「……カミやんはどうして燃え尽きてるのかにゃー？」

「……世のはかなさを嘆いてるのさ。……で、2人してどうしたんだ？」

「ああ、そやそや。ちょっとこれ見てみ。」

と言ったのは青髪ピアス。

彼は、持っていた週刊の漫画雑誌の裏表紙をめくる。

そこには通信販売のカラー広告が載っていた。

「ほら、この欄に『肩もみホルダー君』ってのがあるやろ。」

「だな。」

「気になるねんこれ。ここんトコ右肩の辺りが妙に痛いし、自分で自分の肩をグニグニしとると今度は左の肩が痛くなってくるんや」

「……そういや、これ深夜の通販番組でも宣伝されてたな。」

ようやく復活した上条が言った。

「そやろ！！　こんだけ派手派手に紹介されてるって事は、きっとこの肩もみマシンはものすごく気持ちええんよ！！」

「「「えー」」」

青髪ピアスを除く3人が、同時にうさん臭そうな声を上げた。

「こりゃ多分ブラフだぜい。特に『気持ち良かったか良くなかったか』なんてのは明確な数字で示せるものじゃないしにゃー。やっぱり義妹が1番だにゃー。」

「『あくまでも個人の感想です』ってオチだろうな。」

「……俺としても効果なんかねえと思うけどな。肩こりって一言で

言っても痛む場所、レベルは人それぞれだろうし、男女でも効果が違ったりすんじゃねえの？　それら全部をみんなまとめて『肩こりなら何でも解消！！』って言ってる時点でちょっと怪しいよな。」

土御門、勇斗、上条はそれぞれ反論する。

「そんなの実験してみんと分からんやないかい！！　そもそも肩をもんでくれる女の子がいると思ってんのかよこのシスコン軍曹が！！」

と青髪ピアスが絶叫し、土御門とポカポカ殴り合いを始める。

「……なんて不毛な争いだ。」

「全くだよな……。」

上条が呟き、勇斗が反応した。

「あ」

すると、上条は何かに気づいたようで、土御門と青髪ピアスを引きはがしながら言った。

「だったらこれから実際に試してみようじゃねえか。しょっちゅう肩こりに悩まされていて、なおかつこういう通販グッズに目がない人間を、俺は1人知ってる。」

「誰？」

「吹寄。」

そう言うと、

「吹寄はいるかーっ！？」

教室のドアを勢いよく開け放ち、上条が叫ぶ。

突然の大声に、吹寄はわずかに身を退かせたが、叫んだ相手が上条、青髪、土御門というクラスの三バカ（デルタフォース＋勇斗）であることに気づくと、３人を睨み付け、これから何があっても平常心を保とうと気合を入れなおした。

しかし上条はそこへ、

「一生のお願いだからもませて吹寄！！」

と、誤解しか生まないような一言をのたまった。

（！！？？　凄まじい殺気！！！！）

殺気を感じて震えあがる勇斗をよそに、吹寄は飛び掛かる土御門と青髪ピアスを正拳突きで迎撃し、そのまま流れるような動作で上条に硬いおでこを叩きつけて吹き飛ばす。

それを廊下で見ていて顔をひきつらせていた勇斗に声がかかった。

「はーい勇斗ちゃん。教室入ってくださーい。」

歩いてきた小萌先生は、そのまま教室に入っていく。

「さーて皆さん、本日最後の授業は先生のバケガクなのですよー……って。ぎゃああ！？　ほのぼのクラスが一転してルール無用の不良バトル空間っぽくなってますーッ？」

小萌先生の叫び声が聞こえてきた。

「一体なぜこんなことに！？」

床に上条、土御門、青髪ピアスの3人が転がっているという大惨事

にうろたえる小萌先生に、吹寄は極めてクールな顔で、

「平和のためです。」

と言った。

「一体何があったのですか？　吹寄ちゃんが平和維持部隊みたいになってるのです！！」

「……収拾つけないとな。」

そう呟いて、勇斗は教室に入った。

そして、状況を説明しようとするのだが、しかし、それを上条の声が遮った。

上条は床に倒れたまま、吹寄の顔の少し下を指さして、

「……だって、吹寄さんはすごく気持ち良さそうなのを持ってるのにちっとももませてくれないんですッ！！」

（……ダメだこいつ。地雷踏みやがった。）

その一言で小萌先生は顔を真っ赤にするとバタンと真後ろに倒れ、それを確認するまでもなく吹寄が追撃（とどめ）の拳（いちげき）を握り締め、ゆらりと上条に迫る。

ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！？？　という悲鳴を聞きながら、

「……ご愁傷様。」

と、勇斗は呟いた。

現在時刻は１２：２０。

授業が終了し、下校時刻となり、勇斗と上条は教室を出た。

「……ひどい目にあった。」

と、上条は歩きながら咳く。

「……あれは自業自得だな。」

それを聞いた勇斗は、呆れたように言った。

「あれじゃあどストレートに『胸を触らせてください』って言ってるようなもんだぞ。」

「……反省しております。」

「ならいいんだけど。……ん？」

「？　どうした勇斗？」

「……どうやら姫のお出ましですね。……がんば。」

「……姫？」

勇斗の突然の言葉に混乱する上条。

そんな上条の耳に、聞きなれた声が届いた。

「いたいたいたやっと見つけたわよ！！」

声のしたを向けば、常盤台中学の見目麗しい（はずの）女の子、――早い話が御坂美琴が、ダッシュで接近してくる所だった。

「まさか……、あの飛行機の中で感じた痺れる系の不幸はこれの事だったのか……」

「さあな。」

そんなことを言ってるうちに、御坂が２人のもとに到着した。

「……アンタ、罰ゲームの事忘れてたでしょ？」

「いや、覚えてたけど。たまたま北イタリア旅行が当たったから行くしかなかったんだよ。」

「……まあいいわ。」

御坂は一度ため息をついて、しかし口元にわずかに笑みを浮かべて言った。

「罰ゲームよ♪」

「……不幸だ。」

がっくりと肩を落とす上条。

勇斗は上条の肩に手を置き、無言で首を横に振った。

「ちょっと！！　内容まだ言ってないのに何勝手に絶望してるのよ

！！」

「……どうせ御坂の事だ。『超電磁砲（レールガン）キャッチボール』だの『新技の実験台』だのそんなもんばっかりなんでしょう！？　上条さんはもうわかってるんですよ！！」

「……まあ、確かに。それも最初に考えたわよ。」

その一言に上条がビクッッ！！　っと反応する。

「……まさか、それ以上がある、だと……？」

「違うわよ！！　えっと、……今日1日付き合ってもらおうと思って。」

「「へ？」」

御坂のその言葉に、勇斗と上条はそろって間抜けな声を上げた。

「……ダメかな？」

「うっ……」

上目づかいをまともにくらった上条がうめく。

（……なるほど。ホントに罰ゲームをデートにしたみたいだな、御坂。）

先日のやり取りを思い出し、勇斗の口元に笑みが浮かぶ。

そして勇斗は上条の肩をポンとたたくと、

「楽しんで来いよ。」

と言って、その場を後にした。

去り際、目があった御坂に、グッ！っと親指を立てたら、とても嬉しそうに微笑んだ。

不覚にも一瞬、上条をうらやましく思った勇斗だった。

「……そして携帯を教室に忘れるって言うね……。」

上条と御坂のいる場所から立ち去った後、携帯を忘れたことに気づいた勇斗は、あんなふうに出てきた手前、再び上条と御坂に遭遇するのが何かこう……ちょっとアレな感じだったので、職員出入口の方に向かった。

すると出入り口の前、担任の小萌先生と強能力者（レベル3）程度の能力者なら盾一つで叩きのめすというトンデモ体育系教師黄泉川、そしてもう1人の大人の女性、そして一方通行（アクセラレータ）に打ち止め（ラストオーダー）というちょっと見慣れない不思議（ハーレム？）な状況を、勇斗は見つけた。

「お疲れ様です。小萌先生、黄泉川先生。……よう、一方通行（アクセラレータ）、打ち止め（ラストオーダー）。」

「ン？　おゥ、勇斗じゃねェか。なンだ、ここの生徒だったのか、オマエ。」

「あー！！　また会ったね、ってミサカはミサカはまさかの再会に喜んでみる。」

「お疲れ様なのですよー、勇斗ちゃん。」

「おう、お疲れじゃん、勇斗。」

「……ねえ愛穂。この子は？」

「ああ。こいつはここにいる小萌先生のクラスの生徒で、風紀委員（ジャッジメント）やってる勇斗って言うじゃんよ。……勇斗、自己紹介でもしてやってくれじゃん。」

「あ、はい。わかりました。」

そう言って勇斗は一方通行（アクセラレータ）と打ち止め（ラストオーダー）の横に立っている女性の方を向いた。

「さっき紹介にもあったんですけど……風紀委員（ジャッジメント）やってます、千乃勇斗です。」

「私は　芳川桔梗よ。よろしくね。」

「よろしくお願いしまーす。」

そう言って、勇斗は会釈した。

そして一段落したところで、勇斗は一方通行（アクセラレータ）に尋ねた。

「で……、どうしてこんなところにいるんだ？」

が、一方通行（アクセラレータ）が答える前に、その質問に代わりに答えたのは黄泉川だった。

「ああ、これからはこの私がこの子＋桔梗のお世話をすることになったからじゃんよ。部屋は余ってるし、こっちは居候ができても問題なしだったからね。」

「……あくまで暫定的だがな。」

一方通行（アクセラレータ）はそれに対してつまらなそうに応えた。

「……ま、こんなことは言ってるが、私ん所に住む事になったって聞くと、わざわざ1つ1つ死角を潰して、どんな小さな穴でも塞いで、万に一つも実際に襲撃されないようにしてるからね。多分照れてるじゃんよ。」

「黄泉川ァァァァァァァァァァ！！」

……勇斗はこんなにあっさり学園都市最強（アクセラレータ）をあしらう黄泉川に、尊敬の念を覚えた。

その後、勇斗は黄泉川のマンションに向かうという一方通行（アクセラレータ）達４人、そして職員室へと戻る小萌先生と別れ、教室で携帯を回収し、２回目の下校の途についた。

その途中。

「あ、勇斗先輩。お疲れ様です。」

「あれ……初春か？」

勇斗は初春と会った。

下校途中のようで、まだ制服姿だった。

「ここで会うのは珍しいな。」

「あ、ですよね。」

にこにこと、初春は答える。

「んー……。よし、初春。もう飯食ったか？」

「いや、まだですけど。」

「おごってあげるけど。飯行くか？」

「！！　いいんですか！！？？」

ガバッ！　という擬音が聞こえてきそうな勢いで、初春は顔を上げた。

「もちろん。」

「（……まさか、勇斗先輩から誘ってくれるなんて思ってもいませんでした。）」

「ん？　どしたん初春？」

「いえいえ！　何でもないです！　……ぜひ、お願いします♪」

「おっけい。じゃ、まず私服に着替えてからだな。……30分後に、そうだなー、なんか久々にパエリアとか食いたいなー……。初春、スペイン料理でいいか？」

「はい。いいですよ。」

「よし。じゃあ30分後に　オリャ・ポドリーダ集合でいいか？」

「はい♪　そこちょうど行ってみたかったので、楽しみです。」

「ならよかった。じゃ、また30分後な。」

「はい。」

そして勇斗は初春と別れ、寮へと向かう。

寮では隣人たちの騒ぎを耳に入れつつ（インデックスの咆哮が聞こえてきたのにはさすがにビビったが。）素早く着替えを済ませ、オリャ・ポドリーダへと向かった。

ep. 27　9月30日―2（前書き）

０９３０　２話目です。
今回は初春回ということで……
上手く書けたかどうかはわかりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

ep. 27　9月30日―2

学生寮から徒歩で１０分弱。

オリャ・ポドリーダに到着した勇斗は、初春の到着を待つ。

「……ちょっと早かったかな？」

初春と別れてからまだ２０分。

約束の時間まであと１０分ある。

「……ま、普段の当麻（アイツ）見てるから多少用心深くなってもしょうがないか。」

上条の不幸に思いをはせ、入り口の前のベンチに座って初春を待つ。

それから5分後、初春が到着した。

「あ、すみません。待たせちゃいましたか？」

「いや、大丈夫だよ。じゃ、入るか。」

「はい！！」

嬉しそうに顔をほころばせる初春を連れて、勇斗はレストランへと入っていく。

「いらっしゃいませー！！」

昼時という事もあって、混雑したレストランの中、ウエイトレスの明るい声がする。

「何名様でしょうかー？　……って、初春！？　勇斗先輩！？」

「え！？」「お！！」

初春と勇斗が間抜けな声を上げ、その視線を向けた先にいたのは、ウエイトレス姿の佐天だった。

「おー、なんだ。佐天ここでバイトしてたのか。」

「はい！　そうなんですよ。」

と、佐天はそこまで言うと初春に目を移し、ニヤッ、と笑い、

「……勇斗先輩。ちょっとだけ初春借りますよ？」

「ふぇ！？」

初春に肩を回して、ぐいっと顔を近づけた。

「（勇斗先輩とデートだなんて。やるねえ初春くん。）」

「（……実は先輩から誘われまして。）」

デート、という単語に反応して赤くなりながら、初春は言った。

「（おうおうおう！！　まったくうらやましいことだなあ！！）」

「（でも……多分先輩からすれば、これはあくまでただのお食事会ですよ。）」

少しだけさびしそうに、初春は言う。

しかし、佐天はあくまでも明るく、

「（それでもわざわざ2人っきりで食事連れてきてもらってるんだから。年下とはいえ『女の子』を。もっと自信持って良いと思うよ！！）」

そう言うと、初春の背中を一発、バシッ！！　と叩く。

「（がんばれ初春。応援してるから！！）」

「（佐天さん……。はい、ありがとうございます。）」

そして、佐天が初春を開放する。

「いやー、お騒がせしました。それでは、２名様ごあんなーい！！」

佐天は明るく叫び、勇斗と初春を席に案内した。

「さて……、何食べたい？」

席に着き、メニューを開いて勇斗は言う。

「うーん、一口にパエリアって言ってもいろいろあるんですねー。」

「だな。」

2人の見るメニューには、シーフード、トマト、カレー、和風……と種々様々なパエリアが並んでいる。

「うーん……じゃあ私はシーフードにします。」

「了解。じゃあおれは……トマトだな。」

「あ、いいですね。　先輩、デザートはどうしますか？」

「んー……。お、チュロスのアイス添えとかうまそうじゃん？」

「わわっ。すごくおいしそうですね！！」

「よし、決定だな。」

ボタンを押して店員を呼び、勇斗がパエリア２つ、デザート２つ、それに、トルティーヤを２つ注文し、それを聞いて、店員が戻っていく。

「今日はありがとうございます。勇斗先輩。」

「うん。どういたしまして。」

「優しい先輩がいてくれて、私、すっごく嬉しいですよ♪」

「おーう。言ってくれるねえ。」

「たまには私だって言う事はしっかり言うんですよ。」

「知ってるさ。」

ふふっ、と笑いあう。

穏やかな時間が過ぎていった。

「お待たせしました！！　こちら、デザートになりまーす。」

数１０分後、パエリアとトルティーヤを食べ終えた勇斗と初春のもとに、佐天がデザートを運んできた。

「お、サンキュー佐天。……なんだコレ。頼んでないけど。」

「おっきいパフェですねー。どうしたんですか、これ？」

頼んでおいたチュロスのアイス添えのほかに、大きなパフェが一緒に運ばれてきた。

「ふっふっふ。サービスですよー、お客さん♪」

「……サービス？」

「えっとー。何のサービスなんですか？」

「ふっふっふ。実はこれ！　カップルパフェでーす！！」

「「……カップル？」」

声をそろえて聞き返す勇斗と初春。そんな2人に佐天は説明する。

「実はですねー、このお店では現在カップルご優待期間でして、男女のペアでお越しのお客様にはパフェをサービスしております！！」

と、そこで一旦佐天は言葉を切って、そしてニッコリ笑顔の営業スマイル＆口調で続ける。

「まあ、ただちょっとした条件がございまして。これはあくまでもカップルの方々が対象ですので、サービス提供に当たって『この2人はカップルである』事を証明するために、当店では『はい、あーん』を基準とさせていただいております。……ま、ちょちょっとやってもらえれば、たとえいまカップルでなくても提供できるんですよねー。」

その佐天の言葉に、ふと違和感を感じながらも、勇斗は言う。

「……ならなんでもう持ってきてるんだ？」

「いやー、普通はこういう事無いんですけど、２人を見た店長が持って行けと。」

「……なるほど。」

苦笑して、そしてそう言って初春の方に目をやる勇斗。

「どうする初春。やるかー？」

最初に声をそろえて佐天に聞き返してから静かなままの初春に、勇斗は軽いノリで聞く。

だが、

「……いいんですか？」

と、初春は、ちょっと顔を赤らめ、目を少しだけ潤ませながら、勇斗を見返してきた。

……上目づかいで。

（ぐはっ！！）

勇斗は心の中で血を吐いた。

（この……破壊力は……半端ない……！！）

どんどん顔が熱くなってくる気がして、勇斗はとっさに初春から目をそらす。

視界の隅っこに、顔をにやけさせる佐天が映っていて、それが余計に恥ずかしさを助長する。

（まあ落ち着け……。まずは深呼吸だ……）

すーーーー、はーーーー、と一度大きく深呼吸する。

……ちょっと落ち着いた。

「……うん、もちろんだよ。」

勇斗の自覚としてはちょっとひきつった表情で、……傍から見ればとても嬉しそうな顔で、勇斗は言った。

「っ……！！」

それを聞いた初春は、少しうつむいて、「……やっぱり嫌になったかな？」と勇斗が心配になりはじめたとき、顔を上げて、今まで勇斗が見てきた中で最もいい笑顔で、

「ありがとうございます！！」

と言った。

（……この人達、青春してるなー。うらやましいなーちくしょう。）

２人の様子を脇で見ていた佐天は、そう思った。

「……はいはーい。では、『あーん』をやってくれるという事でおーけーですか？」

「「……おーけーだ（です）」」

少し顔を赤くしながら口をそろえて言う2人を微笑ましく思いながら、佐天はパフェをテーブルに置いた。

「それでは説明させていただきます。条件ですが、男性から女性、女性から男性の両方をやること、とさせていただきたいと思います。では、どうぞ。」

そう言って、勇斗と初春に、それぞれスプーンを手渡す。

「あ……じゃあ私から……。……勇斗先輩。はい、あーん」

初春がスプーンでパフェをすくって、勇斗に差し出す。

「……2人でならまだしも、第三者（さてん）がいる前でこれはかなり恥ずかしいよなあ。」

普段の調子を取り戻してきている勇斗はそう呟きながらも「んっ」と一息で食べる。

「おー。いい食べっぷりですね。」

「どーも。……よし、次はおれだな。」

勇斗はそう言って、スプーンでパフェをすくって、初春の前に差し出す。

「ういはるー。はい、あーん。」

余裕が出てきたのか、自然な感じの笑みを浮かべて、勇斗は言う。

それを見て初春は顔を真っ赤にしていたが、意を決したように、

「んっ」

と、一息で食いついた。

が、そのとき。

パシャ！！　というシャッター音が鳴った。

びくっ、とした2人が音の方を振り向くと、佐天がカメラを構えていた。

「……何してんの？」

「いやー。言い忘れてたんですけど、撮影サービスってのがあったんですよねー。もちろん現像して2人にお渡しいたしますし、微笑ましい写真であれば、店内に飾らせていただきます！！」

カメラ片手に、ニッコリ、いやニンマリとした笑みを浮かべて、佐天は言った。

「あー、今回はとっても微笑ましーい写真が撮れましたので……、これはお店に飾られるかもしれませんね♪」

初春の顔が、一瞬でゆでだこのように真っ赤になった。

「……なんか、精神的に疲れました……」

「奇遇だな初春。おれもだ……」

現在時刻は１４：００．

勇斗と初春は食事をすませ、公園に来ていた。

……というか、写真を撮った後、にやにやしながら勇斗と初春をいじってくる佐天から避難（にげだ）してきたのである。

しかし、もちろん会計で、『あーん』の写真は渡されている。

……写真を手渡す時のレジの店員さんのにやにや顔が、忘れられない。

「……ま、でも。」

勇斗は、渡された写真を取り出して、それを見る。

作り笑いでもなんでもない、心の底からあふれてきたような笑顔で、『あーん』をする勇斗と初春が写っていた。

「喜んでくれたみたいで嬉しいよ、初春。」

そう言って、勇斗は初春に笑いかけた。

「あ、……えっと……」

初春は、顔を真っ赤にしながら、口を開く。

「……はい！！　嬉しかったです♪　この写真、大切にします

ね！！」

にっこりと、笑顔を見せる初春。

「……っ！！」

なんだかおかしい。初春に笑顔を向けられるだけで、顔が赤くなる。

（……さっきのあれで、初春に惚れたかね）

勇斗は心の中で考える。

（……ま、それは……大歓迎なんだけどさ。惚れ直したようなもんだし）

そこまで考えが及んだところで、勇斗に声がかかった。

「勇斗先輩？　どうしたんですか？」

……どうやら考えに没頭しかけていたようだ。

その声で、意識を外面に向ける。

「いやいや。何でもないよ。……さて、これからどうしようか。」

完全下校時刻まではまだまだ時間はある。

別れて帰るという選択肢はさらさら無かった。

今一緒にいて、勇斗は心地よさを感じているから。

そして、それは初春も同じだった。

一緒にいて嬉しい。心地よい。

だからこそ、勇斗に

「よし、もっとどっかにデートに行こう。」

と言われて、断るという選択肢はさらさら無かった。

「はいっ！！」

今日何度目だろう、満面の笑みで、初春は答えた。

ep. 27　9月30日－2（後書き）

そろそろ、次くらいにはもうきな臭くなる予定です。

ep. 28　9月30日－3（前書き）

前話に引き続き、前半は　男性陣が女性陣の笑顔に心奪われる話。
後半は　いよいよ始まる科学ｖｓ魔術の戦いの幕開けです。

ep. 28　9月30日―3

現在時刻は17：00。

勇斗と初春、そしてそれに白井を加えた3人は、風紀委員（ジャッジメント）177支部にいた。

「……なんなんだ、これ。」

「……」

目の前の光景のあまりのひどさに、勇斗はぼやき、初春は言葉を失い目を白黒させる。

「さっさと取りかからないと徹夜になるらしいですわよ。」

「うげっ！！」

「……ですよねー。」

3人の前にあるのは、事務書類と会計書類と指示書類の束、いや山、いや山脈とでもいうべきだろうか……とりあえず、とんでもな

い量の未処理の書類の塊だ。

生半可な量ではない。

「……さっさとやるか。」

「「はい……」」

勇斗がポツリと言葉を漏らし、初春と白井がそれに応えた。

……いったいなぜ、デートをしていたはずの2人が、こんな所でこんな大量の書類と向き合う羽目になっているのか。

少し、時間は巻き戻る。

……

……

……

……

１６：１５

公園を出た後、２人でぶらぶらと散歩しながら、カラオケ、買い物と、一通りデートを楽しんでいた勇斗と初春は、地下街のゲームセンターにいた。

「勇斗先輩、その……、一緒にプリクラ撮りませんか？」

と、初春が勇斗にお願いしたからだ。

特に断ることなく、むしろ喜んで、勇斗は初春と連れ立ってここに来ていた。

「……先輩、今日はほんとうにありがとうございます♪」

プリクラを撮り終わり、現像を待つ間、初春は言った。

「いえいえ。どういたしまして。」

笑って、勇斗は言う。

「初春が今日付き合ってくれたから、おれも楽しめてるよ。こちらこそありがとう。」

「どういたしまして、ですね♪」

ふふっ、っと笑いあう。

ちょうどその時、現像が終わり、写真が出てきた。

「お、よし、じゃあ分けるか。」

「はい！！」

そう言って、２人ははさみの置いてあるテーブルへと歩く。

「……ん？」

「？　どうしたんですか？」

「……いや、何か見慣れたやつらがいる気がする。」

勇斗の目線の先、そこにはどこかで見たようなツンツンうに頭と、某お嬢様中学の制服を着た栗色の髪の少女がいる。

「あれって……、上条さんと御坂さんですか！？」

ちょっと声が大きかったのだろう。その声で上条と御坂がこっちに気づいた。

「あれ……、初春さん？」「……勇斗？」

「どーもー。」「よっす。」

そう言って、勇斗と初春は2人のもとに近づいていく。

「いやー、デートは楽しかったかな、君たち。」

勇斗は上条と御坂に言う。

「「……っ！！」」

その言葉に、そろって2人は顔を赤くする。

「ふんふんなるほど。その様子を見るに、なかなか楽しいデートができたみたいだな。なーういはるー。」

「ですよねー。」

その様子を見て、勇斗と初春はにやにやを深める。

「そっ、そんな……、こいつと、デートだなんて、いや、デートはしたけど……」

うつむいて、耳を真っ赤にして、何事かを呟く御坂。

「なっ、なら！！　勇斗達はどうだったんだよ！？　お前らだってその様子じゃデートしてたんじゃないのか！？」

どもりながら、何とか反撃の糸口をつかもうとする上条。

それらに対して、勇斗と初春は、

「ああ、してたよ。楽しかったさー。な、初春。」

「はい！！　とっても楽しかったですよ♪」

わずかに顔を赤くはしているが、にっこりと笑って、あっさりとそれを認めた。

「もっと素直になれよおまえらー。」

「ですよねー。」

勇斗と初春はそう言った。

……と、そこへ。

「なんだかいろいろととっても面白そうな状況になってるみたいだからミサカも混ぜてっ！！　ってミサカはミサカは背中に飛びついてみる！！」

との声が聞こえ、勇斗の背中に急に何かが飛びついた。

「うおっ！？　この声は……打ち止(ラストオーダー)めか！？」

「正解だよー、ってミサカはミサカは見事正解したあなたを労ってみる。」

背中に加わる、のしっ、とした重みと背中を伝う丸っこい感触。

そのせいで背中がぞわぞわしだした勇斗は、それから逃れるために打ち止(ラストオーダー)めを背中から降ろす。

「あー！！　せっかくの安定感を誇ったミサカの定位置があっさり

拒絶されたっ！！　ってミサカはミサカはわなわな震えてみたりっ！！」

「ごめんごめん。背中ぞわぞわして。代わりにこいつの背中に乗ってなー。」

ひょい、と勇斗は打ち止め（ラストオーダー）を抱き上げると、そのまま上条の背中に乗っけた。

「おー！！　素晴らしい安定感！！　ここ、ミサカの定位置に決定だ！！　ってミサカはミサカは宣言してみる！！」

と、嬉しそうにはしゃいでいる。

ここで、勇斗は残った3人に目を移す。

ちょっとうらやましそうな表情をしている初春。

面食らいながらも、少し複雑そうな表情をする御坂。

何が何だか全く分かってない表情の上条。

（説明しないとな……）

勇斗は思った。

妹達（シスターズ）の件を知らない初春がいるため、あたりさわりのない範囲で説明をした。

・彼女は御坂の従妹である
・学園都市で生活し、能力はレベル３の発電能力であること。
・大覇星祭期間中、迷子になっていた時に初めてあった。

という、少し嘘は混じっているが、まあほとんどは正しい説明だ。

「へー。そうだったんですか。」

初春が打ち止（ラストオーダー）めをじーっと見ながら言う。

「ミサカをそんなにじーっと見ているあなたは誰なの？　ってミサカはミサカは聞いてみる。あ、ミサカは打ち止め（ラストオーダー）って言うんだよ、ってミサカはミサカは自己紹介してみたり。」

「あ、ごめんね。私は勇斗先輩と同じ、風紀委員（ジャッジメント）の初春飾利です。えっとー……よろしくね、アホ毛ちゃん♪」

「！？　ミサカの識別名は打ち止め（ラストオーダー）であってそんな名前じゃないもん！！　ってミサカはミサカは抗議してみたり！！」

その言葉を聞いているのかいないのか、初春は打ち止め（ラストオーダー）のアホ毛を触って、おー、とかやっている。

その様子を勇斗は微笑ましく見守っていたのだが、

「……お、初春。そろそろ行くか。映画始まっちまう。」

ふと、時計を見て、言った。

勇斗と初春の次の予定は映画だったのだが、気づくと時間は少々ヤバい事になっている。

「あ！！　ですね。それじゃあ、また会いましょう、アホ毛ちゃん♪　上条さんも御坂さんもデート楽しんでください！！」

そう言って、勇斗と初春はゲームセンターを出て行った。

「だからミサカの識別名は打ち止め（ラストオーダー）なんだって言ってるじゃないか―、ってミサカはミサカは……」

打ち止め（ラストオーダー）が叫んでいるその横、上条は呟く。

「あの2人って、付き合ってたっけ……」

「多分付き合ってなかったはずだけど……」

御坂が応えた。

「そうか。……仲良いよなアイツら。」

「……うん。」

わずかな羨望が浮かぶ表情で、御坂は言う。

「……御坂。」

「……何？」

「……また今度さ、遊び行こうぜ。誘ってくれてもいいからさ。」

上条は、そう言って御坂に笑いかける。

「……っ！！　うん！！」

最初は御坂も驚いていたが、大輪の笑顔で、その言葉に応えた。

現在時刻は１６：４０。

勇斗と初春は第7学区の映画館の前にいた。

上映開始は１６：５０である。

「よし、チケット買ってさっさと入ろうか。」

「はい！！」

そう言って2人は建物の中に入ろうとする。

……と、そこへ勇斗の携帯に着信が入る。

「ったく、誰だよ……って、固法先輩！？」

急いで勇斗は電話に出る。

「もしもし千乃です。」

『あ、千乃君？　実は、ちょっと頼みたいことがあって。』

「何でしょう。」

『いや、本当だったら非番のあなたに頼むのは悪いんだけど……ほら、今月って何かといろいろあったじゃない？』

「ええ……、まあ。」

『そのせいでかなりの量の書類が増えちゃってるのよ。しかもちょうど前後期の切れ目で書類が多いのに。だから、その事務処理手伝ってくれないかなーと思って。』

「あー……、ちょっと待ってください。」

そう言って、勇斗は1度携帯から顔を離し、初春の方を向いて言った。

「固法先輩からのお助け要請だった。映画はまた今度かなー。」

「あー……それは仕方ないですね。」

残念そうに、初春は言う。

「あ、……私の携帯に連絡入ってました。……あれ？　勇斗先輩にも一斉送信できてますよ？」

「……マジ？」

『それ、やっと気づいたの？　まったく、いくらデートの最中だからって。ちゃんと携帯は確認しなさい。』

なんだか聞き過ごせないセリフが聞こえた気がする。

「……あれ、何でデートしてるって知ってるんですか？　固法先輩。」

『そんなの途中からばっちり見てたからに決まってるじゃない。うらやましいわね、デート。』

「……プライバシーは？」

『風紀委員（ジャッジメント）だからいいのよ。』

「そーゆーのをきっと職権乱用って言うんですよね……」

勇斗は、はー、と一息ため息をついて、

「まあわかりました。これから初春と一緒に１７７支部に向かいますんで。」

『ありがとう。お礼に映画のペアチケットあげるから、今度はこれ使って見に行きなさい。』

「あ、はい。ありがとうございます。では、また後で。」

勇斗は電話を切り、初春に向かって言った。

「と、言う訳で。……行くか。」

「ですね……。」

あはは、と苦笑いを浮かべて、２人は１７７支部へと向かった。

１６：５５

勇斗と初春の２人は１７７支部へと到着した。

「お疲れ様でーす。」「お疲れ様ですー。」

そう言って入り口をくぐり、中に入っていく。

すると中には、ツインテールな常盤台少女白井しかいなかった。

「あら、どうやらお楽しみだったようですわね。」

「うるせー。……で、固法先輩は？」

「坂本先輩と一緒に夕食のお弁当を買いに行ってますの。わたくしも書類は見ましたが、……あれはひどかったですわね。」

「……あの２人＋白井＋おれ＋初春でやって、確実に夕食が必要になるようなレベルなのか！？」

坂本先輩というのは、勇斗の１学年上で、固法と同い年の男の先輩だ。

能力はレベル３の念動力（テレキネシス）である。

……ところで、この風紀委員（ジャッジメント）１７７支部というのは、全風紀委員（ジャッジメント）の中でも、情報処理などの面で非常に優れている。

それはなぜか。

理由として挙げられるのは、その支部にいる学生たちの演算能力による。

レベル４である勇斗に白井、レベル３の坂本に固法とレベル３以上

が４人。

加えて、能力強度自体はレベル１ではあるが、レベル３かそれ以上にもなる演算能力を持つ初春。

これだけの面子がそろっているため、基本的に仕事は早いのだ。

しかし、今回はそんなこと関係なしに時間がかかるらしい。

「あれですわよ。」

と、白井に言われ、白井の指がさす方を見る。

「……なんなんだ、これ。」

「……」

目の前の光景のあまりのひどさに、勇斗はぼやき、初春は言葉を失い目を白黒させる。

「さっさと取りかからないと徹夜になるらしいですわよ。」

「うげっ！！」

「……ですよねー。」

3人の前にあるのは、事務書類と会計書類と指示書類の束、いや山、いや山脈とでもいうべきだろうか……とりあえず、とんでもない量の未処理の書類の塊だ。

生半可な量ではない。

「……さっさとやるか。」

「「はい……」」

こうして勇斗、初春、白井の3人は、いつ終わるともしれない、書類の整理を開始する。

ここで、話は冒頭に戻る。

その１０分ほど後、坂本と固法の２人が弁当を買って、帰ってきた。

「おう千乃。来てくれたのか。悪いな、お楽しみのところ邪魔しちゃって。」

「くそっ！！　ダメだこの人も職権乱用してやがる！！」

坂本の言葉に、勇斗が思いっきり反応する。

「でもまあいいですよ。……この焼肉丼さえもらえればっ！！」

「ばっ！？てめ、それは俺のもんだ！！」

「ははは！！　知りませんよそんなの。初春！！　早く選んで職

権乱用なんかする悪い先輩を困らせてやれ！！」

「はい！！　じゃあ私はこの中華丼で。」

「え、ちょっとそれは私が食べようと……！！」

「「ははは―、自業自得じゃー（です）！！」」

そのバカ騒ぎを横目に、白井は

「……これは、ダメかもしれませんわね。」

と、1人、ため息をついた。

１８：３０

学園都市外部、第３ゲート前。

そこに、全身黄色の服装をした女性と、黒づくめの服装の男性がいた。

「……やっぱりおまえ、ついてきたの？」

「ああ、まあな。」

女性――神の右席、前方のヴェントが問いかけ、男性が答える。

「……私の術式があれば助けなんかいらないって教皇サマには言っておいたんだけどなー。くそ、雑魚が。余計なことを。」

「そうカッカすんなヴェント。アイツの指示じゃねーよ。つーか、俺みたいなやつが教皇様にお呼ばれすると思ってんのか？　この、悪魔の力を使う、俺が。」

「……確かにね。」

「俺の目的は、同類の調査兼お前の手伝いさ。お前が『右席』に入ってからはめっきりなかったから、久しぶりだぜ。」

「ふん。せいぜい足を引っ張らないように気を付けるんだな。……ベラナバス。」

そう、言葉を交わすと、2人は歩きだす。

『外』と『中』を隔てるゲートに向かって。

勇斗達はあの後しばらく現実逃避を続け、さすがにまずいことに気づき、作業を再開していた。

そしてそれから、ひたすら無心に作業を続け、約２時間。

現在時刻は１９：００

「あー……疲れたー……。」

勇斗はそう言って、席を立ちあがる。

「そろそろ晩飯にしましょう。晩飯。」

「んー、そうだな。そうするか。」

など言って、残り４人もそれぞれ立ち上がる。

結局、晩ご飯争奪戦は勇斗と初春の強奪が成功した形で決着がついた。

ので、勇斗が焼肉丼、初春が中華丼を取り、残りの各人も各々の分の夕食を取り、応接スペースに集まる。

「……残り3分の2、くらいですかね。」

作業スペースのテーブルを見て勇斗は呟く。

「だな。まだまだ残ってるぞ。」

「えっと、2時間で全体の3分の1ってことは……やっぱり日付超える羽目になりそうですね……。」

「……全く、だるいことこの上ありませんわね。」

「はあ。夜更かしは健康の大敵なのに……」

それに反応し、坂本・初春・白井・固法の順で返答が帰ってくる。

はああ、と5人そろって大きなため息をついた。

そして5人が夕食に手を付けようとする。

と、その時、

ピ――ピ――と、スピーカーが鳴り、続いて機械の音声がこう告げた。

「第一級警報（コードレッド）を発令します。警備員（アンチスキル）、及び風紀委員（ジャッジメント）の皆さんは緊急事態の対処に当たってください」

突然の第一級警報（コードレッド）の発令に5人は面食らった。

「チッ……初春！　パソコン！！」

「はい！！」

勇斗が叫ぶと、初春はパソコンを起動し、学園都市のセキュリティシステムにアクセスする。

「……来ました！　……18時33分、学園都市の第3ゲートが物理的に突破され、何者かが学園都市内部に侵入しています！！」

初春がそう叫ぶと、残る4人がその画面に注目した。

「……これが、先程監視カメラに映った侵入者の映像です。」

そう言って見せられたモニターには、全身黄色い衣装で身を包んだ人間が映っている。

初春は続けて言う。

「侵入と同時、……おそらくこの人物が放ったとみられる正体不明の攻撃で、警備員（アンチスキル）、及び風紀委員（ジャッジメント）の大部分が壊滅状態になっているようです。……いったい何が……っ！！？？」

「！？　初春！！」

突然、初春がうつぶせに机に倒れた。

すると、それにつられるように、白井、坂本、固法の3人が、同じように倒れた。

「！？　何が起こってんだ！？」

4人の呼吸を調べるが、異常はない。

どうやらただ気絶しているだけのようだ。

しかし、どうやっても目を覚まそうとしない。

（くそっ！！　何なんだよこれは！！）

勇斗は心の中で悪態をつき、そしてパソコンの画面の中の黄色い侵入者の姿をにらみつける。

敵意が、侵入者に向く。

その瞬間。

ゾン！！　と勇斗の脳に、唐突に衝撃が走る。

「が……ッ！？」

全身から力が抜けていく。

体の芯から指先まで、全ての力が抜けていく。

（なんだ、……これ）

と、今度は急速に視界が狭まりだす。

（な、にが……起こってる）

訳の分からないまま、理解が及ばないまま、勇斗の意識が落ちていく。

（ぐ、くそ、が……）

しかし、このまま抗うことができずに終わるかと思ったその時、

ドンッ！！

っという音が響く。

「くそっ……」

声が出る。体に力が戻る。

その勇斗の背には、少し青みがかった無機なる白色の翼が、

頭上には同色の輪っかが現出している。

「……なんなんだ？」

今の瞬間、勇斗には演算をする余裕などなかった。

ほぼ無意識に、その翼と輪っかは現れた。

あたかも、正体不明の、何らかの力によって、体から押し出されたように。

そして、現出と同時、勇斗を縛(いまし)める、その謎の力を破壊して。

「……」

ようやく戻ってきた思考能力をフルに使い、勇斗は考える。

この身に宿る翼に異常が現れるという事が一体何を表すのか。

思い出す。

９月１９日、そして、９月２７日、それぞれ何があったのか。

「多分……」

思考がまとまり、一つの回答が導き出される。

「これは……魔術攻撃だ……」

つい先日の、土御門の言葉は早くも現実となり、今ここに、科学と魔術の死闘の幕が上がった。

ep. 28　9月30日－3（後書き）

累計アクセスは　９０，０００アクセスを超え、累計ユニークも１０，０００人を超えました。
読んでくださっている方々に、多大なる感謝を……＾＾

ep. 29　9月30日－4（前書き）

ちょっと展開が強引過ぎたかもしれませんｆ＾＾；

ご容赦をば……

９／２８　若干ながら改稿

ep. 29　9月30日－4

勇斗は１７７支部を出た。

魔術攻撃であることは分かったが攻撃の原理が分からないため、気絶した４人に更なる危害が起こらないようにするためだ。

（くそっ！！　何考えてやがる侵入者！！　……ッ！！）

ドンッ！！　っと音が響く。

（またか……。）

勇斗は思う。

謎の攻撃を勇斗の力が打ち消す音。

現在、学園都市を覆っている、魔力。

それを源にして放たれる不可視の攻撃を、勇斗が寄せ付けない音。

１７７支部を飛び出した後、何度も何度もこの音が響いている。

故に、必然的に能力使用状態、早い話が翼と輪っかを出しっぱなしの状態を維持せざるを得ず、

（……敵さんからすればもうただの的だよなあ……）

奇襲を警戒しながら、一歩一歩で１０メートル以上ずつ、飛ぶように学園都市を飛び回る。

所変わって、窓のないビルの内部。

モニターに映る、飛び回る勇斗、それぞれ歩き回る黄色づくめと黒づくめの魔術師。

それを見ながら、アレイスターは笑みを浮かべていた。

「これほどまでに早くこの街に来てくれるとはな……愚かな魔術師諸君ら。」

アレイスターは心底嬉しそうに続ける。

「面白い。最高に面白い。これだから人生はやめられない。プランに縛られた現状では、イレギュラーこそ最大の娯楽だな。」

フフフ、と声が、静かなビル内に響く。

「虚数学区・五行機関の展開によるヒューズ＝カザキリの現出実験。ベクトル制御装置へのＡＩＭ拡散力場の数値入力。幻想殺し（イマジンブレイカー）の成長。

ハイブリッドの魔術への自由干渉、そして暗部への再回収。全て、済ませてしまおうか。」

そしてアレイスターは、『作業』を再開する。

生命維持装置の中、動くことなく操作命令を飛ばし、暗部組織へと指示を出す。

「……さあ、魔術師。この街の本質を知るがいい。」

笑みと共に紡がれたその言葉は、闇に消えていく。

学園都市の内部を、勇斗は飛び回っていた。

（……やっぱり。この感覚、魔術だな）

おそらく、学園都市を覆うように広がる魔力を、勇斗は感じ取る。

（まずは術者を探すのが先決。……しっかし、どこにいるんだ？）

魔力が放たれているのは分かる。

しかし、出所がつかめない。

そんなとき、

勇斗は、ふと、魔力を感じた。

（……これは……）

今、学園都市を覆う、『謎の攻撃』から感じる魔力とは違う、これは、もっと禍々しい。

それに、

（……この力、あの時おれが使った力と似てる……）

自分が内包する力と似た力を感じて、力が泡立つ感覚がする。

あの時、９月１９日。

突如現出したゆらぎと、更にそのゆらぎを手掛かりに顕現した、天使の力。

それと、感じる力の根底……根っこの部分がとてもよく似通っている。

（現状での手がかりはこれしかねえ。……行くしかないか。）

勇斗は方向を変え、翼をはためかせ、地を蹴る。

一瞬で、勇斗の姿がかき消えた。

第１８学区。

霧ヶ丘女学院、長点上機学園といった学園都市トップクラスの学校があるこの学区の道。

そこを黒づくめの男、――――魔術師ベラナバスが歩いていた。

降り出した雨に、体をぬらしながら、静かに歩いている。

そしてふと、顔を上げる。

「……来たか、同類。」

彼が顔を上げると、突如、前方に人影が現れる。

背から延びる青みがかった1対2枚の白銀の翼、頭上には同色の輪っかを持つ少年だ。

「……へえ。やっぱりこいつはそっちなのか。」

ベラナバスは、唇を吊り上げ、そう呟いた。

勇斗は感じ取った魔力をたどり、第１８学区に入った。

飛び続ける勇斗の視界を、街並みがすごいスピードで流れていく。

すると、勇斗は前方に黒ずくめの服装をした人物が立っているのに気付いた。

勇斗がたどってきた魔力は、その人物から放たれている。

（……あいつか）

警戒し、十分な距離を取って勇斗は立ち止まった。

「……何の用だ、魔術師。」

勇斗はその人物に向かって話しかける。

しかし、その人物は答えようとせず、肩を小刻みに震わせ笑っている。

「……なるほど。学園都市に天使がいるっていう未確認情報を聞いてはいたが、まさかこいつのことだったとはなあ。なるほどなるほど。」

「聞いてねえし。」

「ああ、いや。悪かったな。ちょっと自分の才能と運の良さに喜んでいただけさ。」

そう言って、その男は勇斗を見据える。

「俺はローマ正教の中の異端中の異端の魔術師、ベラナバス。こんにちは、……いや、こんばんはかな、千乃勇斗君。」

「……！！」

「おっと、そう身構えるなよ。人の名前なんて、ちょっと本気出せば簡単に調べられるさ。」

飄々とした態度で、ベラナバスは言う。

「……そうかい。で、何の用なんだ。」

「……ああ、そうだったね。今回、魔術師がこの街に侵入したのは他でもない。『神の右席』が、直々に上条当麻を排除するためさ。」

「！！　……つまり、この街にケンカ売りに来た、ってことでいいのか。」

「まあ、そういうことさ。けど意外だねえ。君の友達を殺しに来たって言ってるのに、ちょっと驚くくらいだなんて。もっと反応してくれると思ったのに。」

「フン……　今までアイツがしてきたことを考えれば十分予想はできるさ。……それに、アイツはそう簡単にくたばるような奴じゃないからな、なんとかするだろ。それより気になるのは……」

と、一旦言葉を切って、それから勇斗は言う。

「お前の目的は何なんだ？」

じっと睨み、続ける。

「もしお前の目的もそれと同じなんだったら、多分この街を覆ってる魔術の術者と一緒になって暴れまわってるだろ。少なくとも、こんな所で魔力垂れ流しにしたまま突っ立ってるなんてありえない。」

「……へえ、よく考えるね。いかにも、今、街中で暴れまわってるのは上条当麻を殺しに来た『前方のヴェント』だし、この『天罰術式』の術者も彼女だ。そして、俺の目的は若干彼女とは違う所もある。」

ご名答だよ、と彼は付け足し、そして更に言葉を続ける。

「彼女、――ヴェントの目的とは違う方から済ませておこうと思ってね。」

「……で、結局。お前の目的は何なんだよ。」

「君だよ、千乃勇斗。いや、正しくは君の力というべきか。」

ベラナバスは即答する。

「俺は実はローマ正教の中で悪魔について調べる仕事をしていてね。……まあ、だからこそ異端なんだが、俺みたいな人間も必要なのさ。

……神に歯向かいしもの。敵をよく知るためにな。で、そのためのデータが少なくて、色々とデータを集める必要があった。それで……、光を掲げる者たる君に協力してもらいたいんだ。」

「……何故、おれの力が光を掲げる者だと知ってるんだ？」

「ふふふ、何故か。」

ベラナバスは不敵に笑う。

「それは簡単。俺と、君が、同類だからさ。」

「は？」

「呼び出し、借り受けるのではなく、その身に直接堕天使の力を宿し、それを振るうもの。十字教世界における、異端中の異端。さげすまれるべき存在。しかしそれでいて、貴重な検体。故に、深い所で何らかのつながりを持つ。……俺は天才だからな、『力』をたどれば、そういう人間を探すくらい造作もない。……いきなり同類と言われてもわかりにくいか。なら、その目で確かめな。」

反応を返す間もなく、言い終わると同時。

ゾグン！！　と体の内側に直接氷を突っ込まれたかのような悪寒が走る。

ベラナバスの体から、見えない何かが噴き出したのだ。

両足は地面に縫い付けられ、胃袋に鉄球をぶち込んだような感覚がする。

ビリビリと、体の内側が震えるような感覚。

ズバン！！　と、ベラナバスの背中が爆発した。

その背から飛び出したのは、漆黒の翼。

それは圧倒的な禍々しさを秘めた、６枚の翼。

今は夜。

ただでさえ暗い夜の闇、それが一段と濃さを増していく。

勇斗の体が、緊張で凍りつく。

手のひらは気持ち悪い汗でぐっしょりと濡れる。

「何、驚くことは無い。」

あくまで、軽く、ベラナバスは言う。

「この力も、お前が内包する力も、もとは同じだ。ただ、俺のこの力が、光を掲げる者の悪魔（ルシフェル）（だてんし）としての性質を極端に表し、お前が内包する天使（テレズマ）の力が、光を掲げる者（ルシフェル）の天使としての性質を極端に表してるっていうだけなんだからな。」

ハハッ、と笑うベラナバス。

「俺のこの力はまだまだ未完成なんだ。だから協力してくれると嬉しい。……あ、そうそう。別に協力的じゃなくても構わないんだ。たとえお前が死んでいようと力の解析はできるからな。そうすれば、ヴェントの手伝いにもなるし。さあ、どうするんだ？」

「……そこまで言われて、わかりました、とかいってついてく奴がいるとでも思ってんのか。」

「いや、思ってないさ。」

あっさりと、ベラナバスは言った。

「今言っただろ？　お前が死のうが構わないと。……異端中の異端ではあるが、俺だって魔術サイドの、ローマ正教の人間さ。『天罰術式』……神の判断を跳ね除ける、ローマ正教の邪魔をする異教のサルどもなんざ、どうでもいい。つまりだ。」

両手を広げ、空を仰ぐ。

「お前を殺せば一石二鳥だ。取りあえず、死ね。」

死闘は、突然に幕を開ける。

黒い6枚の翼が、勇斗のもとに殺到した。

必殺の翼、それがアスファルトを砕き、土煙を上げる。

「……外したか。」

勇斗は、音速を超えるスピードで、それらを全てかわしていた。

回避しながら、勇斗もその翼を振るうが、全て受け止められる。

翼1枚を構成する力の量は、わずかに勇斗が勝っている。

しかし、勇斗は1対2枚の翼。

対するベラナバスが振るう翼は3対6枚だ。

単純に手数の差で負ける。

現に、勇斗が振り下ろした翼は、４枚の翼で十二分に受け止められ、残る2枚の翼が勇斗に迫ってくる。

「チッ……！！」

地を蹴ると同時、翼の『力』を炸裂させて、勇斗は一気に距離を取る。

「今のは……」

至近で『力』を浴びたベラナバスは不思議そうな顔をする。

「……フン、どうしたよ。」

「……試してみるか。」

勇斗の言葉に対して、ベラナバスは返さない。

ただ、独り言を呟くのみだ。

「おい……ッ！？」

バン！！　とベラナバスの背にある翼が弾け飛ぶ。

全てを塗りつぶす漆黒。

それが、空気を走り、レーザーのように飛んでくる。

「……ッ！！」

幾本も放たれたそれを、勇斗は身体能力でもってかわしていく。

と、レーザーが止み、動きを止めた勇斗は、ヒュッ、という風切り音を聞いた。

見れば、再び現れた漆黒の翼が、虎ばさみのように勢いをつけて、勇斗の方へと向かってくる。

「チッ！！」

勇斗はとっさに、その背の翼で受け止める。

「ぐ……ッ！！」

６枚の翼全てを使ったその攻撃の衝撃全てを受け止めきることはできず、勇斗は弾き飛ばされる。

「……なめんなよっ！！」

弾き飛ばされ足が地に着く瞬間、強く地を蹴り、一瞬でベラナバスの背後へと回り込んで、そのスピードを乗せた蹴りを放つ。

ベラナバスは吹き飛ばされ地を転がるが、それほどダメージは無いようで、あっさりと立ち上がった。

擦り傷を少し負っているが、それだけ。

どうやら、身体強化も十分らしい。

「……その音速を超える移動速度、聖人にも匹敵する。しかし、解せないな。お前の翼を構成するその力。純粋な光を掲げる者の天使（テレズマ）の力じゃないな。むしろ、大元は天使（テレズマ）の力じゃない。……まさかお前、使いこなせてないのか？」

「……ああ、そうみたいなんだ。残念だよ。あんたたちがもっと遅く来てくれてれば、使いこなせてたのかもしれないのに。」

皮肉を言うように、勇斗は言い放つ。

が、それを聞いてベラナバスは、少し安心したように、フッ、と短く息を吐くと、口を開く。

「……運が良かったぜ。面倒になる前にお前を殺せるみたいでな。」

瞬間、ベラナバスの力が跳ね上がった。

「！！？？」

勇斗は、目を見開く。

しかし、反応することは許されない。

ドドッ！！　っと、何かが肉を突き破るような音がした。

見れば、漆黒の翼が2枚、勇斗の胸と腹に突き刺さっている。

「ぐ……ぼッ……！！？？」

血を吐き、そして顕現させる力を失ったのか、勇斗の翼と輪が溶けるように消えていく。

「……で、だ。せっかくだからな。この力、貰ってくぞ。」

体内に直接触れるその翼が、強引に勇斗が内包する天使（テレズマ）の力へと術的なラインをつなぐ。

「ぐ、おあああああああああ！？」

「ハッ、俺の研究の礎になって死ね、千乃勇斗。」

少しずつ、内包する力が移動していく。

（くそ！！　どうにか、しないと……）

少しずつ、少しずつ、天使（テレズマ）の力が翼を伝って、ベラナバスへと流れていく。

猶予は、もう少ない。

ep. 29　9月30日－4（後書き）

次話あたりで、勇斗君覚醒の予定。
こうご期待！！
……ほどほどに。

ep. 30　9月30日－5（前書き）

少し短くなりましたが、なんとなく、ここで区切りました。

物足りないかもしれませんが、急いで続きを上げるので、ご容赦くださいませ

f^^；

ep. 30　9月30日－5

自らを貫く漆黒の翼。

そして、奪われていく自らに内包された力。

「……フン、これだけあれば充分だろ。」

そう言ってベラナバスは、勇斗から翼を引き抜く。

途端、血が吹き出し、支えを失った勇斗は地に転がった。

「……くそ、質が違いすぎるな。いくら元が同じでも、さすがにこれはすぐにはまとめきれないか。」

ベラナバスは吐き捨てるように言う。

（これは……致命傷だ……）

その言葉を感覚の隅で聞きつつ、勇斗は考える。

漆黒の翼は胸と腹を貫き、体の中の重要な臓器、血管、その他諸々のものをことごとく引き裂いた。

その上、とどめとばかりに、内包する天使（テレズマ）の力や魔力も、半分以上奪われている。

意識も、何とか保とうとするだけで精一杯だ。

しかし、それでも意識はどんどんと薄れていき、勇斗を「死」へと誘う。

状況は、絶対絶命。

このままでは、勇斗はいずれ死ぬ。

それは、疑いようのない事実だ。

だが、

（まだ……だ……）

薄れていき、ぼやけ始める意識と視界を気力で奮い立たせる。

力が抜けていく体に鞭打って命令を送る。

（まだ……なんだ……よ！）

投げ出された手に再び力を込め、地面を掴み、強く思う。

立ち上がる。

（まだ……諦めるわけには……いかないんだ！！）

学園都市（このまち）を、

自分にとって大切な人達の居場所を、

……

アイツが笑顔を見せてくれる居場所を、

守るために。

勇斗は立ち上がった。

……そして、世界が暗転する。

自らが呼び起こした漆黒の翼が、目前の少年に突き刺さっている。

その翼を媒介にして、少年に内包された力を奪っていく。

「……フン、これだけあれば充分だろ。」

そう言って、ベラナバスは勇斗から翼を引き抜く。

だが、ベラナバスはその奪った力と自らが持つ力が、競合しているのを感じた。

元は同じもののはずなのに、混ざり合わない。

「……くそ、質が違いすぎるな。いくら元が同じでも、さすがにこれはすぐにはまとめきれないか。」

ベラナバスは吐き捨てるように言う。

しばらく『研究』でもすればまとめられるのだろうが、性質の違いのせいで、今すぐに統合はできない。

無理にまとめれば、反発しあって起爆する危険をはらんでいる。

（まあ、……焦る必要はないだろ。もうこいつには致命傷を与えたからな。ほっとけば勝手に死ぬ。）

そして、地に倒れこんだ少年へと、彼は視線を向ける。

だが、そう考えたベラナバスの視界に、信じられない光景が写りこむ。

自らの翼で貫いたはずの少年――、千乃勇斗が、力を振り絞って、再び立ち上がろうとしている。

ありえない。

自らが放った漆黒の翼は、間違いなく少年の体の内側をずたずたに切り裂いた。

立ち上がるという事など、本来ならありえないのだ。

（……ハハッ、おもしれえ！！　おもしろいぞ、千乃勇斗！！）

ベラナバスの顔に、笑みが浮かぶ。

「……面白いが、だからこそ、……お前はここでぶっ殺す！！」

９月１９日以来、勇斗は超能力ではない力……魔術を構成する魔力、そして天使（テレズマ）の力といった力を、漠然とではあるが、感じられるようになっていた。

だからこそ、この騒ぎの中でベラナバスのもとにたどり着くことができたわけなのだが。

……故に、勇斗は、自らの内に膨大な量の天使(テレズマ)の力が内包されていることにも気づいていた。

だがこれまで勇斗は、どのようにすればその天使(テレズマ)の力を扱えるのかが分からなかった。

一体どうすれば、その力を振るえるのかが分からなかった。

その力を振るえたのは、９月１９日の１件ただ１度のみ。

しかも不完全にしか制御できずに、だ。

しかし……

勇斗の視界が暗転する。

ゾグン！！　と周囲の空気が変質する。

目に映る世界は、勇斗がこれまで見てきたものとは変わっていた。

（……見える……）

勇斗は心の中で思う。

（……前よりも、魔力がはっきりと見える……）

超能力とはまた違う超常現象を引き起こす異能の力。

学園都市の能力者である自分には、本来扱えるはずがなかった力。

それを、その存在を、より強く感じる。

そして……

（……手が届く）

勇斗は確信した。

（今なら、おれの天使（テレズマ）の力に、手が届く。）

根拠などない。

しかし、確信はあった。

勇斗は目を閉じ、意識の中に手を伸ばす。

（……手を伸ばせばそこにあるんだ。掴み取れ！！）

ソレに手が届くと、勇斗は、

……ソレを、握りつぶした。

ソレが、力が、いくつもの光の粒子となって、勇斗の意識に降り注ぐ。

魔術……超能力とは異なる力。

それを受け入れても、勇斗の体には、何の拒否反応も起きない。

ずっと昔から扱ってきたかのように、違和感なく、勇斗の体に馴染んでいった。

ベラナバスは再び、その背の６枚の漆黒の翼を大きく展開し、そしてそれらを真っ直ぐ、血を撒き散らしながら立ち上がった勇斗に向けた。

目的はただ一つ。

加減も容赦もなく、勇斗をただ『消す』。

６枚の翼は、まるで引き絞られた弓のようにしなり、１つ１つが勇斗の急所に正確に定められている。

（こいつが覚醒すれば確実に面倒事になる……！！　……あれだけテレズマを奪っても、それでもまだ聖人クラスの内容量が残ってやがる。　こいつは消す。　今ここで消す！！）

壮絶な笑みを浮かべながら、奥歯をギリギリと噛み鳴らす。

（風穴開けるだけじゃなく、グチャグチャの肉の塊に変えてやる！！）

自らの持つ、光を掲げる者の悪魔としての性質をもった力を、より自らの翼に流し込み、必殺の一撃を放つために、更に力を加えていく。

そして、

それは、

恐るべき威力の一撃となって、

放たれる。

「ハッ！！！！　終わりだ！！　同類！！」

ベラナバスは翼を振り下ろす。

後はこれで残るのは肉塊だけ。

しかし、そう思っていた彼の前で、ソレは起こった。

ガギィッ！！　と、硬い物同士をぶつけたときのような音が響く。

それは決して、肉がつぶれるような音ではない。

その硬い音が、ベラナバスの耳を打つ。

ベラナバスは、目の前の光景に目を見開いた。

「なぜ……」

いよいよ、目の前で起きていることが、彼の思考を超えた。

「なぜ……！」

魔術的な目で見れば一発でわかることなのに、驚愕が、彼にそれをさせない。

「なぜこの一撃を止めることができる！？　千乃勇斗！！」

彼は叫ぶ。自分の理解を超えた出来事に。

彼が全力をかけた翼の一撃。

それが、勇斗に触れることなく、すんでのところで何かの力に受け止められている。

彼は叫んだ。そんな出来事(ふじょうり)に対して。

「な、にが……。まさか……」

少しずつ、目の前の光景を認識し始めたベラナバスに、魔術による知覚が戻ってくる。

それで勇斗を見て、彼は気づいた。

「まさか……覚醒……！？」

さっきまでは感じられなかった、濃密で莫大な天使（テレズマ）の力の感覚。

それが、満身創痍の勇斗から放たれている。

「クソがッ！！　まさか、このタイミングで……！！」

ベラナバスの悪態。

それに反応するかのように、勇斗は血に濡れた顔を上げる。

そして、笑った。

「ｖｒｅｇ前ｂｖｉｖｗ陰ｇｉｊｋｂｖｌ……」

ノイズまみれの言葉。

自分の口から発せられたそれを聞き取った勇斗は、一度目を閉じ、集中する。

するとどうだろう。

あれだけ莫大で、荒れ狂う荒波のようにうねっていた天使（テレズマ）の力が、一瞬で勇斗の支配下に置かれた。

「な……！！　……くっ！？」

驚愕するベラナバスから、勇斗から奪ったはずの『力』、そしてそれ以上の『力』さえも抜け落ち、それらまでもが勇斗の支配下に置かれる。

（他人の力さえも自分の支配下に置く、だと……！？）

再び笑みを浮かべて、勇斗は言う。

「……ありがとよ、魔術師（ベラナバス）。　お前のおかげで気づけたよ。　……自分の力の扱い方に。」

言葉が言い終わると同時、勇斗の背中が弾け飛んだ。

現出するは、９月１９日（いつか）と同じ、水晶のように青く透き通る、鋭い存在感を放つ、２対の翼。

そして、頭上に浮かぶ金色の輪っか。

すなわち、天使の象徴。

更に加えて、勇斗が軽く振った右手に現れた、翼と同じ、透き通る青色の剣。

ベラナバスの物とはまた違う威圧感、存在感が周囲を満たす。

「……さあ、ここから仕切り直しだ、ベラナバス。」

そう言って、そのクリアブルーの剣を構えて、勇斗は笑った。

「こっからは全力で行かせてもらう。　そしてお前をブッ飛ばす。」

笑いながらも、勇斗は強い意志のこもった目でベラナバスをにらみつけた。

勇斗（てんし）とベラナバス（あくま）の戦いが、幕を開ける。

ep. 30　9月30日ー5（後書き）

次回はいよいよ天使化勇斗君ｖｓ悪魔ベラナバスさん決着（予定）です！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2412r/

科学の都市の大天使

2011年10月3日18時35分発行